
平行世界黙示録～黒い波動～

黒棕鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平行世界黙示録〜黒い波動〜

【Nコード】

N7546T

【作者名】

黒棕鳥

【あらすじ】

それはあつたかもしれない「if」のお話：

ウメノキ高校^{うめのみこう}一年桜塚龍^{りゅう}は学校帰りに傷だらけの少女と遭遇する。

さすがに放っておけず、龍は少女を家に連れ帰り、傷の手当てを施すが…

突然襲いかかる『本』を持つ人間と明らかに人でない異形のモノ。

魔界の王の座を賭けた無慈悲のバトルロワイヤルが今始まるうとしていた…！

雷句誠先生原作の『金色のガッシュ!!』の二次創作です。原作とは違う流れで行くつもりです。また、術のネタバレやオリジナルの術もございますので原作ファンの方は注意してください。

第一話 出逢い（前書き）

初投稿です！

よろしく願います！

誤字・脱字等ございましたら指摘していただけるととても嬉しいです。

第一話 出逢い

思えば…あの出会いが俺のその後の運命って奴を大きく変えたんだと思う。

B Y 桜塚龍

…とりあえず目の前の状況を整理してみよう。

龍はこめかみに手を当てながら気を落ち着かせる。

時刻は午後16時ちよいすぎ。

特に部活はやっていないウメノキ高校一年の桜塚龍にとってはいつもの帰宅時間だ。

青春真っ盛りの高校生がなぜ部活をやっていないかというと、なんてことない、一人暮らしで家事やらバイトやらが忙しかったからだったりする。

そついう訳で学校が終わり、友人達と別れ、自分の部屋がある『伊勢海老荘』の門の前まで来たところ…

傷付き、ボロボロになった少女が塀に寄りかかるように座り込んでいた。

こんなお出迎えは今までの短い人生の中でも初めての経験だった。

「えーっと、大丈夫か？」

取り敢えず、恐る恐る声をかけてみるが返事がない。気を失っているようだ。

よく見ると少女の腕や脚、頬に痣やら切り傷が痛々しいくらい刻まれている。

「虐待されて命からがら逃げてきた…とかか？」

勝手な推理をでっち上げながら、龍は少女を揺り動かすが、一向に反応がない。

暫く少女を見つめ、何かを考えるそぶりを見せた龍だったが、やがてやれやれというように肩を竦める。

仕方がない…かと、龍は内心で呟くと、ひょいっと少女を抱えあげる。

季節は夏一步手前といった所。

それでも充分なくらい暑い。ついさっき会ったとはいえ、さすがにこの炎天下の中、ボロボロになって気絶している少女を放置するほど龍も薄情ではない。

家で手当てしてるうちに目を覚ますだろう。
そう龍は結論づける。

それにしても…

「軽いな…何食って生きてるんだ？この子…」

まさか虐待の挙げ句、兵糧攻めか？
なんて妙な考えに及んだ所で視線の先にあるものを見て思考を中断する。

「おっとっと…鞆もあつたか。」

少女が持つにはいささか簡素過ぎる気もする手提げ鞆が少女が座り込んでいた所に落ちていた。

俗にいうお姫様抱っこ状態だった少女を背中に背負い直し、鞆を拾う。なかなかの重量だ。大きめの本といったところだろうか？
ともかく、龍は歩き始めた。

自分の部屋に行く階段を登りながら、龍は今日の献立を考える。
ダルい、カレーでいいか。

頭の中で決定し、210号室、自分の部屋の扉を開ける。

「まさか、誘拐とかに間違われないよな…？」

といった少年の独り言は扉が閉まる音で誰にも届くことはなかった。

・ ・ ・

「近いかな？」

男が側のナニかに問いかける。

「アア、コノマチニゲコンダヨウダ。」

側にいたナニかがやや聞き取り難いモゴモゴした声で返事をする。

「チツ、面倒なことになったな…パートナーが見つかる前に決着をつけなきゃな。」

そう吐き捨てるように言った後、近くに倒れている学生の頭を踏み

つける。

路地裏に立っているのは男とナニかの二人だけ。

残りは皆、地面に伏していた。

「てめえらが悪いんだぜ？喧嘩するなら相手を選ぶんだな。サラリ
ーマンナメんなコラ。」

男はそう言い放つと、ナニかと共に踵を返した。

「覚えてろよ…オッサン…！」

地に伏しながら学生の一人が吠える。

「ああ？」

「バ、バカッ！」

途端に男が物凄い形相で振り向き、他の学生達が怯む。

だが、噛みついた学生は怯まない。

「てめえが戦ったわけでもねえのに偉そうにしてんじゃねえよ…！」

その言葉は完全に男の逆鱗に触れたようだ。

「……！！…カブラ！」

「ヤレヤレダナ…」

カブラと呼ばれたナニかが前に出てくると同時に男が鞆から群青色の本を取り出し、開く。

途端に低い音を立てて群青色の本が淡く輝き始める。

「「ヒッ！」」

「や、やめてくれ…“それ”だけはもうやめてくれよお。」

学生達が恐れおののく。

「ぐっ…」

ただ一人怯まなかった学生は下唇を噛み締めた。

「（冗談じゃない。何だよアレ…人間じゃねえ…）」

群青色の本の光に照らされたその十二かは、まさしく異形、魔物と呼ぶにふさわしいものだった。

・ ・ ・

「さてと…」

とりあえず少女の手当てを終えて、龍は一息ついていた。表立った外傷は消毒、ガーゼをつけ、包帯を巻いた。痣には湿布だ。かなり大雑把な気もするが、自分に出来るのはこれくらいだろう。

寧ろ手当てしているのに向に目を覚まさなかったことに少し不安を覚えた。

もしかしてかなり深刻なのではないだろうか？
傷はそこまで深いものはなかったが…

さすがに服の中までは手当てしていない。というか出来なかった。下手したら通報ものだ。しかしこれでは…

「病院…連れていったほうがよかったか…？」

少し冷や汗気味になりながら龍は少女の顔を覗きこむ。

歳は自分と同じか、一つ、二つ位下あたりだろう。

整った顔立ちに、白い肌、黒髪のロングストレートヘア。真っ黒なセーラー服っぽい服に赤いリボンが付いていた。

この近辺でセーラー服の高校、中学はないハズだし、校章らしきものも付いていない。私服だろうか？

しかし、一体何処から来たのだろうか？

「ん…」

思考の海に沈んでいると、少女が目を覚ましたようだ。ぼんやりした顔で辺りを見回し、龍の顔を見つけると目を見開いた。

「じじは…？」

少女はか細い声で尋ねてきた。

「ここは俺の部屋だ。あんた、このマンションの門前で倒れてたのさ。ボロボロだったから、何だかほっとけなかった。」

「倒れていた…私が…？」

だんだん意識がハッキリしてきたようだ。
すると、途端にハッとしたように辺りを猛烈な勢いで見回し始めた。

「あ、あの…鞆…私の鞆は…？」

「ん？ああ、これ？」

少女の不安げな問いにひょいと鞆を渡すことで答えると、少女はあわてて中を確認し始めた。そんなに大事な物が入っているのだろうか？

少し興味が湧き、少女の動きを見守る。

鞆から出てきたのは、大きな山吹色の本だった。

「よかった…あの、助けてくれて、ありがとう。」

本を確認した少女はホツとしたように息をつく、龍にお礼を言う。
会話にも余裕が出てきたようだ。

「いや、いいさ。それよりあんた、どうして倒れていたんだ？そんなに傷だらけになって。」

龍の問いかけに少女はギクリと体を強ばらせ、小刻みに震える。
目を泳がせながら少女は口を開く。

「あの、その…そ、それより私はどれくらい眠っていたの？」

「だいたい2時間ちよつとかな。」

話を反らされたが律儀に返答する。
すると少女の顔がみるみる青ざめていく。

「同じ場所にそんなに…」

言うや否や、少女は弾かれたように立ち上がる。まだ傷が痛むのか
多少顔をしかめる。

「あの、本当にありがとう。私もう行かなきゃ…あっ！」

少女は何かを思い出したかのように山吹色の本を取り出すと、俺に差し出してきた。

「あの…この本読める？」

妙な質問だ。龍はそう思った。

自分の本なのに読めないのだろうか？
とりあえず本を受け取り、龍はページを開く。

「なっ！」

龍は驚愕に目を見開く。

「ど、どう？」

それを見た少女は何か期待するような目でこっちを見てくる。

「全く読めない。なんだこの本？何語？」

本には見たこともない文字がびっしりと刻まれていた。
当然ただの高校生である龍に読めるはずもない。
それを聞いた少女はシュンと肩を落とす。

「そう…」

どこか落胆したような声をあげて、少女は本を受け取ると、本を鞆にしまう。

「へんなこと頼んでごめんなさい。じゃあ私行くから。」

「あ、ちよつと待て！」

立ち上がり、出口へ向かおうとする少女を龍はあわてて引き留める。

「あんた、本当に大丈夫なのか？さっきだつて震えていたぞ。」

「……」

少女は黙つて龍を見つめている。

「それに怪我もあんなにしていた。あんた…もしかして誰かに追われているんじゃないのか？」

少し深い所まで聞いてきた龍を少女は黙って見つめ、やがてありがとう。と、ポツリと呟いた。

「でもあなたが本を読めなかった以上、私がここにいるとあなたも巻き込んでしまうから…」

ミリアの言葉であればそんなに重要な本だったのだろうか？と龍は内心で驚愕する。

「それってどういう…」

意味？とまでは続かなかった。少女が龍の言葉を手で遮る。

「本当にありがとう。でも私にはもう関わらないで。」

そう言い残すと、少女はスタスタと歩き出す。

やがて、扉の閉まる音と共に少女は出ていってしまった。

少女の少し寂しげな表情が脳裏に焼き付き、暫く龍は動けなかった。やがて、大きく深呼吸したのちに頭を振る。

どんな事情か分からないが、首を突っ込ではいけない気がした。何か根深い問題をかかえているのかも知れない。どのみち自分に来ることはない。

そういつた結論にたどり着きながらも龍はどこかモヤモヤしたものを拭えずにいた。

とりあえず…

「カレー作るか…」

・ ・ ・

「あつ」

伊勢海老荘の門を出てから少女は声を上げた。

「あの人の名前…せめて聞いておくんだっ…」こっちの世界“来てから初めて関わった人なのに…”

どこか残念そうな少女の呟きは空に消えていった。

1時間後…

「ついてねえ…」

龍は悔しそうに通りを歩いていった。

ご飯を炊いた。そこまではよかった。

野菜もあった。肉もあった。なんとローリエもあった。カレーを作る完璧な品揃えだった。なのに…

「カレー粉の箱からGOKIBURIが出てくるとは…」

大誤算だった。あんなものを見たらカレーなんて食べる気にならなくなってしまったものだから、仕方なく外食することにした。

「ん？」

「あっ…」

ふと電柱の陰に何かを見つけて立ち止まる。

そこにはほんの1時間ほど前に出ていった少女が座っていた。

「なにしてんの？」

取り敢えず話しかけてみる。

「え？こ、これは…え〜っと…あの〜…その…」
口ごもる少女に歯切れ悪いな…なんて龍が思った瞬間、ぐう〜っと
いう音が辺りに響き渡る。

「……………」

「……………」

「…………腹へってんの？」

「……………！…い、いえ…」

「腹なってたけど？」

「う…」

「腹減ってるんだな？」

「…ハ、ハイ…」

彼女は悔しそうに答える。お腹が減っても食べないということは所持金も無いのだろう。

しかしまあなんともしべ々な再会なのだろうか…

龍はため息をついた。

「あの…気にしないで…」

そんな顔で言われても困る。半泣き状態だ。
仕方ない…か…今月は厳しいが…
内心で少し葛藤してから龍は口を開く。

「じゃあ来いよ。飯おごつてやる。」

「えっ、本当に!？」

パツと少女の顔が明るくなる。が、すぐにまた暗くなる。

「で、でもだめよ…私といると…」

「あゝもういいからさ。」

グイッと手を引き、少女を立たせ、そのまま引っ張ってく。

「うまい所があるんだ。きつと気に入る。」

少しでも少女の暗い影を払拭したくて、多少強引になった自分に一番驚いていたのは、他ならぬ龍自身だった。

・

・

「へい、おまち。」

「サンキュー、オツチャン」

「バカヤロウ、マスターと呼べ。」

バーじゃないんだからマスターはないだろうが…と内心突っ込みながらも龍の口元が緩む。

屋台のラーメン屋「閻魔蟋蟀」。どうも食欲を減退させそうな店名だが、味は確かで、龍はこの常連客だった。さっきのやり取りも慣れたものだ。

「いただきます！」

「……………」

目の前に置かれた湯気の立った焦がし醤油ラーメンに龍の顔はほくほくだ。

対象的に隣の少女はポカンとした顔でラーメンを見ている。

「うはっ！うまい！」

「……………あの……………」

「ハフハフ…ん？どした？食べないのか？」

「これ…何？」

カラン

と、箸が落ちる音がした。

「……ラーメン知らん？」

「へえ…ラーメン…」

ラーメン知らないってお嬢様か？お嬢様なのか！？
と内心で絶叫を上げながら龍は頭を抱える。

「ま、まあ食べてみるよ。うまいから。」

「うん、いただきます…」

少女はちゅるちゅるとラーメンを啜る。

「……！！……お、美味しい……！」

「だろ？」

少女は目を輝かせながらあっというまにラーメンを平らげてしまった。

「あの、ありがとう。こんなに美味しいもの食べさせてくれて。」

「いや、いいさ。」

お礼を言う少女を見て、少しホツとしながら龍が答える。さっきまでの暗い顔が少し和らいだように見えた。

「しかし…龍ちゃんもスミに置けねえなあ…こんな別嬪さんを…」

「ウィガル!!」

ラーメン屋のオッチャンが漏らしたからかいの言葉は、謎の叫び声に掻き消された。

「へ？」

「ッ!!…伏せて!!」

途端に少女の顔が青ざめて、龍に覆い被さる。

凄まじい風と轟音と共に衝撃が襲ってきた。

突然の事態に龍は混乱する。

「ッ痛つてゝ。どうなってやがる？」

起き上がると、屋台は滅茶苦茶だった。

「！！… オツチャン！オイ！オツチャン！無事か？」

「バ、バカヤロウ… マスターと呼べえ…」

無事らしい。取り敢えず安堵する。

視線をずらすと、少し離れた所にサラリーマン風の男と…
龍は自分の頬を引っ張りなくなった。

男の隣にいるのはどう見ても人間には見えない。

見た感じは全身紫色の体で顔が恐竜、体が人間（皮膚は鱗状）、手が力二だ。気持ち悪いことこの上ない。

「見つけたぞ。女。いや化け物といった方がいいかな？」

「カクゴシロ…」

男がサディスティックな笑みを浮かべ、隣の怪物がモゴモゴした声で喋る。てか喋れたのか…

隣を見ると、少女は震えていた。
まさか…こいつらに傷を負わされたのか…？
龍は直感した。

「龍ちゃん、嬢ちゃん！ひとまず逃げろ！俺は警察呼んでくる！」

そう言い残してオツチャンは走り去っていった。グズグズ考えている余裕は無い。

「逃げるぞ！」

龍は少女の手を取り走り出した。

「逃がすかよお！ウイガル！！」

男が再び叫ぶと、群青色の本が輝き、怪物の片手の鋏から風のような衝撃波が迸る。
幸い狙いがそれ、近くのゴミ箱が吹き飛んだ。

「ウイガル！」

「うわああ！」

「キヤー！」

「ばっ、化け物だあ！」

「くそっ、無差別かよ！もっと…もっと人がいないところに…」

無差別に衝撃波を飛ばす怪物と、巻き込まれた通行人の悲鳴を背にして龍は必死に走る。少女の手に冷や汗がにじんでいるのも感じ、なおのこと必死になる。とにかくあいつらはヤバイ！ただの直感だが、龍の脳は間違いなく危険信号を発していた。

・ ・ ・

「ハアツ…ハアツ…フーツ…撒いたか？」

肩で息をしながら龍は辺りを見回した。町外れの原っぱ。奥にはそこそこ広い林がある。いつそ林に隠れるか…いや、それよりも

「なあ、あいつら何なんだ？色は違うけど、あんたが持ってた本と

同じものも持ってたぞ。」

林に移動しながら龍が少女に問いかけると、少女は一瞬迷ってから話はじめた…

「…簡単に言えば…魔物。この世界に送られてきた、100人の魔物の子よ」

・ ・ ・

「ココダ。ドウヤラオクノハヤシニハイツタヨウダナ。」

カブラと呼ばれた魔物が鼻をひくつかせながら言う。

「チツ！サツを撒くのに思ってたより手間取ったぜ…隣にいた若造はパートナーか？」

「マダワカラン。シカシユダンハシナイコトダ…」

「わかってるって。さて…やるかあ！」

再び群青色の本が輝きを放ちはじめた…

・ ・ ・

「ま、魔物…？」

ポカンと口を開け、信じられないといった顔の龍。

その様子を見て苦笑いを浮かべながら少女は続ける。

「信じられないのは無理無いわ。でも本当よ。魔界からこの世界に送られてきた魔物の子達は、この世界に一人だけいるパートナーを探しだし、互いの本を燃やしあう」

「何のために？」

「魔界の王の座を賭けてよ。100人の魔物の子達は皆王の候補生。千年に一度行われている王を決める戦いが、今行われているの。」

「…てことは最後に残った一人が…」

「次の王よ。」

「パートナーってのは何で…？」

「この世界で私達は人間を介してでなければ魔法が使えないの。さつきも見たでしょ？アレが魔法よ。」

そう言って少女は山吹色の本を取り出す。

「その本が燃えたらどうなるんだ？」

「魔界に強制送還されることになるわ。」

少女は淀みなく答えていく。

「あんたも…魔物なのか？見た目はまんま人間だぞ？」

「色々な魔物がいるの。私みたいな人型や、さつきのやつみたいな獣型とか…色々だね。」

あんなのが100体と考えただけで龍は寒気を覚えた。

「私はまだパートナーが見つかってないから、戦えないの。それを知ったあいつらにさんざん追い回されてたって訳。」

やれやれといった仕草で少女がこっちを見る。

真剣な眼差しが龍を射ぬく。

「あなたはもう逃げて。無関係のひとを巻き込みたくないの。」

「あんたは？」

「……………」

「…震えてるじゃねえか。」

「…怖い…怖いわよ…中には平気で相手を殺そうとする奴らだって…」

少女は自分の両肩を抱きながら震える声で答える。

脳裏によみがえるは思い出したくもない記憶。友と信じていた者の殺意に満ちた姿。
信じたくなかった。

でも紛れもなく現実で…

『一度…一度やってみたかったの…殺すつてのがどういったものなのかを…私、あなたが憎くて憎くてたまらなかったから…』

自分の肩を抱く少女が龍にはやけに小さく見えた。

「とにかく、あなたは逃げて！今ならまだ間に合うわ。殺されるかもしれないのよ！」

「それはあんただって…」

同じじゃないか！という言葉がでる前に、物凄い音を立てて近くの木々が撥ね飛ばされた。さっきの風のような衝撃波だ。

「！！！」

「来たのね…」

少女は本を鞆に入れ直し、こちらを見る。

「私…向こうの世界ではあまり親しい人いなかったんだ。両親も早くに亡くしてね…義理のお父さんやお母さんはちよっぴり冷たい人達で…ベタな話よね…でも本当なの」

少女は自嘲的に話し始めた。

「だから、あなたに親切にしてもらえて、とても嬉しかった。」

少女が悲しげに微笑む。

「……………」

龍はなにも言えなかった。

少女は龍の方を見つめ続ける。

「……………名前」

「え？」

「名前教えて欲しいわ。あなたの名前…」

「龍。桜塚龍だ。」

「リュウ…龍…いい名前ね。」

少女が噛み締めるように呟く。

「龍…色々ありがとう。ラーメン美味しかったわ…ちゃんと逃げてね。さよなら…」

そう言って少女は走り出した。

「……………」

残された龍は近くの木に寄りかかり、ずるずると崩れるように座り込んだ。

何も出来ない。

いや、出来るハズがない。

（本当に？）

相手は得体の知れない化け物だ。

生身で敵うハズが無い。

（あの子は生身で立ち向かっていったぞ？）

あいつだって魔物だ！俺は何も出来ない。あの時と同じだ。逃げるしかない。

（逃げてお前は納得するのか？）

する！生き延びられる！

（嘘だね、お前は納得しない）

自問自答する龍の脳裏に忌まわしい記憶が甦る。

『龍ちゃん！逃げなさい！走るのよ！生きて！』

『何で逃げた！お前のせいで…お前のせいで竜美は…！！』

両頬を叩く。バシンという音と、頬に走る少しの痛み。
龍はフーツと息を大きく吐き出す。

逃げるのは…逃げるのだけはもう懲り懲りだ…

一瞬でも逃げると考えた自分に腹がたつ…

片方は人間だ。自分でも何とかなるかも知れない。

心は既に固まっていた。

・ ・ ・

「ヒャーツハハハ！ウィガル！」

「うぐっ！」

空気を切り裂く音と共に衝撃波がミリアを襲う。

曾根村はご満悦だった。

呪文を唱えるたびに目の前の少女が撥ね飛ばされるのは堪らなく愉快。美しい少女というのがまたいい。曾根村は生粋のサディストだった。

「ソネムラ…アマリアソブナ…サツサトホンヲ…」

「まあいいじゃねえか！カブラ！もうちょっと楽しんだってさ！相手は魔法が使えるねえんだからよお！そうだ！ちよっとキツいのお見舞いするかぁ！」

カブラの言葉を見殺して曾根村は更に楽しげに笑い、本を頭上に構える。

本が更なる輝きを放つ。

「（ここまでね）…」

その光を見たミリアは内心で呟く。

「（魔界に帰っても一人も同然…いつそこで死んだ方がマシかしら…？）」

そんなことを考えるミリアの瞳にはもつすでに諦めの色が宿っていた。

ミリアは静かに目を閉じる。

「ウィガル！」

曾根村の叫びで一際大きな風の衝撃波が走り、ミリアが倒れていた場所に炸裂する。

凄まじい音を立てて土埃が舞う。

「ハッハッハア！ころしちゃったか？」

高笑いをする曾根村とは対照的にカブラは冷静に土埃を見据えて言う。

「マダダ、サツキノオトコガ、カンイッパツデタスケダシタラシイナ！ハヤシノナカニコロガリコンディッタヨ。」

「ああん？くそっ！」

曾根村が忌々しげに土を蹴る。

カブラの言葉を聞いた曾根村の顔はおもちゃを取られた子どもそのものだった。

・ ・

・
思っていた衝撃は来ない。死ぬってこんな感じなのだろうか？

「オイ！オイ！しっかりしろ！！」

目の前に見知った顔があった。

「リ…龍？どうして…？」

「逃げたくなかった…ただそれだけだ…」

「たったそれだけ！？バカげてるわ！あなたには何の関わりもないのよ！？」

「一緒にラーメン食った！」

「は！？」

「そいつが目の前で死にそうになってんのに見捨てられるわけねえだろ！！」

少女はもはや開いた口がふさがらない。

「バカね…本物のバカだったのね…あなた…。もう少しクールな人かと思っただわ。」

少女の両目から止めどなく涙が溢れだした。

それが歓喜からくるものだとは少女は微塵も気がつかなかった。

「なんとでも言え」

ブスツとした顔で龍が答える。

そして二人は顔を見合せ、初めて本当の笑顔になった。

瞬間、低い音を立てて山吹色の本が静かに輝き始めた。

「へ？」

「……まさか！」

少女は本を取りだし、龍に見せる。

「読める？」

恐る恐る少女が聞く。

「なあ…この本を誰かが読めるなら、アンタも戦えるんだよね…？」

龍がニヤリと笑った。

・ ・ ・

「イタゾ…」

「てめえ！人のお楽しみ奪いやがって…ゼツテエー許さねえ！！」

龍に向かって曾根村が吠える。

「ああ、そうかい、そいつは悪かったなあ…」

龍が立ち上がると同時に低い音を立てて山吹色の本が輝く。
その隣に少女が並ぶ。

「!!」

「チッ！パートナーナツタカ…！」

「しるか！ぶっ飛ばすまでよ！」

曽根村が喚きながら負けじと群青色の本が輝く。
曽根村が口汚くどンドン捲し立てるが、龍にはもうどうでもい
とだった。

「そっだ！」

「何？」

龍が思い出したように言い、少女が答える

「俺、あんたの名前まだ聞いてない。」

「あっそういえばそうね。」

うつかりしてたばかりに少女が手をポンと叩く。

「ミリアよ。ミリア＝マドレーヌ。ミリアでいいわ。」

「顔は和風なのに名前洋風なのな？」

「よくわからないけどそれは侮辱かしら？」

「いやそんなことはないさ…綺麗な名前だ。」

「ありがとう。」

軽口を叩きあう

「ウイガル！！」

曾根村が吠え、カブラの片手の鋏から風の衝撃波が迸る。

「よろしくな、ミリア」

「こちらこそ、龍」

衝撃波が迫る。

同時に山吹色の本が一際大きく輝く！

「第一の術…ギルシルド!!」

第一話 出逢い（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
次回から登場人物の紹介や、オリジナルの術の解説を行っていかう
と思います。

第二話もよろしく願います！

第二話 月下の死闘（前書き）

バトル描写初めてです…

ぐだぐだだったらスイマセン（- - ;）

第二話 月下の死闘

赤って色が嫌いだった。

でも今日見た赤は思わず見惚れてしまうほど綺麗だった。

B y 桜塚龍

「第一の術…ギルシルド!!」

龍が呪文を叫ぶと同時に、ミリアが片手を前に出す。

瞬間、黒い閃光が走り、逆五芒星が刻まれた円型の盾が出現する。
龍とミリアへ向かうはずだった風の衝撃波は遮られ、轟音と共に消滅。

未だに顕現する盾には傷ひとつ無い。

「出た…これは…盾を出す術…なのか…?」

術が出てホッとしたのか、いささか気の抜けた声で龍が呟く。

「みたいね。でも気を抜かないで!まだ来るわ!!」

ミリアの視線の先には、完全に頭に血を上らせた曾根村の姿があった。

・ ・ ・

せつかくの呪文も当たらなければ意味がない。術を遮られた曾根村はすこぶる不機嫌だった。

「チツ！ちょこざいな盾出しやがって！！」

曾根村が喚き、群青色の本が輝き出す。

「そんな盾、粉々にしてやらあ！ウィガル！ウィガル！ウィガル！！」

再び、今度は立て続けに放たれる風の衝撃波。しかし、それらは龍やミリアに届くことはなく、ことごとく漆黒の盾に阻まれる。結果、曾根村は更に頭に血を上らせる。

「こんちくしょうがあ！！ウィガル！！」

曾根村は狂ったように呪文を連発する。

とにかくあの盾を砕く。曾根村はそれだけを考えていた。

・ ・ ・

「くそっ…連発してきやがった…このままじゃ…」

相手の術を防ぎながらも、龍には焦りが生まれていた。向こうからは見えないだろうが3発目の風の衝撃波で盾が軋みをあげ始めたのだ。

何とか反撃をしたくてもそれはそれで問題があった。

こちらが使える呪文は、盾の呪文のみだからだ。

第一の術というから第二、第三の術もあるのかと思っただが、山吹色の本のどのページを見てもギルシルドと書かれた一節以外は読める箇所は見当たらない。

現状、龍達は攻撃する呪文は持ち合わせていないのだ。つまり攻められない。

それでも龍は必死で思考を巡らせる。

何か…何か手は無いか…

「大丈夫よ、龍！」

唐突にミリアが激励するように叫ぶ。
多少の焦りを浮かべた龍とは反対に、ミリアには少し余裕が見られた。

「盾が壊されたならまた呪文を唱えればいい。このまま奴らが術を連発してくれるなら好都合よ！」

「どういう意味だ？」

ミリアの言い分を龍はいまいち理解できない。
そんな龍を見てミリアは微笑みながら言う。

「私達の術はね…無限に出る訳じゃないの…どんなエネルギーもいずれば枯渇する。たとえそれが本の持ち主の心の力でもね！」

・ ・ ・

呪文を乱発しながら曾根村は齒噛みする。

ようやく盾を壊してもまた呪文を唱えられ、鬱陶しい盾が出現する。
曾根村の苛立ちは頂点に達していた。

「クソオ！もつとだ！もつと特大のウィガルを…！！」

そう言つて曾根村は本の輝きをいつそう高める。

「（マズイナ…）」

激昂する曾根村とは対照的にカブラは冷静だった。
これではジリ貧だ。このままいけば自分たちは負ける。
カブラは憤怒の表情の曾根村を横目で見て溜め息をつく。

この男は心の力のパワーはなかなかだが、頭の力は最悪だ。
と、二週間くらいの付き合いであるカブラは分析していた。
前回の戦いでも考えなしに呪文を連発するものだから危うく敗北するところだった。

「（ジョウキョウハヨクナイ…ソレニ、アノタテ…ナカナカツヨイ…）」

何発か目でようやく破壊したと思つたら、また展開されてしまった。
これではこちらの心の力が切れてしまう…

町の不良やら変な名前の屋台を壊した分もある。
そろそろ限界も考えられる。

「スコシマテ、ソネムラ！」

突然、カブラが曽根村を制止する。

「ぜえ、ぜえ…何だ…？」

少し疲れた顔の曽根村が答える。

「コノママデハラチガアカン、”アノジユツ”ヲツカエ！」

「…！！…チツ！わかったよ…！」

一瞬嫌そうな顔になる曽根村だったが、すぐに”その術“を使うことに同意する。このままではラチが明かないことは曽根村も充分承知だった。

どちらかと言うとウイガルの方が使っててスカツとするから”こっちの術”はあまり好きではないんだけどな…

などと考えながら曽根村は本に心の力を込め始めた…

・ ・ ・

「心の…力…？」

龍はポカンとした顔になる。

「そうよ、怒り、悲しみ、嬉しさや使命感、とにかくあらゆる感情のエネルギーそのものが術のエネルギーの源になるの。あいつらは結構術を使ってるわ。限界も近いハズ…」

ミリアかそう推理した瞬間、風の衝撃波の嵐が止む。

「！？」

「心の力がなくなっただのか…？」

龍は一瞬そう考えたが、直ぐに間違いだと気付く。

曾根村の本はまだ群青色に輝いていた。

「第二の術…シザルグ…！」

「グオオオオ…！」

曾根村の呪文叫びと共にカブラの両手のハサミが鋭くなり、嫌な音の後に青いオーラのようなものが灯る。

「マズイ…よなあ？アレ…！」

変化したカブラを見て龍が問いかける。

「マズイわねえ…アレ…！」

ミリアがひきつった笑いを浮かべながら答える。

飛び道具相手なら盾は有効だ。だがあの術はどう見ても接近戦用だった。

「さっきの盾って自由に動かせそうか？」

「分からない…手を向けた前方にしか展開出来ないかも…」

マズイ、すこぶるマズイ…

「イクゾ…!!」

そうこうしてるうちにカブラが踏み込んでくる。

「ジェアア!!」

「うおっ!!」

「くっ!!」

雄叫びと共に降り下ろされた一撃を二人とも間髪で避ける。
が、直ぐに次が来る！

「ギエア!!」

二発！

「ジェア!!」

三発！

「ゼアア！」

四発！

次々と嵐のごとく連撃が叩きこまれ、次第に二人は追い詰められていく。

今や転がり、飛び、何とか避けている状態だ。

「（このままじゃこっちが不利ね…）」

ミリアは思考を巡らす。

せめて…攻撃呪文のひとつでもあれば…！！
無い物ねだりとわかってても考えてしまうことに軽く下唇を噛んだその瞬間、紫の怪物が隣接する。

「ゲエアア！」

「ミリア！」

「（しまった！）」

一瞬の思考が命取りになった。
カブラの鉄の一撃がミリアに迫る！

「ギルシルド！」

が、間一髪盾が間に合い、凶刃を受け止める！
受け止められた衝撃でカブラが半歩後ろに下がる。
その隙に龍はミリアを抱え、林の方へ走った。

「（林の中なら鉄もあまり振り回せないハズ…）」

「ニガスカア！」

が、稲妻のような速さですぐ後ろまでカブラが迫ってくる。人一人抱えてる分、向こうの方が速い。

「（ヤバイ…！やられる…！くそっ…せめてミリアだけでも…）」

背後で鉄が振り上げられる気配がする…
だが今の龍には避けきれるほどスピードはない。
万事休す…

「龍！呪文を！」

ミリアが抱えられながらも背後に手を伸ばす。

龍はもはや反射に近い感覚で呪文を唱えた。

「ギルシルド！」

「グオオアア！！」

背後からガツン！という盾に何か大きなものが衝突する音が響いたが、振り向いている暇は無い。

龍は無我夢中で林の中へと転がるように走り込んだ…

・ ・ ・

「グ…オオ…オノレエ…」

カブラがヨロヨロと立ち上がる。

予想外のダメージにシザルグが解けてしまった。

「だ、大丈夫か？カブラ…」

そんなカブラに曽根村が遠慮がちに話しかける。

カブラは首を左右に振り、ゴキツゴキツと不気味な音を出す。衝突の衝撃で歪んだ視界が唐突にクリアになる。

「モンダイナイ…ソレヨリソネムラ、ジュツハ…アトナンカイウテル？」

「…二回位だ…」

カブラの問いに曽根村が答える。

正直心許ない。が、いちいちカブラはそんな素振りは見せない。

「ナラバソノニハツラスベテ“シザルグ”ニソソグ…シヨセンヤツラハ…タテシカダセン。」

「OKだ。…しかしまあ笑えたぜ…あいつら盾しか出せねえもんだから面白いぐらい逃げ惑ってやがったぜ…」

カブラが平気そうで安心したのか、ヒッヒッヒと笑う曽根村。

次だ…次で決着が着く…
そしたら、俺も混じってあいつらをボコボコに殴ってやろう…
あの男の目の前で女の魔物を殴るのはきつと爽快に違いない…
曽根村はニヤリとサディスティックな笑みを浮かべ、カブラと共に歩き始めた。

・ ・ ・

「ゼエ…ゼエ…ミ、ミリア…大丈夫か？」

座り込み、満身創痍の龍が問いかける。

「ええ、大丈夫よ。てか途中で下ろしてくれれば龍ももっと楽しかったでしょうに…抱えたまま走るから…」

心なしか頬が赤い…
さすがにお姫様抱っこは恥ずかしかったのだろう…

「ゼエ…ゼエ…無我夢中だったからな…てかさっきは助かった…マ

ジでもうだめかと思ったぜ…ちょっと涙目になったぞ…」

臨死体験一歩手前までいったにしては意外と冷静(?)な龍であった。

「さっき使ってみて分かったんだけど、ギルシルドは動かすことは出来ないけど、任意の場所に出現させることが可能らしいわね…」

体についた土を払いながら。ミリアが分析する。
さっきの連撃で土やら泥、かすり傷でお互いボロボロだ。

「なるほど、で、さっきはあの魔物の目の前に出現させて激突させたって訳か…」

「ご名答。とりあえず今は逃げましょう…私達にはまだ攻撃手段がない…」

そう言ってミリアは龍に手を差し伸べる。
が、龍はミリアの手を取り立ち上がった後、首を振る。

「いや、あいつらは心の力がもう少ないハズなんだろう？ だったらここですって…」

龍の発言に一瞬ミリアが呆気に取られた顔をするがすぐに慌てたような表情になる。

「な、なにいつてるの？攻撃呪文は…」

「第二の術が出た。」

「え？」

「さっき確認したんだ。」

「い、いや、でもそれがどんな術か分からないじゃない！」

ミリアが反論する。

「そうだな…でも今あいつらはこの事を知らない…」

「でも…」

ミリアは不安そうだ。

「相手が知らない今こそがチャンスなんだ！意表が突ける！ギリギ

りまで引き付けて、この術を撃ち込もう！」

「……………」

龍の提案にミリアは暫く沈黙していた。

・
・
・

林の中を突き進むと、前方に黒衣の少女と制服を着込んだ少年が連れだって立っていた。

「ミツケタゾ……」

「へへ……観念しなあ！」

龍とミリアを見つけ、心底愉快そうな顔で曾根村が笑う。
が、その顔には目もくれず、龍は不敵な顔で言い放つ。

「観念するのはお前らさ！心の力だってもうほとんど無いんだろ？」

「……！」

「ハ、ハン！何でたらめいってやがる！」

龍の問いかけに対してカブラは沈黙を貫いたが、曾根村は悲しいくらい動揺していた。

「（やっぱりね…しかしまあこんなに分かりやすいなんて…）」

ミリアはカブラに思わず同情の視線を向ける。

「（キツカレタカ…マァイイ…コノジュツデキメテヤロウ…）」

最後の戦いを暗示させるかのように、山吹色の本と群青色の本が同時に輝き始める。

「シザルグ！」

「ジェアア！！！」

先に動いたのは曾根村達だ。
術の詠唱と共に再びカブラの両手の鍔が鋭くなり…

「オオオオオッ!!」

凄まじい勢いで突進をかける!が…

「ギルシルド!!」

「…ッ!」

突如カブラは急停止し、大きく後退する。視線の先には漆黒の盾。それも今まさに自分が飛び込もうとした絶妙な位置に逆五芒星の盾が出現していた。

「フン!オレノジメツヲネラツテイルノカ?ダトシタラザンネンダツタナ!オナジテハ…」

敵の策略を看破したカブラは盾を鼻で笑い、再び踏み込む!

「ギルシルド!!」

「クワヌ!」

後退、迂回に横っ飛び！
体勢を立て直したカブラは二つの缺をぎらつかせ、再び標的へ疾走する…

「くそっ…！ギルシルド！」

「ムダダ！」

焦った龍を嘲笑うかのようにカブラは再び後退・迂回！

缺の間合いまであとわずか…

龍に更なる焦りの表情が浮かび、本が強く輝く。

「（マタ…クルナ…？）」

カブラは直感した。

本の輝きを見ればいつ盾が来るかなど大体わかる。

後は後退・迂回すればいいだけのこと…本の光が強くなった…そら、来るぞ…

「ギルシルド！」

「ムダダトイッテイ…」

後退！うか…

「グガッ！？」

完全に回避を確信したカブラに再び衝撃が走る。

「バカ…ナ…」

「カブラ！」

曾根村が叫ぶが時既に遅し…

逆五芒星の盾は彼が迂回に横っ飛びをするであろうところまた絶妙な場所に配置されていた。

・

・
・
数分前のことだ

「わかったわ…」

戦うと主張する龍にミリアが頷く。

「ミリア…」

「でも！」

安堵した表情になった龍にミリアが言葉を重ねる。

「でもギリギリまで引き付けるのはダメ！奴らの心の力が残り少ないなら、今度は本を持った龍に狙いをつけるハズよ！危険すぎるわ…」

「だったらどうしたら…」

と言う龍にミリアがニッとイタズラっぽい顔を浮かべる。

「罾を仕掛けましょ。さっきの要領でアイツを盾にぶち当てて動きを止めるの。そこに第二の術を撃ち込む！どう？」

「なるほど！いい案だ！でもあいつらも警戒してるんじゃない？」

「その時は…そうね…意表をつく場所に盾をはってやりましょ！」

罾の案を考えるミリアは何処か楽しそうだった…

・ ・ ・

「オ…ノ…レ…！！」

「まさか盾の向きまで変えられるとは思わなかった？残念ね。」

よろめくカブラに不敵な笑みでミリアが告げる。

普通の盾に衝突したならまだいいが、生憎、カブラが衝突したのは“術を受け止め、消滅させる”魔力の込められた盾である。二度の衝突のダメージは大きく、動きが完全に止まる。

「今よ！龍！」

「おう！」

山吹色の本が一際激しく輝きを増す。そして…

「第二の術…ミジヨル！！」

ミリアの手がドス黒い焰のようなもので包まれ、妖しく輝く。

同時にそこから不定形の黒い波動の奔流が迸る！

「グガッ！…グオオオオオオオオ！！」

黒い波動に侵食され、カブラは曾根村の方まで弾き飛ばされた。

「カブラ！カブラア！」

曾根村は信じられなかった。まさか自分達が負けるなんて夢にも思わなかった。

なぜ…なぜ…ここで終わるのか？せつかく手に入れた力を満喫していたというのに…！もうだれにも笑われることはない…！そう思っていたのに…！！

もう俺は負け犬じゃないんだ…そう思っていたのに…！！！！

「や、やったか…？」

龍が勝ちを確信したその時…

「ガ…グガッ…」「カブラ！」

カブラが起き上がった。

「ソ…ネムラ！ジュモンド…！」

「お、おう！」

やった…！

俺はまだ負け犬じゃない…！

再び群青の光がよみがえる。

あいつらを血祭りにあげて…それを証明する…！！

「シザルグ！」

「ジイイッアアア！！」

鉄を振りかざし、魔物が再び雄叫びを上げた。

「そ…そんな…」

ミリアが震えながら絶望の顔を見せる。

「諦めるな！ミリア！まだ術は出せる！もう一発だ！」

山吹色の本が煌めき、龍が呪文を叫ぶ！

「ミジヨル！！」

再び放たれる黒い波動は寸分たがわずカブラを飲み込んだ。

だが…

魔物はまたしても起き上がった。

「グッ！…グフフフ…ドウヤラソノジュツ…ミタメニハンシテ、イ
リヨクハ…ヒクイヨウダナ…」

よろめきながら再三カブラが立ち上がる。

「く…そ…」

「よ、よし！よし！！いいぞカブラ！そのままスタボロにしちまえ
！」

龍が悔しげに齒噛みし…

曾根村が狂喜する。

もう…打つ手は無いのか…？考えろ…！何か無いか…？

龍が必死で思考を研ぎ澄ませる前に
カブラが突進すべく再び踏み込む。

「コンドコソ…オ…ワ…リ…ダ……………」

が、それが完全に踏み込まれることはなかった…

ドサッ！

「！」

「！？」

「ナ……」

「え？」

突然カブラが倒れたのだ……

「ナ……ナンダ……？カラダガ……ウ……ゴ……カン………」

「……なんだ？何が起こった？」

「恐らくは術の効果ね……あいつ自身が戸惑ってるもの……」

戸惑う龍にミリアが答える。

「さてと……」

ミリアが曽根村を睨む

「今まで……散々いたぶってくれてありがとう……たっぷりお礼してあげるわ……」

妖艶、それでいて恐怖を与える表情だった。

「ヒッ……！」

もはやカブラが倒れた時点で戦意を喪失していたのだろう。

ガタガタと震え出す。

「本を置いていきなさい……そうしたらまあ……毎晩追いかけて回すのは許してあげるわ……」

「……！！！」

もう、見てるこっちが悲しくなるくらいの震えっぷりだった。

数秒後……その場には火の付いた群青色の本だけが残されていた……

「ミジヨルで本燃やせるんだな…ライター買う手間が省けた。」

「そうね…」

龍の独り言に何処か疲れたようにミリアが答える。

視線をカブラに移すと徐々にカブラの体が透けているのが見えた。

「あんな感じで消えるのな…」

「…そうみたいね…」

途端にミリアが崩れ落ちる。

「お、おい！」

「大丈夫よ。結構あいつらに追いかけて回されてたから…気が抜けちゃって…」

「…そうか。」

微笑むミリアと少し安堵した龍の視線が交差する。

「龍。」

「何だ？」

「一緒に戦ってくれてありがとう…」

照れくさそうにミリアが笑う。

月明かりに照らされる赤い瞳が印象的で、龍は素直に綺麗だと感じた。

「こちらこそ…ありがとな、ミリア。」

月の下で二人は固く手を握りあった。

こうして、龍とミリア、二人の最初の戦いが幕を下ろした。

第二話 月下の死闘（後書き）

登場人物紹介？

桜塚龍さくらづか りゅう

ウメノキ高校一年

16歳

本編の主人公。ミリアの本の持ち主。

本の色は山吹色。

年のわりに冷静な性格の少年。だが、根底には熱い部分があり、たまに垣間見える。ある事件をきっかけに両親と疎遠になり、今は一人暮らし。そのため家事全般は比較的得意。黒髪で短髪、顔はそこそこ整った少年。学業、運動は並からちよい上。本人はただの器用貧乏と自負している。が、有事の際はかなり頭が回り、洞察力に優れる…のだが、初陣では余り発揮されなかった…今後に期待。

ミリア＝マドレーヌ

15歳

黒髪のロングストレートに白い肌、赤い瞳の美しい少女。幼い頃、早くに両親をなくし、またある事情から義理の両親や周りの人間に疎まれながら生きてきた。

人間界に来てから、数少ない友と思っていた魔物に殺されかけ、若干他人に不信感を持つ。

基本優しいが、怒ると物凄く怖い。

術

第一の術 ギルシルド

ミリアの第一の術。任意の場所に逆五芒星の刻まれた円型の盾を出現させる術。最大の特徴は視界の及ぶ範囲なら何処にでも向きを問わずに展開できる点。相手の目の前に突然出現させ、障壁としても利用できる。

第二の術 ミジヨル

ミリア第二の術。手から不定形の黒い波動を出す呪文。威力はそんなに高くはないが、相手の体力や魔力を削り取る効果があり、受けつづけると徐々に衰弱していく恐ろしい術。ただ、魔物相手では衰弱の時間はそこまで長くなく、短時間で回復する。

第三話 近づく心（前書き）

第三話です！更新が大幅に遅くなりました（- -;）
週一更新を目指したいです…
感想などありましたらよろしくお願いします。

第三話 近づく心

もう逃げたくない。

逃げるのだけはこりこりだ

B y 桜塚龍

すすり泣く声が聞こえる。

可哀想に…まだ若かったのに…

将来が楽しみだったわ…

よりもよって出来の悪い方が生き残るなんて…。

俺は…生きてちゃいけなかったのか…？

「ウメノキ市…？」

「そうよ、母さんが大学時代はそこにすんでたのよ…龍も今年で中学生だし、一人暮らしを経験してみるのも悪くないんじゃないかしら。」

「そうだな、きつといい経験になるぞ。この辺はいい大学はそんなに無いしな。向こうの環境にも早めに慣れた方がいいだろう。」

「……………」

今から大学？向こうに慣れる？素直にいなくなって欲しいって言えばいいのに…

「あつ…でも嫌なら別に…」

「そ、そうだな…無理はよくない。」

その言葉を聞いて龍の心は決まった。

「楽しそうだし…行くよ。」

ここにいるよりはずっと気が楽そうだ。

「そ、そう！じゃあ手続きしておくわね！」

「龍、頑張れよ！」

「……………」

・ ・ ・

「……………ハッ！」

まだ朝日も登っていない時間に龍は覚醒した。

……………最悪な目覚めだ。

よりもよってあの時の出来事をそのまま夢にしくたっていいじゃないか。

高ぶった心を落ち着かせるために深呼吸をする。

時計を見ると、午前4時。いくらなんでも朝起きるには早い。

寝直すか…

と思っただがふと視線を感じる。

視線？俺は一人暮らしだぞ？

この部屋に俺以外の視線なんてあるわけ…

「…龍？」

あつた。

漆黒の髪に赤い瞳。つい昨日、命をかけて共闘した少女が、何処か遠慮ぎみにこちらを覗きこんでいた。

一人暮らしのマンション。

部屋なんか余ってる筈もなく、だからといって同衾するわけにもいかず、女子を固い床に眠らせるのも何だか気が進まなかったものだから、龍のベッドを貸していた。

ちなみに龍はすぐ近くの床に即席の布団タオルケットを敷き、毛布を被っている。今日辺り布団をもう一組買った方がいいかもしれない。金があったらの話だが。

「…あの…大丈夫？凄く魔されてたわ。」

と、心配そうに問いかけてくるミリア。
ありがたいが、龍の関心は他にあった。

「大丈夫だ。それより変なこと口走ってなかったか？」

「いいえ、特には…ただ苦しそうに唸っていたわ…」

それならよかった。そういった所はあまり人に見せたくはない。

「そっか…起こしちゃって悪かったな…」

「大丈夫よ。もともと私、眠りが浅いの。一回寝てもちよっとした物音とかで起きちゃうの。」

ホッとした龍に少し自嘲的な雰囲気で返すミリア。

義理の両親に疎まれていたという話を聞いた。

それと何らかの関係があるのだろうか？

「ラーメンを死ぬほど食わされる夢をみてな…昨日ラーメン食べたからかな？」

何処か暗い雰囲気になりそうだったので、余り優秀とは言えない脳

味噌を絞ってシュールな夢を話してみる。

一瞬ポカンとした顔をしたミリアだったが、すぐにクスツと微笑み、

「変な夢ね…でもあんなに美味しいものをたくさん食べられるなんてある意味幸福じゃないかしら？また食べに行きたいわ。」

どうやらラーメンをかなり気に入ったらしい。

「なら、また食に行こう。あそこ安いし、うまいしで文句なしだ。」

「嬉しい…約束よ？ところでさ…龍…。」

顔を綻ばせたミリアが少し口ごもる。

「どうした？」

「目が…完全に覚めちゃったわ。もし迷惑じゃなかったら、何かして遊ばない？こっちの遊びに少し興味があるのよ。」

願ってもない話だ。龍自身も少し目が覚めてしまっていた。

「いいぜ。俺も目が覚めちまったしな。」

そう答えると龍は毛布から這い出し、机から小さな箱を持つてくる。

「トランプって奴を教えてやるよ。」

龍はそう言つとカードを取りだし、シャッフルをする。

シンプルだが遊びというジャンルの中でこれほど多種多様な遊び方があるものはないだろう。

ミリアが珍しそうにトランプを眺めている所を見ると、魔界にはトランプは存在しないのだろう。

色々なゲームを出すたびにミリアが驚く顔をするのを想像し、自然に口元が綻ぶ。

いつの間にか最悪な夢のことは頭の中から消えていた。

・ ・ ・

少し前の夜―

「どい…？どいにいるの？…」

何処かの路地裏で少女はさ迷い歩いていた。

探し人があるのか、周りをキョロキョロしながら不安げな表情をする。

ペチャ…

ふと、少女の足元から水の跳ねるような音が響く。

「……………あなたが悪いんだからね…。私はただ質問しただけだったのに…」

そこにあるモノに少女は語りかける。

原型が殆ど無いが、それは確かに人。人の死体だった。

「早く…早く見つけなきゃ…」

うわごとのように少女は眩き、フラリ…フラリと酷く不安定な足取りでその場を後にした。

少女がさっきまで立っていた場所は、そのモノが…人だったモノから流れた血で真っ赤に染まっていた。

・ ・ ・

朝日がカーテン越しに射す中で龍とミリアの二人は朝食をとって

た。

「でも…本当に驚いたわ…カードの束であんなに沢山の遊びが思い付くなんて…人間って結構暇なのね。」

ブルーベリージャムが満遍なく塗られたトーストを頬張りながら、ミリアが感慨深げに呟く。

「魔界にはああいった遊びは無いのか？」

暇という解釈に思わず吹き出しそうになるのを抑えて龍が聞く。

時刻は7時。

結局、朝までありとあらゆるトランプゲームをやり尽くして過ごした。

「…無いわね。基本的に追いかけてこしたり、ボールを投げ合ったり、植物で遊んだり…かしら？私は本とかを読む方が好きだったけど。」

少しだけ考えてミリアが答える。

人間と魔物もそんなに変わらないんだな…というのが龍の素直な感想だった。

事実、目の前の少女が魔物ですと誰かに言っただとしても、誰も信じ

てくれないだろう。

見た目が人って所も大きいが、よく神話やらで目にする神様や悪魔のように人間より遥かに超越した精神を持つている訳でもなく、ゲームの魔物のように本能に忠実な獣じみた性質なわけでもない。

普通なのだ。

最も、彼女も含めて魔物と言うものを二体しか見たことがないので一概には言えないが、あのカブラと呼ばれていた魔物も、見た目や声こそアレだったが、思考は驚くほど人間的だった。

下手したら傍らにいた男より頭がよかったのではないだろうか？

「本ってどんな本読んだ？魔法の本とかか？」

「小説よ」

「グフツ！！」

危うくパンを喉に詰まらせる所だった。

てか、魔界にも小説があるのか。

ますます人間界と変わらない。むしろラーメンがないのが不思議だ。

「り、龍？大丈夫？」

「だ、大丈夫だ…パンが喉に詰まりそうになっただけ。」

「…クスツ、おっちょこちょいね。」

「失礼な。魔界にも小説があるなんて予想外だったんだよ。」

しばらく、他愛のない話をしながら朝食をとる。こんなに長い朝食は龍には久しぶりだった。

「ご馳走さまでした。」

「お粗末さまでした。」

そうこう考えているうちに朝食を食べ終わる。

「さてと…じゃ、俺学校行くから、留守番頼むぜ。」

「…は!?!」

靴を取り立ち上がると、ミリアがまるで雷にでも打たれたかのように

な顔でこっちを見る。

「え？人間も学校行くの？てかその間私は？」

「あつ……」

こんな顔もするんだな〜とか思っている場合では無かった。
確かに自分が学校に行っている間はミリアは何もやることがない。

「えーと……今日だけ我慢してくれないか？学校終わったらこの街案内するからさ。そしたら明日から俺が学校いない間も平気だろ？」

「……わかったわ……私もこの辺は分からないし、下手に歩き回って帰れなくなっても困るし。」

しばらくうつむいたミリアだったが、すぐに顔を上げて頷く。

一瞬寂しげな表情になった気がしたが、見間違いだっただらうか？

「悪いな、じゃあ行ってくる。」

「待って！」

部屋を出ようとする、ミリアに呼び止められる。

「どうした？」

「途中まで私も行くわ……」

・ ・ ・

「ここにも……いない……」

朝日が眩しいなか、少女のうわ言のような声だけが空に吸い込まれる。

「う…朝はやっぱり苦手だわぁ…くらくらスル…」

少女はフラフラしながら、路地裏をさ迷う。やがて良さげな隠れ場所を見つけ、そこに潜り込む。
はつきり言ってボロボロな廃ビルだが、日光は充分に遮れる。

「夕方まで休んで…それから探そ…」

かび臭い床の上にゴロリと横になり、目を閉じる。

「絶対…絶対に見つけてあげるわ…」

血だらけの服を愛しげに撫で、少女は意識を手放した。

・ ・ ・

「なあ…ミリア…途中までって言っ てなかったか？」

龍の問いかけにミリアはギクリとした表情になる。

もはやこの坂を登りければ学校って所にまでミリアはついてきていた。

今は登校時刻。

通学路には同じウメノキ高校の制服を着た学生が多数。そんな中をセーラー服（微妙に違うが）を着た少女と連れ立って歩く龍は自然と目立っていた。

「えーっと…その…人間の学校…見てみたくて…あの坂の上にあるのがそうなの？」

好奇心に負けたらしい。

少し恥ずかしそうにミリアが学校を指差す。

「ああ、そうだ。何かあったらあそこに来るといい。」

最も、何かとちよくちよく来られてもそれはそれで考えものだろうが。

「うん、わかった。私、この辺で帰るね。場所知れてよかった…あつ、それと…」

そういうとミリアは持っていた鞆を開けると、中から山吹色の本を取り出す。

「これは、龍が持ってた。…無くさないでね。」

龍は本を受けとると鞆にしまつ。確かにこれは自分が持ってた方がいいだろう。

「家…帰れるか？」

迷子になっているミリアを余り想像できないが、一応聞く。

「ええ、大丈夫よ。街案内、楽しみにしてるわね。」

そう言つとミリアはもと来た道引き返し始める。あの様子だと大丈夫だろう。龍も学校に足を向ける。

「龍！」

不意にミリアに呼び止められ、振り向く。

「気をつけてね。いつてらっしゃい。」

満面の笑みと共にそう言い残し、ミリアは走り去っていった。暫くミリアの後ろ姿を見送り、どこか温かい気持ちになりながら、龍は学校を目指す。
足がいつもよりも断然軽い気がした。

・ ・

・
「裏切り者。」

教室に入り、自分の席に座ったとたん、いきなり吐かれた台詞がこれだ。

「山口、朝の挨拶はおはようだろ？裏切り者って挨拶は無い。」
「やかましい！桜塚！俺は…俺はな…今猛烈に絶望している！」

龍が冷静に返すとクラスメートの『山口五郎』は百面相のごとき顔芸を見せながら龍に詰め寄る。

山口はこっちに來て以來、中学からの知り合いで、何かと龍と話すことも多い友人だ。長男なのに祖父に五郎と名付けられてしまった苦勞人でもある。

「お前には岩本がいるだろ！なんだあの黒髪ロングの美少女は！？」

もはや半泣きで喚く山口。どうやらミリアとの朝のやり取りを見られていたらしい。

てか、何でこいつはこんなこの世の終わりみたいな顔してるんだ？

「あの子は……ただの知り合いだよ。」

「…う、嘘だ！今の間は何だ？今の間は！」

「うるさいな…てか、何で岩本が出てくるんだよ。」

取り敢えず話の流れを変えるために別の話題に持って行く。

「いや、そりゃ…お前…」

「おはよー桜塚君！山口君！」

急にどもる山口。そこにのんびりと間延びした声が響く。

これまた中学からの知り合いの『岩本雪音』が現れた。

のんびり屋で温厚な性格の彼女はこっちに來たばかりの龍を何かと気にかけてくれた優しい女の子である。

「おはよ、岩本。」

「よ、よう…」

山口が何故かおどしているが、ここは気にしないでおう。

「ねえ、何の話してたの？」

雪音が龍と山口を見比べながら尋ねる。

「ん、いや、何でもないよ。」

取り敢えずこれ以上変に騒がれないために龍が答える。

「えっ？でも黒髪ロングの美少女が…」

「さっくらっづか！」

雪音の話をへし折って誰かが会話に割り込む。…うるさいやつが来た

「桜塚くん、メール返信してくれよ。僕寂しかったんだよ！？まあいいや、どうだい？今日ゲームセンター行かないかい？」

「悪いな、今日は予定がある。」

「お、おおゝなんてことだ！僕と桜塚クンとの交流より重要だと言
うのかい！？」

「そうだな。」

「ノオオオオー！！」

このやたらとうるさい男は水城直樹。これまた中学からの…以下略
だ。

取り敢えず濃い。やたら濃い。

さらにこいつは学年トップの成績、容姿端麗。非の打ち所がないイ
ケメンときた。だがこの性格が災いして変人呼ばわりされている。
それでも、彼に惹かれる者は後を絶たない。
少女漫画にでも出てきそうな奴だ。

「裏切り者共おゝ」

まだ言うか山口、てか裏切り者共って…

「なんで桜塚や水城の近くには女の子がいるんだゝ！！」

もはや血の叫びである。

「フツ…キミは濃いからね…」

「お前にだけは言われたくないわ〜!!」

漫才が始まった。

「あ、あのね桜塚君、黒髪ロン…」

「うーし！席に着け。HR始めるぞ」

そつこうしてるうちに岡田先生が来て会話は中断となる。

「悪い、岩本また後で。」

「あ…あつう…」

雪音の悲しげな呻き声と共にHRが始まった。

・ ・ ・

淀みなく授業が終わり、放課後となった。

ミリアも待ちくたびれているだろう。さっさと帰ることにする。

山口は部活、水城は委員会の仕事があるらしい。

「さ、桜塚君！一緒に帰ろ！」

振り向くと雪音がいた。

「ああ、いいぜ。」

龍の二つ返事で二人は校門へ向かう。

「あ、あのさ、桜塚君、今日時間ある？」

門に向かう道すがら雪音が尋ねる。

なんだか何時もより落ち着きがない。

「ああ、悪いな、予定が入ってるんだ。」

「あ、あうう…そっか…」

「本当にごめんな。」

落胆した表情を見せた雪音だったが、すまなそうな顔の龍を見て、首を左右にブンブン振る。

「う、うん！いいんだよ！急だったもんね！予定って、どこかに遊びに行くの？」

「ん…まあ…そんなとこ。」

雪音の質問に龍が曖昧に答える。

それを見た雪音は、『あの事』を聞くならんだ！と直感する。

「あ、あのさ、桜塚君！黒髪…」

「龍〜！」

校門に差し掛かった所でそこに寄り掛かるようにして立っていた少女が龍に話しかけてきた。

「ミリア？家じゃなかったのか？」

「そろそろかなって思って、ここで待っていたの…」

二人の会話を見て雪音が固まる。

「ちょうどいい、じゃあそのまま行くか。」

「ええ、楽しみだわ。」

龍の言葉に少女が微笑む。なんだろうこの雰囲気…

「悪い、岩本。俺そのまま街行くからさ。また明日な！」

「う…うん。」

もはや完全に混乱状態の雪音を残し、二人はそそくさと行ってしまった。

「く、くくく、黒髪ロング…」

雪音が覚醒するまであと一時間…。

・ ・ ・

「ん…」

とある廃ビルで少女は覚醒した。

「んっよく寝たっつ。」

伸びをした後で、立ち上がり、備え付けてあるヒビの入った置き鏡を見る。

「さて…探しますか…」

鏡に映る少女の顔は残忍な狩人そのものだった…

• •

・
「とまあ、こんなところかな…大体分かったか？」

「ええ、大体は。特に図書館と植物園が楽しかったわ…通い詰めちやいそう。」

「まあ、気に入った場所があつたならよかったよ…オツチャン！おかわり！」

「バカヤロウ、マスターと呼べ。」

そう言いつつ出されるのは極上のチャーシュー麺だ。

公園、植物園、図書館、商店街などを回る街案内の最後にミリアからまたラーメンが食べたいというリクエストがあり、二人は再び『閻魔蟋蟀』を訪れていた。
時間は夜7時。晩飯時だ。

屋台があれだけ粉々になったのに翌日何事もなかったかのように修復されているのが気になったが、真のラーメン道は壊れた屋台くらい1日で直せてナンボらしい。
職人はよくわからない。

「ま、無事でよかったよ二人ともさ。」

オツチャンが笑顔で味たまをサービスする。

「サンキュ！」

「ありがとうございます！」

ミリアはすっかりラーメンを気に入ったらしい。

夢中で食べているその姿に思わず笑みがこぼれる。

オツチャンがニヤニヤしてるが、あえて無視するでしょう。

「次のニュースです。サトイモ町の山中通りの路地裏で怪死体が複数発見されました。被害者はいずれも四肢をバラバラに引き裂かれており、警察は殺人事件として捜査を進めるとともに、被害者の身元の確認を急いでいます……」

ラジオからニュースが流れてきて、思わず龍は顔をしかめる。
同時に嫌な光景までフラッシュバックのように映り、さらにひどい顔になる。

「バラバラ殺人って…物騒だな…」

努めて冷静に龍が呟く。

「サトイモ町っていったらこっからカシワ町を挟んだ二つ隣か…近いな…龍ちゃんに…ミリアちゃんだったか？あんたらも気を付けなね。」

ラジオのチャンネルを変えながらオツチャンが心配そうにこつちをみる。

「ああ、余り遅くまで出歩かないようにはするさ…」

そう言う龍をミリアは黙って見つめていた…

・ ・ ・

「はあ…！はあ…！」

恐怖一色で顔を染め上げた男が一心不乱で走る。

とにかくどこか…人通りの多い所へ…

すると、頭上を何かが通り抜ける。

「追い詰めた…！！」

鈴をならすような声。

ダメだ…もうダメだ…

男が最期に見たのは飴色に輝く本と刃物のごとき爪だけだった…

・ ・ ・

家に帰ってからミリアはずっとそわそわしていた。
ラーメン屋を後にしてからずっとこんな調子だ。

「どうしたんだよ？」

痺れを切らした龍がミリアに尋ねる。

「あのニュース聞いた時の龍が…なんだか辛そうだったから…」

「……」

「何か気になることもあるの？」

ミリアは本当に心配そうだ。

「昔…」

隠すことは無理だと判断して龍は話はじめる。

「姉さんと公園に遊びに行った時に通り魔に襲われたことがあったな。姉さんが俺を逃がしてくれて、俺は何とか家に逃れたけど…姉さんは戻って来なかった…」

ミリアは黙って聞いている。

「後日姉さんは発見された。四肢をバラバラにされた状態だね…。俺が…見つけた…」

自然に握りこぶしが固くなるのがわかる。

膝が震える。

「それ以来ダメなんだ…殺人事件のニュースを聞くと、どうしようもなく震えて、ざわつくんだ…後悔と罪悪感ばかりだ…どうして俺は逃げたんだろう。なんであるとき死んだのが姉さんだった？」

ギリギリと歯を鳴らし、強く拳骨を作ったてが次第に白くなっている。

「ごめんなさい…辛いことを思い出させて…」

ミリアは両手でふわりと龍の拳を包む。

「貴方も家族の一人を無くしていたのね…」

少しだけ潤んだ目でミリアがこっちを見る

こんな顔させたくはなかった…龍は心の中で後悔する。

やはりなんでもないように振る舞うべきだったか…

「話してくれてありがとう…なんでもないって言われたら、きっと寂しく感じだと思っわ。だから嬉しい…」

撤回、話してよかった。

我ながら現金だが、嬉しそうにするミリアを見て少しだけ心がほぐれる。

「ねえ、龍。遊びましょう？もっと人間の遊びを教えてほしいわ。」

「…ああ、そうしよう。」

ありがたいと…素直に感じた。

龍は家にある娯楽品を思い出す。しばらく使ってなかったが、確か

ゲーム機があつたはずだ。

「ボン。ーマンって奴を教えてやるよ。」

微かだが、確かに深まった絆を感じながら、二人はテレビの前で遊びの準備を始めた…

・ ・ ・

「あううつ…あの黒髪ロングの女の子…桜塚君の彼女さんなのかなあ…」

岩本雪音はテレビを見ながら悶々としていた…

「あうーううー！気になるよぉー！！」

ソファアーの上でグリングリンと頭を振り回す彼女は見ていて危うい。

「雪音ー！お風呂はいりなさい！」

台所から母の声。

「はぁーい！」

取り敢えず、明日学校で聞こう…

そう決意して雪音は脱衣所へと向かって行った。

「あら、あの子ったらテレビつけっぱなしにして…」

雪音の母がやれやれといった顔でテレビに近づく。

ニュースをやっていたようだ。

「次のニュースです。今日午後8時頃、カシワ町の廃ビルで再びバラバラ死体が発見されました。警察は同一の人物による犯行とみて捜査を続けると共に、付近の住民に警戒を…」

ープツンとテレビが消える音がした。

第三話 近づく心（後書き）

登場人物紹介？

曾根村 誠

本の色は群青色。かなりサディスティックな性格だで、本の力を悪行や己の快楽に使用する。ミリアを執拗に追いかけていたのも、美しい顔に苦痛が浮かぶ様を見たいがため。だが、ミリアに凄まれてビビりまくるあたり、根は臆病なようだ。カブラ曰く心の力は強いが、頭の力はダメ。

カブラ

龍とミリアが最初に戦った、爬虫類を思わせる顔や体に両手の大きな鍬が特徴の異形の魔物。

見かけやしゃべり方に反して知性は高く、事態を冷静に分析する判断力もある。パートナーが優秀だったなら、さらに強かったと想像出来る。紫色の鱗はかなり丈夫。

第一の術 ウイガル

カブラ第一の術。鍬から風の衝撃波を放つ術。
心の力次第で術の威力は調節が可能。

第二の術 シザルグ

カブラ第二の術。両手の缺を強化する、接近戦用の術。缺の一撃は地面を抉り、木を薙ぎ倒す。

第四話 遭遇（前書き）

や…やつと更新が…

感想、ご指摘ありがとうございます！

という訳で第四話です！

第四話 遭遇

やらないで後悔するより
やって後悔したい。

そう思いながら生きてきた。

B Y 桜塚龍

「…まさか午前授業になって部活まで禁止になるなんて思わなかったぜ。」

学校帰りの道すがら山口がぼやく。

「仕方ないよ…とうとうウメノキ町でも犠牲者が出たんだもん…私なんか学校行くのも怖かったんだから。」

「例の通り魔…徐々に南下してるよね…このままウメノキ町を通りすぎてくれればいいんだけどね…」

両肩を抱くようにして震え声の雪音に水城が神妙な顔で話す。

昨夜にカシワ町でバラバラ死体。

さらにその翌日の午前10時頃にウメノキ町でバラバラ死体が出たと臨時ニュースが入った。

このニュースを見たウメノキ高校の教師達は緊急職員会議を開き、生徒達を午前で下校させるという形で話がまとまった。

「（連続バラバラ殺人事件か…しかし…）」

殺人事件という単語に若干気が滅入りながらも、桜塚龍は考え込む。

「（たった二日で三件…しかも最初の一件は犠牲者が数人…いくらなんでも行動が早すぎる…）」

余り気持ちのいい話ではないが、一人をバラバラに分割するのは、恐ろしい程の労力と時間がかかる。

仮に出来たとしても、切断に使うための道具…例えば鋸などが必要になるわけで、そんなものを持っていたら当然目立つ。

「（現場に凶器の類いがあつたって話はニュースでやってなかったし…何処か別の場所で解体して、現場に置いたとか…）」

…どっちにしろこれは自分の中での妄想じみた推理であり、これ以上は不毛である。

「（だけど…）」

龍は前方を見据える

前ほどざわつかない…

吹っ切れた？

いや、違うな…多分…

「（心の何処かで、誰かに打ち明けたかったのかも…）」

脳裏に同居人となった少女が浮かぶ。

昨日のボン。ーマンは大盛り上がりだった。

『いいわね…この遊び…単純に見えて、驚く程戦略的…私好みだわ。これ魔界に持ち帰れないかしら？』

魔界にテレビゲームは無かったらしいが、彼女はすぐに馴染み、楽しんでいた。

「（み。ボンが気に入ったからってわざと自爆してこっちを仕留めにくるんだからなあ…）」

昨日の出来事を思い出し、龍は苦笑いする。

「おい。桜塚？どうしたさっきから？」

山口が心配と若干引き気味な顔でこっちを見ていた。

「ん？どうした？」

「どうしたもこうしたもないよ。深刻な顔で考え込んでたかと思えば、苦笑いするし…何か悪いものでも食べたのかい？」

意味がわからず聞き返すと、水城がわりと心配そうな顔で聞いてくる。

「いや、何でも。」

ちょっと事件の事を考え込んでただけだよ。」

「そうなのかい？ならいいんだ。まあ、実際気になるよね…」

「うん…案外近くにいたりしないかってヒヤヒヤしちゃうよ…」

何でもないように返すと、水城は納得したようだが、雪音は余計に震え上がっていた。

無理もない。男二人はともかく、雪音はそこそこ怖がりだ。去年のウメノキ町肝試し大会にて、終始大絶叫を上げ続け、お化け役をことごとく張り倒した伝説は、今も語り継がれている。…訂正。そこそこどころかなり怖がりだ。

「…ねえ…そこのお兄さん、お姉さん…」

そんな話をしていると、不意に背後から少女の声がする。

四人が振り返ると、そこに少女がいた。

歳は10才位だろうか？紫がかったショートヘアにボロボロの服を来ている。

「あのね、あたし、人探ししてるの。」

笑顔を浮かべながら少女が話す。

その笑顔に龍は言い様もない寒気を感じた。
初対面の少女に何処か恐怖に似た感情を抱いている。

「（なんだ…？どうしてだ？）」

「君、迷子なの？どんな人？」

雪音が尋ねる。

「迷子じゃないよ。ただの人探し。ええつとね。」

そう言っただけ少女はごそごそと鞆をあさり出す。

「これ！この本と同じ本を持つてる人を探してるの。」

「！！」

龍は危うく叫び声を上げる所だった。

少女が持っている本は紛れもなく、龍が持っているものと同じ、魔物の本だった。

・ ・ ・
とある警察署―

「警部、鑑識の結果が出ました。」

「そうか、結果は？」

警部と呼ばれた初老の男性は、デスクワークから離れ、報告を聞く体制に入る。

「はい、いずれの被害者も死因はやはり刃物による裂傷からくる失血死。凶器は切断面から日本刀のようなものと判断されます。」

「鋸じゃなかったか。しかし…このご時世に日本刀とは…」

「ただ、妙な点がいくつか…」

「妙な点？」

「はい、切断面が妙なんですよ。いずれも一、二回切りつけただけで切断したとは思えない傷なんです。よっぽどの達人か何かですかね。」

いくら日本刀と言えども、一撃で腕やら脚を落とすのは神業に等しい。

それをこうも連続でやられては、確かに達人の仕業と思っても仕方がないかも知れない…

「達人かどうかはともかく、凶器が日本刀であるなら、それを手ばかりに洗うしかないか…現場に他の痕跡は？」

「そ、それが…」

「ん？」

「被害者以外の足跡が、現場に三種類残されているんです。一つは

大人のものなのですが…」

「もう二つは？」

「…その…二つともサイズから見て明らかに子どもの足跡なんです…」

「…なんだと？」

・ ・ ・

「（さっきの子…魔物…だよな…？）」

友人達と別れ、龍は一人考える。

結局その場にいた龍を除く全員に心当たりがなく（龍は知らないフリをした）、少女は一言お礼を言った後に去っていった。

「（しかし…学校で本を出さなくて本当によかった…出してたら今頃どうなっていたか…）」

龍はブルツと身震いする。

そういえば魔物に会うのはミリアも入れてこれで三回目…ミリアの言った通り人型の魔物もいたわけだが…

「送られてくる奴らの年齢はバラバラなんだな」

あの魔物はまさに魔物の「子ども」と言った感じがした。
自分が覚えた恐怖を差し引けばだが。

「（ん？…魔物…？…そうか！）」

龍は電流を浴びせられたような気分になった。

「（そうか…魔物なら…魔物の力を使えば、この二日間で起きたバ

ラバラ殺人も容易に説明がつく…！」

その考えに至ったとたんに、さっきの少女の笑顔が脳裏を横切る。

「（まさか…）」

「お兄さん。」

「！！」

突然背後から聞き覚えのある声が響く。
忘れるわけがない…ついさっき聞いた声なのだから…

龍がふりむくと、案の定、さっきの少女が微笑みを浮かべながら立っていた。

「何度もごめんなさい…でもあたし…どうしても“お兄さんだけに”聞きたい事があったから…」

「ん？ああ、君か。俺に聞きたい事？何を？」

努めて冷静に龍が応答する。

「お兄さん…さっき見せた本に心当たりあるでしょ？」

「何のことだい？」

「だって…お兄さんだけ本を見せた時の反応が違ったもん…」

とぼける龍に対して、少女はクスクスと妖しげな笑いを絶やさずに追撃の言葉を放つ。

「でもお兄さん凄いな…すぐに普通の表情に戻るんだもん…あたし見逃す所だったよ…」

「ん…見逃すも何も俺はそんな本持っていないよ。ただ珍しい模様の本だと思って思っただけさ。俺本好きだからさ。」

我ながらよくこんな出鱈目が出るものと内心苦笑いしながら龍はしらを切る。

が、少女はますます妖しげな笑いを浮かべる。

「クスクス…お兄さんドジだね」

「どうということだい？」

少女の反応に得体のしれないものを感じながら龍が問いかける。

「あたしはね、さつきは本を持っている人の心当たりがあるかどうかを聞いたんだよ？ “お兄さんが本を持っているかどうか”なんて一度も聞いてないわ…」

「！！」

己の迂闊さを呪うとはこの事だ。
最早ぐうの音も出ない。

「そっか…もしかしてお兄さん…本の持ち主？」

「持ち主？」

苦しい…がとぼけ続けるしか道はない。

「大丈夫だよ？お兄さんをどうしようって気はないから。てかあたし、パートナーいないし。」

「……」

どうやら、もう少女の中で龍は本の持ち主で確定らしい。

「ねえ、お兄さん…少し散歩しない？」

「断つたら？」

「どうしよっかな…あたし、一応魔物だし？生身でも普通の人間に勝てる自信はあるよ？」

少女の顔に初めて残虐な色が表れる。
断るっていうのは無理そうだ。

「わかった…少しだけだぞ…」

「わーい。」

少女が無邪気に喜び。くるくる回りながら来た道の反対へ向かう。
パートナーがいなかった。嘘はついてなさそうだが…

龍は念のため、少女についていきながら、少女に気取られないように
に鞆に手を入れ、中の“あるもの”を確認した。

・ ・ ・

プルルルル…プルルルル…♪

「ひゃっ…！」

ミリアはビクツと声を上げた。その拍子に操作していたゴリラのキ
ャラクター二人組が穴に落ちる。

「せ…せっかくここまで来たのに…」

画面からパンツと風船が割れるような音が鳴ると同時にミリアが悲しげな声で呟く。

龍は学校で、やることもないので、彼女は最近覚えたテレビゲームをやっていた。

「……………」

半分涙目で騒音の源を見る。

プルルルル…プルルルル…♪…タダイマルスニシテイマス…ハッ
ンオンノアトニ…

電話の音は鳴り響き、やがて留守番電話の機械的なアナウンスが流れる。

ミリアはそれをひたすら恨めしげな顔で見守っていた…

・ ・ ・

「へえ〜…静かで素敵なところだね〜」

少女は相変わらず楽しげにくるくる回っている。

龍と少女は近くのウメノキ第二公園に来ていた。

ウメノキ町の五つある公園の一つで、遊具は少ないが、周りを梅の林が囲む美しい広場である。

平日の昼間だからか、通り魔騒ぎがあったからなのか、人っ子一人見当たらなかった。

「あつ、そうだ！お兄さん、名前何ていうの？」

「龍。桜塚龍だ。」

「強そうな名前ね。あたしはリベッカよ。よろしくね」

リベツカはニコニコしながら笑うが、すぐに真剣な顔になる。

「お兄さん、突然だけど、また質問してもいい？」

「何だ？」

油断なく龍が答える。パートナーがいないからと言って気は抜けない。相手は魔物なのだ。

「お兄さんのパートナーはどこ？」

「今は…俺の家にいるはずだ。」

「別行動中？」

「俺が学校だったんだ。」

「ああ、人間も学校通うんだったわね…うん、いないならよかったわ。問答無用であたしの本を燃やされたら堪らないもの。あたしは今、やられるわけにはいかないの…」

リベツカの笑顔がより陰を増す。龍はさっき感じた恐怖とは違う漠然とした不安を感じた。

「（何かに囚われている？）」

龍はそう直感した。目の前の少女の目が何処か見覚えがある。誰だったか……

「俺からも質問がある。」

ともかく、気になることがあり、今度は龍がリベツカに問いかける。

「なあに？」

「単刀直入に聞くぞ。ここ二日間、連続して人間がバラバラに切り裂かれて殺されている。犯人はお前か？」

「……………！！」

リベツカの目が一瞬細くなり、直ぐに見開かれた。
顔に浮かぶのはとてつもない憎しみの色。

あまりの変わりように龍は一瞬怯むが、直ぐに異変に気がつく。

「（俺を見ていない？）」

少女の視線は龍のすぐ背後に注がれていた。

龍が振り返ると、少し離れた場所に灰色のスーツを着込み、目深に帽子を被った老人と赤毛の少年が歩いて来ていた。

「見つけた…見つけた…やっと…」

リベツカの目が血走る。その目は明らかに殺意がこもっていた。

・ ・

・
近付いてきた少年はこちらの顔を見ると、何処か面食らったような表情を浮かべた。

「あれ？君は…ああ、あの時の！驚いたな…僕らを追って来たのかい？」

赤毛の少年が両腕を広げ、芝居がかった口調と仕草で話す。
左手には黒い手袋をしている。

「ええ…あなた達をただひたすら探していたの。」

ぞつとするような笑顔をリベッカが浮かべても、少年はあまり気にする素振りを見せない。

「凄いな…僕はこれでも、追跡者から逃げるのが得意な方なんだけどな。まあ、君が追いかけて来たのは意外だったけど。」

少年がリベッカの方へ歩み寄っていく。
リベッカその場から動かず、尚も睨み続けている。

「あたしが魔物として元から持っている能力が役にたったわ」

「元から持っている能力？」

少年が首を傾げる。

「傷跡から魔力の名残を探知したり、死体から残留思念を読み取ったり、消去する。それがあたしの能力よ。あなた達が無差別に人間を殺してくれたお陰で、あたしもあなた達を見つけることができたって訳。」

へえ…そりゃ凄いと感心する少年を横目に

リベツカはごそごそと鞆をまさぐり、ナイフとライターを取り出す。

「まさか…それで僕達と戦う気じゃないよね？」

「そつだと言ったら？」

「ナンセンスだね。いくら君が魔物だからって、魔法もなしに戦うなんて愚の骨頂。同情を通り越して呆れる…」

よ。まで言葉は続かなかった。リベツカが恐ろしい速さで少年に迫り、ナイフを振り切る。

「くっ…！」

ナイフは僅かに少年の頬を掠り、呻き声と共にドロリと赤い雫が伝い落ちる。

同時にリベツカは身体を捻り、少年に強烈な回し蹴りを叩きこむ！

「ぐあー！」

吹っ飛ばされた少年は二転三転し、ようやく止まる。

「ぐ…おの…れ…！」

よろよろと立ち上がり、リベツカを睨もうとする。が、既にリベツカはパートナーである老人の元へ疾走していた。

「しまった！く…！小次郎！呪文を…！」

少年の叫びに老人は無言で本を開く。

「ソルセン！」

飴色の本が光を放ち、少年の左手が青白く輝く。

「止まれ！」

空気を切り裂くような音と共に左手から鐔の無い日本刀の形をした衝撃波がリベツカ目掛けて打ち出される。

「チッ！」

リベツカはバックステップでそれをかわし、距離を取る。
その隙に少年は小次郎と呼ばれた老人の近くに戻る。

「油断しすぎだ。ウィリアム。」

小次郎が呟れた声で注意する。

「すまない……」

「さつさとあの魔物を八つ裂きにするぞ。その後で本を燃やす。」

淡々と作業報告をするかのように老人が機械的に話す。帽子を目深に被っているのもあるが、まるで感情らしい感情が感じられない。

「（く…不味いわ…奴らを倒せる唯一のチャンスだったのに…）」

リベツカは齒噛みした。

パートナーがいない以上、先手必勝、速攻でケリをつける必要があった。が、それが失敗…

奴らが魔法を使ってくれば、リベツカに勝ち目はない。

「ソルク!!」

小次郎の呪文と同時にウィリアムの左手が再び青白く輝き、黒い手袋が弾け飛ぶ。

中から銀色の鉤爪が飛びだし、形を変質させ、やがてウィリアムの左手は鐔の無い日本刀のような形になる。

「いくよ…!!」

ウィリアムは刃を煌めかせ、リベツカへ向かって疾走した。

・ ・ ・

それは時間にして一分もかからなかった。

ウィリアムの凶刃は瞬く間にリベッカを切り裂き、戦闘不能にまで追い込んだ。

「…う…ぐ…」

「やれやれ…だから言ったじゃないか…愚の骨頂だつて。勢いがあつたのは最初だけかい？」

ボロボロのリベッカに対して、呆れたようにウィリアムが背を向ける。

「待ちな…さい…!!」

リベツカは尚も立とうとする。

「見苦しいね…パートナーの敵討ちってやつかい？」

「だまりなさい…！大体この戦いは本を燃やせば終わりでしょう？殺す必要がどこにあるのよ…！」

四肢に力を込め、まるで慟哭するようにリベツカが声を絞り出す。脳裏に浮かぶのは気は弱い、優しくったパートナー…いつも助けていたのはあたしの方だったのに、最後の最後で助けられてしまった。

「あたしは…あんた達をぶちのめすまで倒れちゃいけないのよ…！」

ふらつきながらリベツカは立ち上がり、手負いとは思えないスピードでウィリアムに突進する。

「なっ！」

まだ動けるのか！？

完全に戦闘不能にしたと思っていたウィリアムは一瞬反応が遅れる。

「ぜええい！」

ズガン！！

「ぐはっ！」

リベツカの鋭い蹴りが炸裂し、再びウィリアムが弾き飛ばされる。

「ぐ…がっ…！」

が、苦しげな声を上げたのはリベツカの方だった。

逆に吹き飛ばされた方のウィリアムは余裕の笑みで立ち上がる。

「うーん…僕の短所はどうしても詰めが甘いつて所だろうな…君がそこまでダメージを受けてなければ、苦しげに呻くのは僕の方だったろうね…」

「く…！」

リベッカはとうとう、崩れるように地べたに倒れ伏してしまった。

「さて、そろそろ終わりにしようかな…大丈夫。あっという間だよ。」

ウィリアムは残忍な笑みを浮かべ、後方にいた小次郎の飴色の本が輝き始める。

「ソルク！」

左手の刃に青白い光を纏わせ、ウィリアムは一気に踏み込む！

「これで終わり…」

「させるかぁー！！！」

突然介入する第三者の声と共に、ウィリアムの目の前からリベッカの姿が消える。

ズパン！という音と共に地面に切り傷が走る。

「なっ…！」

ウィリアムは慌ててリベツカを連れ去ったものへ視線を向ける。

「ぜえぜえ…」

やたら息を切らした少年がリベツカを抱き抱え、仁王立ちしていた。

「お兄さ…龍？そういえばいたんだよね？忘れてた…。」

「あんたが脇目も振らず戦闘始めるからだよ。」

呼吸を整えた龍が少しふてくされたかのように答える。

実際トントン拍子で話やら戦闘が展開したお陰で龍は完全においてけぼりをくらっていた。

もつともそのお陰でウィリアムの凶刃に標的にされることもなかったのだが。

「…君は通行人だと思ってたんだけどねえ…僕らの邪魔をして…ただですむと思っているのかい？」

「！！…そうよ！あなたはもう無関係でしょ！？てかあたしあなたの敵よ？」

ニヤリと笑みを浮かべるウィリアムを見て、慌ててリベツカが叫ぶ。

「そうも言ってられないんだよな…何か話聞く限りじゃ、件の連続殺人はあんたらが起こしてるらしいじゃないか…！」

「だったら？」

刺すような龍の視線と口調にもウィリアムは涼しい顔だ。

「なら黙って見てる訳にはいかない！ここで止める！」

激しい感情を見せる龍にリベツカは驚いていた。

「（普通の優しげなお兄さんかと思ったけど…こんな顔もするんだ…。）」

実際龍は沸々と怒りが沸いてきていた。
相手が殺人を犯しているから？

それもある。

ただ、誰かを殺めるという事をしておきながら、平然としている魔物と人間に腹が立っていた。

また誰かを殺めようとする姿勢が許せなかった。

単純だと笑うなら笑えばいい。

見ず知らずの人の為に怒るなど傲慢だと言われてもいい。

この怒りは姉を救えなかった後悔から来るものかもしれない。

でも、少なくとも目の前の殺人犯達を止められる可能性を自分が持っているなら…

龍は鞆に手を入れる。

「やれやれ…君はただの人間だろう？」

完全に見下したような視線を向けながら、ウィリアムが刃を上上げる。

「そんな君が僕らをどうやって止めるというんだい!？」

「ソルセン!」

呪文と共に刃を一振りすると、再び、刀の衝撃波が龍達に迫る。

「ああ…確かに俺一人じゃあんたらは止められない…」

そつと鞆から山吹色の本を取り出す。

「俺一人”ならな…！」

瞬間、龍の隣に黒髪を靡かせ、黒衣の少女が躍り出る。

「ギルシルド！」

黒い円形の盾が前方に出現し、衝撃波を消滅させる。

「な…に…！？」

ウィリアムは開いた口が塞がらない。

「そうか…他に魔物がいたか…」

機械のように冷淡だった小次郎の声に初めて人間らしい感情がこもる。

それは紛れもなく歓喜の感情だった。

「気付いてくれて助かったよ。」

「あら、つい昨日取り決めた決まり事を忘れる程、お馬鹿さんじゃないわよ?」

心底安堵した表情の龍に対して、黒衣の少女、ミリアはおどけた表情で言葉を返す。

「でも、見つかってよかったわ…奴らが魔法を使わなかったらこの場所も分らないところだった…私、魔物の探知とかはあまり得意じゃないし…」

「うん…本当に合流出来てよかったよ…」

実は龍の背中では冷や汗で凄いことになっている。

あれだけ盛大に啖呵を切っておいて結局間に合わなかったら目も当てられない所だった…

「まあいいわ…さっさと終わらせましょう…私はさっさと帰ってド
？キーコ？グがやりたいのよ。」

ミリアの発言に若干脱力しながらも、龍は敵を見据える。

止める…必ず…！

山吹色の本はそんな龍の決意を表すかのごとく荒々しく光輝いた。

第四話 遭遇（後書き）

はい、実はやっとこせ四話を更新したらキャラ名を間違って打っていました（汗）

修正しようとしたら四話を削除してしまったという…
バックアップ取っというてよかった…

リベツカが所々レベツカだったりして、最後の後書きでレベツカと紹介してしまったという暴挙w

修正しました。

正式名は「リベツカ」です。混乱させてしまい申し訳ありません。

で、もう一度術の解説を…

作中で出てきた「ソルク」これはオリジナルの術です。

原作ではアースという剣を持った魔物が剣を強化する「ソルド」という術を使っていました。この「ソルク」は術者の手そのものが剣になる術です。

リベツカとウィリアムの詳細は後日に…

ミリアがどうやって異変に気付き、駆けつけたかは次話で。（まあ大体予想はつくと思いますが…）

次回も全力で書きたいと思います！
今後も宜しくお願いします。

ではまた

第五話 別れとよどみ（前書き）

ここ数日の忙しさが半端ない…
と、いうわけでまたしても遅くなりましたが、第五話です！
宜しくお願いします！

第五話 別れとよどみ

ふと思った。俺はミリアについてほとんど何も知らない…と。

B Y 桜塚 龍

「魔物が襲ってきた時？」

ゲームのコントローラーを握りながら龍がミリアの方を見る。

「ええ、今日みたいに龍が学校に行っている時に魔物に襲われたら困るでしょ？何か手軽に連絡取れるものって人間界に無いの？」

「連絡か…」

・ ・ ・

「これ、何？」

ミリアの目の前には変なボタンがたくさん付いた奇妙な機械があった。

「電話。通信機みたいなもんだな。んでこっちが携帯電話。」

「へえ〜面白い形してるのね。」

ミリアがマジマジと電話と携帯電話を見比べる。
取り敢えず龍は簡単な使い方をミリアに説明する。

「じゃあ俺の方で何かあったらこれに電話かけるよ。緊急だったら…そうだな、留守電の時にこんな感じの音を出す。」

龍は通話状態の携帯電話のマイク部分を指でコツコツコツと叩く。

「これが留守電に入ったら何かの事情で会話は出来ないけど来て欲

しって合図だと思ってくれ。」

「わかったわ。逆に私の方から何かあったら龍に電話をすればいいのね。」

「そういつこと。」

実際ミリアにもう一つ携帯電話を持たせたほうがより効率的だが、生憎、龍にはそんな経済力はない。只でさえ人（魔物）一人増えたもんだから桜塚家は火の車なのだ。

「（バイト少し増やすか…？いや、でも今まで遣り繰りして節制の日々…）」

お金を貯めるために余計な買い物をしなかったため、実際生活にはそこそこ余裕もあつたし、それなりに貯金も貯まっている。

「今くらいがちょうどいいのか…」

「…龍？」

「いや、何でもないよ。とにかく、何かあったら電話な。俺の番号は覚えてな？」

「勿論！了解よ！」

よもやこの取り決めが後に項をなすとはこの時の龍は知るよしもなかった…

・ ・ ・

「ここで休んでいてくれ。」

龍はリベツカを少し離れた所にそつと横たえた。

「……………礼は言わないからね……………」

ブスツといい放つリベツカに龍は苦笑いを浮かべる。

「そんだけ減らず口が叩けるなら大丈夫だ。」

龍は踵を返し、ミリアの横に並ぶ。

「あの子も…魔物よね？」

ミリアが少し戸惑いながらリベツカを見る。

「ああ、ちよつと色々あつてな。」

「成る程…またお人好し炸裂させてたのね。」

少し口調が刺々しい。

刺を丸くする方法も分からず、龍は話をそらすことにした。

「おい！あんた、小次郎って言ったな！」

龍は一先ず相手のパートナーに話し掛ける。

「目の前で人が殺されて、あんたは何も感じないのか!？」

老人は目深に被っていた帽子を少しだけ持ち上げた。そこにあつたのは無機質な目。龍は無意識に昆虫を思い浮かべた。

「……………」

老人はただ沈黙し、本の輝きだけを強める。

「ソルク！」

「!！」

ウィリアムの左手が変化し、刃となり、此方へ突進する。

「龍！来るわ！余計な考えは捨てなさい！話が通じる相手には見えないわ。」

「く……」

やむを得ず龍もまた、本を開く。

「ミジヨル！」

黒い波動が迸り、ウィリアムに迫る。が

「ソルセン！」

刃の衝撃波が走り、互いの術が相殺する。
生まれた土埃を振り切るようにウィリアムが更に距離を詰める。

「ギルシルド！」

「うおっ！」

突然目の前に現れた盾に思わずウィリアムの動きが止まる。

その隙にミリアはウィリアムの側面に回り…

「ミジヨル！」

「ぐあっ！」

黒い波動がウィリアムの肩に炸裂する。

「（浅い…僅かにかわされた…）」

相手の反応速度に舌を巻きつつ、ミリアが齒嚙みする。

「ソルセン！」

牽制の衝撃波が飛び、ミリアのすぐ前の地面を切り裂き、その隙に両者は距離を取る。

「顔に似合わず、随分とエグい盾の使い方をするんだね。」

「あら、顔面にぶち当てるつもりで張ったのよ？なのに踏みとどまるんだもん…意気地無し。」

ミリアの言葉に若干ひきつった笑顔になりつつ、ウィリアムが再び疾走を開始する。

「ミジヨル！」
「ソルセン！」

再び黒い波動と刃の衝撃波が衝突した。

・ ・ ・

「……………マズイよね…」

リベツカは戦いを見守りながらそう感じた。

成る程、見たところ互角に見える。が、あくまで”今の段階”はある。

あの術が…まだ出ていないのだ。

「それに…横取りはダメ…アイツらは…アイツらだけは…！」

リベツカは全身に力を入れる。
もう少し…もう少しだけ動け…！

・ ・ ・

「ハアハア…」

「ラチがあかな…」

肩で息をするウィリアムの傍らで小次郎がばやく。

「ソルク」で近づくと「ギルシルド」が障壁になるか、「ミジヨル」で迎撃される。

「ソルセン」も同様である。

「（あの盾が厄介だな…）」

あの盾が張られる度にスピードを緩めなくてはいけない。

その虚について「ミジヨル」が飛んでくるものだからなかなか詰めきれずにいたのだ。

「やむを得まい…消耗は激しいが、第三の術を使っぞ。一気に仕留める。」

「ああ、わかったよ小次郎…」

小次郎の提案に同意したウィリアムは呼吸を整える。

飴色の本が更なる光を放ち始め、小次郎の手の中で輝く。

「この術で終わりだ…！」

・ ・ ・

「く…アイツ…予想以上に素早いわね…」

ミリアが悔しげにウィリアムを睨む。

カブラのように龍に真っ直ぐ向かって来てくれるならまだ当てるチャンスはいくらでもあっただろう。

が、ウィリアムは走りに緩急をつけ、不規則な動きでこちらに向かってくる。

時に龍を、時にミリアをと標的を変更しながら、確実に近くへ…

「せめてミジヨルを一発ぶちこむか、盾に当てたいところなんだけどな…ん？」

ふと龍が怪訝な声を上げる。

ウィリアムの動きが止まったのだ。

「なん…だ…？」

「第三の術…」

「……！！——龍！盾を！早く！！」

いち早くミリアが反応する。

どんな術かは分からないが、防ぐに越したことはない。

「ガンズ・ソルセン！！」

小次郎の叫びと共にウィリアムの左手の刃が青白く光り…

マシンガンが炸裂するような物凄い音を立てて「ソルセン」より少し小さい無数の刃の衝撃波が発射される。

「ギルシルド！！」

瞬間、黒い盾が展開され、衝撃波をことごとく受け止める。
が、刃の衝撃波は留まることを知らず、発射され続ける。

「さて…いつまで持つかな…」

ウィリアムが不敵に笑う。

・ ・ ・

「く…マズイわ…厄介な術持ってるのね…」

徐々に軋みをあげ始めた盾を見てミリアが毒づく。

一発一発は大した威力ではない。が、衝撃波の数と範囲が凄まじく、一度盾がカバー出来る範囲から出ればたちまち蜂の巣になってしまふ。

かといってモタモタしていると盾が壊される。

「く…ギルシルド！」

再び龍が術を唱え、盾を張り直す。が、このままではジリ貧である。

「くそ…何か…何か方法は…」

龍は思考を巡らす。

この衝撃波の嵐から抜ける方法…

「考えている余裕なんてあるのかい？」

「…！」

すぐ横からウィリアムの声が響く。

「（な…！）」

いつの間にか衝撃波の嵐は止んでいる。

「（まさか…術を撃ちながらこっちに近づいていたのか…！？）」

皮肉にも二人を守る盾が死角を作り、逆にウィリアム守ったのだ。

「く…ギルシル…」
「ガンズ・ソルセン！」

龍が盾の呪文を唱えるより速く小次郎の詠唱が完了し、衝撃波の雨が降り注ぐ。
地面が次々と抉れ、土埃が舞い上がるった。

・ ・ ・

「終わったか…」

確かな手応えを感じ、小次郎が本を閉じる。

最初の「ガンズ・ソルセン」より心の力を多く込めた。
おかげで威力は申し分なく、周りの大地をも砕く勢いだ。

盾は間に合わなかったようだから、助かる見込みもない。この土埃

が止めば、ズタズタになった二人が現れるだろう。そうしたら本を奪えばいい。

運がよければ虫の息で生きているだろうが、そんな相手から本を剥ぎ取るなど造作もないことだ。

小次郎が無機質な目で土埃が舞う空を仰ぐ。
何の余韻もない、ただ勝利した…それだけ。

やがて風が吹き、視界が開けてくる。
途端にウィリアムが眉をひそめる。

「!?!?…いない…だと?」

抉れ、ひしゃげた地面の上に龍とミリアの姿は何処にもなかった。

・ ・ ・

「アダダダダ…滅茶苦茶だな…あの術」

「全くよ…お互い派手にやられたわね…」

息を切らせながら互いに毒づく。

満身創痍の状態で二人が逃げ込んだのは公園の名所となっている梅の林だった。

あの時、確かに盾は間に合わなかった。

が、龍は何発か衝撃波を受けながらも術を唱えきり、そのまま土埃に乗じて逃げ出したのだ。

当然無事では済まず、龍もミリアも身体中傷だらけだ。

「ここもすぐバレるわね…というか…もうバレてるわね…」

何発か衝撃波が飛んできて梅の木々が傾く。

「アイツら…ウメノキ町唯一の花見スポットになんてことを…」

「花見…？まあいいわ…それより問題はあの術をどうやって攻略するかよね…」

一瞬ミリアがポカンとした顔をするが、すぐに真剣な表情になる。
現状、あの術をなんとかしなければ自分達に勝ち目はないのだ。

「それなんだけどさ…」

そんな時、龍がおずおずと口を開く。

「さっきは俺達がアイツを見失ったから術を受けてしまったたる？
今度は逆にアイツに俺達を見失わせればいいんじゃないか？」

「何言ってるのよ…そんなこと出来たら苦労しない……………あ！」

龍の提案にあきれ顔を作りかけたミリアがパンと手を叩く。

ある…一つだけ。相手の視界を奪いつつ、こっちが相手の位置を把握できる方法が…

「作戦：考えましょう。」

・ ・ ・

「逃げたか…？」

「ソルセン」が梅の林を蹂躪する様を見ながら小次郎が呟く。

「いや、逃げてないよ。地面に血が何滴か落ちていた…。そうそう遠くには行けないハズ…」

左手の刃を振るいながらウィリアムが答える。

それに、もし逃げられたのならその時は探せばいい。

と、いうより、龍たちは逃げないという確信がウィリアムにはあった。

「この近辺に奴らが住んでいるなら逃げるなんてマネはしないハズさ…本を持っている以上、戦いからは…運命からは誰も逃れられないからね。」

近くに住んでいるなら、逃げたところで見つかるのは時間の問題。仮に遠くから来ていたのだとしても、手負いの状態で遠くまで逃げられるハズもない。

後から追いかけても充分追い付ける。つまるところ彼らは戦い、勝つしか生き残る道が残されていないのだ。

案の定ウィリアムの予想は当たっていた。
龍とミリアが林の中から姿を現す。

「来たか…！さて…この戦いもそろそろ終幕にしよう…」

ウィリアムの言葉に答えるかのように小次郎の本が飴色に輝き出した。

・ ・ ・

小次郎の本の輝きが更に強くなるのを見て、これから始まる戦いに
備え、龍は呼吸を整える。

「じゃあ…いくぞ…！」

「ええ、了解よ！」

同時に二人は敵に向けて疾走する。
再び戦いが始まった。

「（正面から突撃してくるとはね…）」

ウィリアムは苦笑いする。

最も、「ガンズ・ソルセン」がある以上魔物とパートナーが近くに
いた方が、盾を張る時に互いに身を守りやすい。
盾を張られたならまた逆に利用してやればいい。

「（他の術を持っているようには見えない…現状、負傷覚悟で隣接

して僕に術を当てるしか手はないってことか…」

ならばこの勝負、術の手数で勝る自分の勝ちだ。

「ガンズ・ソルセン！」

「ギルシルド！」

盾を張ったか…ならば逆に利用して…
ウィリアムの思考はそこまでだった。

視界が黒一色に染め上げられ、凄まじい音を立てて自分の衝撃波の
雨が目の前で炸裂する。

「な…！？」

思わず絶句するウィリアム。
が、すぐに現状を理解する。

「盾を…僕の目の前に張ったか…！」

たまらず術を中断し、盾の横に躍り出る。

「小次郎！」

「ガンズ・ソルセン！」

「龍！」

「ギルシルド！」

再びウィリアムの前に展開される漆黒の盾。
衝撃波の連打が受け止められ、視界を奪う。

「ぐ…なんて性格の悪い盾なんだ…！！！」

ウィリアムが唸る。

鈍い音と共に盾が破壊され、衝撃波の雨が大地を蹂躪するが、すでにそこに龍たちの姿はない。

「く…そ…！」

戦いの主導権は明らかに龍たちが握っていた。

・

・ ・

「（作戦通りね…あとは隣接して、ミジヨルを打ち込む…！）」

龍と考えた作戦は至極単純なものだった。

盾が相手に利用されてしまうなら、利用出来ないほど近くに張ればいい。

そうすることで相手を捕捉しつつ隣接でき、攻撃を防ぎ、視界も奪える。

相手が盾の横に跳んだのなら再び目の前に盾を張ればいい。

破壊してくるようならば相手の直線上に立たないように蛇行しながら近付く。

果たしてこれが作戦と言えるかどうかは微妙だが、ミリアは手応えを感じていた。

「ガンズ…」

「（また来る…！）龍！」
「ギルシルド！」

展開される盾。
だが、敵の術はまだ来ない。

「！」
「（しまった！タイミングを…）」

ずらされた。

敵も愚かではなかった。この短時間で対策を講じてきたのだ。

その瞬間、ウィリアムが横に跳ぶ。

“龍達の直線上”に。

一瞬の出来事に龍の反応が遅れる…

「ガンズ・ソルセン！」

再び衝撃波が乱射された。

やられた。

反射的に本を抱き締めるように体を丸めた龍はそう感じた。とつさに龍の前方に体を滑り込ませたミリアも同様だった。

が、思ったほどの衝撃が来ない。

おかしい…確かに衝撃波は…

二人は閉じていた目を開く。

「え？」

「なっ!？」

その光景に思わず絶句する。

なるほど、確かに衝撃波は放たれていた。

しかしあらぬ方向へだ。

ウィリアム自身も自分に何が起ったかはわかってないだろう。

「左腕…もーらった♪」

何処か楽しげに、小さな四肢をウィリアムの左腕に絡み付かせたりベツカの姿があった。

・ ・ ・

とつた…！

盾を張られる瞬間に横つ飛びで敵の前に立つた時、ウィリアムは自分の勝利を疑わなかった。

だからすぐ後ろに迫る小さな影にウィリアムは完全に気がつかなかった。

気づいた時には既に遅く、左腕があらぬ方向を向き、完全に極められていた。

「サ、サブミッション（関節技）…！？」

「あつたり〜！」

リベツカは笑顔と共に身体を捻る。

同時にウィリアムの左腕が鈍い音をたて、あり得ない方向へ曲がる。

「ぐ…あああああああああああああああああ
っ！！！！」

絶叫するウィリアム。

ストーンと着地したリベツカはライターを取りだし、小次郎の方へ向き直る。

「さ…せる…かあ…！！！」

が、左腕を折られて尚、ウィリアムの戦意は衰えず、無事な右腕でリベツカに掴みかかろうとする。

「私たちを忘れてもらっては困るわ…」

「！！！」

彼の頭の中にはさっきまで戦っていた相手のことなど消え、完全に龍たちに無防備な姿をさらしていた。痛みからか、焦りからか、本来優秀なハズの彼の戦闘センスはすぐ近くまで隣接していたミリアに気がつかない程に磨耗していた。

「第二の術…ミジヨル！！！」

黒い波動がウィリアムを飲み込むのと、
リベツカのみドルキックが小次郎に突き刺さるのは殆ど同時だった。

・ ・ ・

飴色の本に火が灯り、メラメラと燃える。
ウィリアムの体は少しずつ透けていく。

「満足かい？ パートナーの敵がとれて。」

左腕が折れ、ミジヨルで弱った状態なので、地面に伏しながらウィリアムがリベツカに問いかける。

「…何か勘違いしてるみたいだから教えてあげるね。あたしは復讐に來た訳じゃない。あなたが王になるのを止めに來たのよ。」

ウィリアム黙って聞いている。

「あなたを追いかけて、犠牲者の残留思念を見たわ。犠牲者の殆どは本の持ち主だった…」

「最初の大人数はただ絡んできただけさ…ただ、あまりにもしつこくてね…でも他は戦うことを選んだ人間だ。僕はただ、全力で敵を葬っただけさ…」

「この戦いは本を燃やすだけじゃない！平気で敵を殺すような奴が王の候補として戦ってる。あたしはそれが許せなかった。敵だからと命を簡単に奪うあなたに王の資格はないわ…!!」

「確かに…その結果がこのザマか…」

リベツカの言葉にウィリアムが自嘲気味に笑う。

「やはり僕は王にはなれなかった…」

最後まで言葉を紡ぐことなく、ウィリアムはこの世界から消失した。

リベツカがくるりと小次郎の方に向き直る。

「儂を…殺すか？」

地べたに座ったまま、感情のない無機質な目で小次郎はリベツカを見つめる。

「言ったでしょ？あたしはアイツが王になるのを止めたかった。もうあなたには興味ないの。あたしの視界から消えてくれるかしら？」

「……………」

小次郎は黙ってリベツカを見つめた後、ヨロヨロと立ち上がり、踵を返した。

が、途中立ち止まる。

「少年。」

「…！？」

突然話しかけられ、龍が面食らった顔になる。

「人が殺され、何も感じないのかと問うたな。」

こちらの返事を聞かずに老人が続ける。

「何も感じぬよ。妻も、息子も、孫も…儂より先に消えた。友も皆先立った…」

「……………」

「何もなく、ただ枯れるのを待つ儂のもとに来たのがウィリアムだ。そのウィリアムが王になると望んだ。ただそれだけのこと。途中人は死んだが…何も感情は浮かばなかった…」

ただそれだけ言い残して、老人は去っていった。

「龍…いいの？放つという…」

ミリアが心配そうに龍を見る。

龍はこくりと頷く。

「ああ、多分もうあの人は殺しはしないと思う。」

それに魔物がやったとなると、恐らく証拠なども拳がらず、逮捕も難しいだろう。

少し釈然としないものを感じながらも龍は老人を見つめていた。

「（それにたぶん…あの人はもうそんなに長くない…）」

確証はないが、何処か予感じみたものが龍の中にあった。
もともと生気がなかったが、さらに失われたように見えた。

ドサッ

「!？」

「!…おい!大丈夫か!!」

何かが倒れる音に振り向くと、リベツカが倒れていた。
よく見ると身体中切り傷刺し傷だらけである。
よくこの傷であれだけ動けたものである。

「待つてろ…すぐ病院に…」

そう言う龍をリベツカが手で制する。

「いいの…それよりもお願いがあるの。」

「何だ？」

「あたしの本を燃やしてほしい。」

「!？」

「聞こえなかった？」

言葉を失う龍にリベツカが問いかける。

「いや…でも…」

口ごもる龍にリベツカは笑う。

「変な奴ね…一応あたし敵よ？普通なら真っ先に本燃やす所でしよ
うが…」

あきれた顔でリベツカが話す。

「あたしも王の候補生だし…王になりたいって気も少しはあるわ…

でも…」

リベツカは目を閉じる。

回想するのは短く、だが楽しかった日々。

「僕はね…医者になるのが夢なんだ。世界には、医者に診てもらいたくても診てもらえない子どもたちがたくさんいて、今も苦しんでいる。そういう人を一人でも多く救くえる人になりたいんだ…」

気が弱くて頼りない印象のパートナーがその夢を語るときだけは力強い熱のこもった口調で話す。その姿を見るのがリベツカは好きだった。ついいつも医者のお話をせがんでパートナーを困らせていたものだった。

「パートナーが死ぬと新しいパートナーが現れるのかどうかは分からない…でもあの人以外はパートナーとして受け入れられそうもないの。」

リベツカがポツリと呟く。

「あの人殺された時…最初は…復讐してやろうとおもったけど…あの方は優しいから…」

きつと『ダメだよ、リベツカ!』と、何処か困ったような顔で、言うに違いない。

「腹いせにアイツの骨折ってやったけど…何の感情も沸き起こらないわ…」

「待て、もうしゃべるな!」

龍が慌ててリベツカを制止する。

さつきからリベツカの呼吸が苦しげになっていた。

傷が開きかけているのだろう。

龍はようやく、目の前の少女が誰に似ているかを悟った。
昔の自分だ。

姉を殺した犯人が逮捕され、連行されているときに、思わず犯人に掴みかかり、殴り付けたことがあった。

そうすれば心が晴れる。

いっそ殺してしまいたいとまで思った。
が、実際殴っても達成感はず、残ったのは虚無感…
どうしようもない虚無感だった。

嫌なことを思いだし、龍は頭を振る。

「本は…？」

「その鞆の中。」

気を取り直しリベツカに本の在処を訪ねる。

鞆から薄い黄土色の本を取りだし、地面に置く。

「せめて、手当てしてから…」

「魔物は結構丈夫なのよ。魔界に帰ってから治療すれば大丈夫。向
こうの薬の方が聞くだろうしね。」

「そうか…………リベツカ。」

「何？」

「さっき言えなかったから…助けてくれてありがとう。」

「なんのこと？」

お礼を言う龍に対して、少女はおどけた態度を崩さなかった。

・ ・ ・

本が燃え、リベツカの体が透け始める。
その様子を龍とミリアは黙って見つめていた。

「そうだ。あなた…ミリアだっけ？」
「へ？」

リベツカは思い出したかのようにミリアの方を向く。
話しかけられるとは思っておらず、ミリアが驚いた顔でリベツカを見る。

「余計なお世話だったらごめんなね。あたし、残留思念を見れるからなのか、人の感情には敏感なの。だから聞きたいんだけど、あなたは何のために戦っているの？」

「え…」

リベツカの言葉にミリアが固まる。

「間違ってたらごめんなさい。ただ、あなたからは王になりたいっ

て感情が感じられなかったから気になって…」

「……………」

「この戦いには望んでないのに参加させられた魔物もいるって聞くわ。逆にさっきみたいに平気で人を殺そうとする奴もたくさんいる。もし、王になることを望んでいないなら…この戦いからは降りるべきよ…」

リベッカがチラリと龍を見る。

「人間は…本当に脆いわ…大切な存在になってから失うのは…つらいわよ…?」

「私は…」

リベッカの言葉を聞き、ミリアが答えようとする。

が、ミリアは結局、リベッカが消えるまでその問いに答えることは出来なかった。

そうこうしているうちに、リベッカの姿は完全に消滅した。

「……………ミリア?」

龍が遠慮がちにミリアの顔を覗きこむ。

「…疲れちゃった。帰りましょう、龍。一緒にド？キーコングがやりたいわ。」

意外にもミリアは普通だった。

心なしか寂しげな顔をしていたかのように見えたが気のせいだったか…？

「ん…そうだな、やるか！でもその前に晩飯の材料買ってからな。」

「今日の夕食は？」

「シチュー。」

「フフフ…楽しみ。」

屈託なく笑うミリアを見て龍はホッとする。

その後も他愛のない会話をしながら二人はスーパーへ向かう。

今日は奮発してビーフシチューにでもするか…

龍はそんなことを思いながら夕焼けで少し赤くなりかけた空を仰いだ。

「（何のために戦う…か）」

ミリアは隣で空を仰ぐパートナーを見ながら、リベツカの言葉を思い浮かべる。

『人間は…本当に脆いわ…大切な存在になってから失うのは…つらいわよ…？』

リベツカの言葉はミリアの胸の奥に深く突き刺さり、暗いよどみを残していた。

第五話 別れとよどみ（後書き）

登場人物紹介？

リベツカ

9 歳

ボロボロの服に、本編では言われてなかったが、黄色がかった髪をもつ少女。死体や魔力による傷から術の痕跡や残留思念を読み取る固有の能力をもつ。残留思念は稀に自分を攻撃してくることもあるので、本人はあまりこの能力を気に入っていない。

本編では明かされなかったが、怨霊のエネルギーの術を持ち、それと蹴り技を主体とした格闘技を組み合わせて戦う。

年相応の面もあるようで、パートナーによく遊園地に連れていくようにせがんでいたらしい。

術

第一の術

リュウズ

リベツカ第一の術。某イスの魔物と同じ系統だが、口からではなく、両手から放つ。

佐々木真一

17 歳

本の色は薄い黄土色。

本編では回想シーンで登場。

医者を目指す心優しい好青年だった。

リベツカとピクニツクに来ていた所をウィリアム達と交戦となるが、敗北。

前日の雨で少し流れが早くなった川に本と一緒にリベツカを落とす、逃がすことに成功。自分はウィリアムの凶刃に倒れる。

無類の格闘オタクで（ただし自分は全く出来ない。）格闘技の本を大量に所持しており、リベツカが格闘技を学ばきつかけとなった。

第六話 戦う意味（前書き）

や… やつと6話目できた…

更新が遅くなつてしまいました。

まあ主な原因はテストとかテストとかテストとか…

と、言うわけで第6話です。

宜しくお願いします！

第六話 戦う意味

理屈がわからなくても譲れないものがある。

B y 桜塚 龍

「どついう意味だ…！」

龍が鞆のベルトを握りしめながら相手を睨む

「聞こえなかったデスカ？その本を渡して欲しい…そう言ったんデスヨ？」

あくまで丁寧な物腰で目の前の女性が一步前にでる。

「何も迷うことないデショウ。このままいくと、あなたは間違いなく普通の生活を失ウ。その本と魔物はあなたにとってマイナスにしかないナイ。」

「……………」

龍は言葉を詰まらせる。

「死ぬのは嫌デシヨウ？誰だってそうデス。その本を渡して貰えませんか？」

鞆の中の本をなぞる。

この女が言っていることは正論だ。それはわかる。けど……

龍は本を握りしめる。

この本をあの女に渡すということは……ミリアがいなくなるという意味だ。

龍はぐっと相手を見る

「俺は………」

・
・
・
時間は少し遡る。

ミリアが変だ。

いや、別に見た目とか言動が変とかというわけではない。

ただ、リベツカと出逢い、ウィリアムと戦ったあの一件から早いものでもう一週間。

ミリアはごく稀にぼんやりと考え事をすることが多くなった。

そして、今まさにミリアはぼくと虚空を見つめていた。

「……………ミリア？」

「……………」

「おーい、もしもし。」

「……………へ？な、何？龍？」

しばらく間をおいてミリアがこっちを向く。

「いや、何かぼーっとしてたからさ…どうしたんだ？最近多いぞ？」

「そう…かしら？ごめんなさい、全然自覚なかったわ…」

ミリアが少し罰が悪そうにこっちを見る。

「この間の…戦いからそんな調子だよな？やっぱり、リベッカが言
つてたことを気にしてるのか？」

「そんなこと…」

ないわ…

ミリアはそう言っつもりだった。

が、心の何処かでそれを肯定している自分がある。
故にミリアは即答することが出来なかった。

「……………」

沈黙が続く。

先に口を開いたのは龍の方だった。

「……………出掛けるか。」

「へ？」

龍の唐突な提案にミリアが目を丸くする。

「いや、だから出掛けよう。」

龍自身何を言っているのかわからなかった。
ただ何かをしたいという気持ちが先走って、
気が付けばそんな言葉
が口から出ていた。

「気晴らし……ってのもいいだろう？」

そう言って龍は外出の準備を進めていた。

・ ・ ・

「……………すごい…」

目の前の光景にミリアはただ目を見張るばかりだった。

視界を多い尽くさんばかりの向日葵。

ウメノキ町から駅二つ分先にある自然公園。

隠れた名所の1つである。

「昔、俺がウメノキ町に来たばかりの頃に友達が連れてきてくれたさ。結構綺麗な眺めだったから、ミリアにも見せたかった。」

実際はノープランでついさっきここを思い付いたのだが、この際黙っておく。

隣で景色に見とれているミリアに水を差すのも気がひける。

「綺麗な所ね…それに人間界にもこんなに大きな花があるなんて…」

向日葵を見るのも初めてだったらしく、ミリアは素直に感動している。

笑った表情のミリアを見て、龍はほんの少し胸を撫で下ろす。

「ねえ…龍…この公園って、結構大きいの？」

「ん？そりゃ…まあ…そこそこかな？」

ミリアの問いに少し曖昧に答える。

実際数えるくらいしかここに来たことはないの、そこまで詳しくはない。

「そうなんだ…ねえ、少し散歩してきてもいいかしら？」

「一人でか？」

「…ええ」

しばらくミリアを見ていた龍だったが、フツと頬を緩める。
一人で考えたい時だったまにはあるだろう。
変についていくのも野暮かもしれない。
なら龍の答えは一つ。

「ああ、行つてきなよ。俺はこの辺で待ってるから。」

「ありがとう…」

龍の答えに安堵した表情を浮かべてから、ミリアは遊歩道を通り、

向日葵畑の中に消えていった。

龍は近くのベンチに腰掛け、ふう…と息をつく。

「…何も…出来ないな…」

龍は軽い無力感に襲われていた。

気のきいた台詞の一つや二つ言えればいいのだが、生憎、龍にそんな台詞は浮かばない。

ゆっくり考えるか、少しでもリラックスしてほしくてこの場所に連れて来てはみたが、果たしてそれが最善かもわからない。

…混乱してきた。別のことを考えよう。

そもそもなんのために戦うかだ。

考えてみれば自分は結構ノリとテンションで戦ってきた感がある。だからいざ理由を考えてみるとすぐには浮かんでこない。

俺はどうしたいんだ？

ミリアは…なんとなく一緒にいるけど、彼女は俺にとって何だ？

「魔界の王様…か…」

ふと、王様（女王か？）になったミリアを想像する。

頭に王冠を乗せ、高笑いするミリア。

民に鞭を打つミリア。

ケーキを食べるミリア。

ウィリアムを踏みつけるミリア。

…我ながら想像が貧困だ。

どうも王様やら女王様やらは威張って、甘いものを食べて、平民を虐げているイメージしかない。

何とかして正しい王様を想像するが、どうもしっくりこない。

『あなたから王になりたいって感情が感じられなかったから…』
そうリベツカはミリアに言っていた。

その言葉が心の何処かに引っ掛かっているのだろうか？

どんどん思考の海に沈む。

昔からの悪い癖だ。一度考え出すと、色々と感情が枝分かれしてい

き、止まらなくなる。

故に背後の人影に龍は気がつく事が出来なかった。

・ ・ ・

「気…使わせちゃったかな…？」

ミアが少し心配そうな顔で来た道を振り返る。

だが、彼のことだ。気など使わず、純粹にミアを心配して、一人にしてくれたのだろう。

出会ってそこそこ日がたち、ミアは龍の人柄を理解し始めていた。だからこそ、気が沈む。

「あの時…リベッカがいなかったら確実に負けていた…」

ウィリアムとの戦いを思い出す。自分は魔物だ。多少の攻撃は、大丈夫だし、ケガの治りも早い。が、龍は違う。

事実、ウィリアムとの戦いで龍が受けた傷はまだ残っている。龍はもう痛みを感じてはいないが、ミリアから見たら人間の回復力の遅さにある種の戦慄めいたものを感じていた。

「人間は…脆い…か…」

泣きたくなくなるくらい青い空を仰ぎながらミリアはポツリと呟く。

あの戦いで下手したら龍は死んでいたかもしれない。この魔界の王を決める戦いに巻き込まれたがために。ましてや私は“王になる気はない”というのに…私はただ…

暫く空を見上げていたミリアはやがて身を翻し、来た道を戻り始めた。

・ ・ ・

「いい景色デスネ。」

不意に背後から片言混じりの声が響き、龍がギクリと振り返る。

ウェーブがかかったショートヘア。

小麦色の肌。

黒いゴスロリの服に身を包んだ女性が立っていた。

歳は二十歳くらいだろうか？

何処か日本人離れた顔立ちをしている。だが、龍はその女性よりもその後ろに佇むモノに目を奪われていた。

「……………！！」

「アラ、怯えてるの？かわいいわね。」

…何と表現したらいいのだろうか？

目の前にいるソイツは声こそ甘ったるいが、見た目がおぞましい。

肌は土気色で、額と頬に手術の痕のような傷。髪も荒れ放題。龍は一番近い表現としてフランケンシュタインを想像した。

「取り敢えず自己紹介ヲ…私はエリス。こっちは魔物のダルクといマス。」

ダルクと呼ばれた魔物を見て固まっている龍にエリスという女性はいこやかに話しかけ、手持ちの鞆から赤よりも紅い…紅色の本を取り出す。

「貴方には…この本を見せた方が手つとり早いデショウ？」

「…戦いに来たのか？」

「いいえ、私達は話し合いに来たのデス。争う気はありませんヨ。少しでもいいのデス…お話をしまショウ。」

身構える龍に対し、エリスは笑顔を崩さずに龍の向かい側のベンチに腰掛けた。

「さて…何から話しまシヨウカ…」

龍の返事も待たず、エリスは一方的に話始めた。

・ ・ ・

「アナタはこの戦いについてどれくらいのことを知っていマスカ？」

「…魔界の王を決める為に100人の魔物の子ども達が互いの本を燃やしあう…最後に残った一人が次の王…」

「ええ、正解デス。」

龍の回答にエリスはうんうんと頷く。

「では次の質問デス…アナタは何故戦っているのデスカ？」

「え？」

エリスの問いに龍が面食らう。

「だって可笑しいとは思いませんか？この魔界の王を決める戦いとやらは私達人間には無関係ダ。」

「……」

その通りだ。余りに目的を射た意見でもあり、さっきまで自分が思案していた話題でもあり、返答に窮して龍が黙りこむ。

「…アナタはパートナーの魔物と会ってどれくらいの日が経ちましたか？」

「二週間くらいだ…」

「戦いの経験は？」

「一回。」

黙りこんだ龍に次々とエリスが質問する。

質問に答える中で龍はえも知れぬ不安に包まれていた。

彼女は先程から笑顔を絶やさない。

龍には彼女の笑顔がひどく不吉なものに見えた。

「…二回デスカ…ではこの戦いの恐ろしさはまだ理解していないと思われマスネ。」

「…何が言いたい？」

「回りくどいことはこの際避けて、単刀直入に言いまショウ。アナタのためにも、その本を渡して頂きたい。」

—そうして時間は始めに戻る。

・ ・ ・

「あら？」

遠くのベンチに自分のパートナーを確認し、歩み寄ろうとした所で、ミリアは足を止めた。
遠目でよく見えないが、龍の前に見知らぬ女性が二人佇んでいた。見たところ何か話をしているように見える。

「……何で私は隠れているのかしら……？」

思わず条件反射で向日葵畑の中へ身を隠してしまった。

妙な反応をする自分自身に驚きながらも、ミリアは龍の方を伺う。

向日葵は完全にミリアを覆い隠し、向こうは誰一人こちらに気がついていない。

人間界の巨大な花に感謝したい気持ちになる。

「知り合い……なのかな……？」

ポツリとミリアが呟く。
そういえば、龍以外に関わった人間はあのラーメン屋台のおじさんしかない。

龍の他の知り合いはどんな人なのだろうか？
少し好奇心が湧く。

「…ここじゃよく聞こえないわね…」

幸運にもそこそ風が出ており、向日葵達をゆらゆらと揺り動かしている。

自分がこの向日葵畑の中で動いても向こうには気づかれまい。ミリアは静かに移動を開始した。

・ ・ ・

ただエリスを睨んだまま沈黙を貫く龍を見て、エリスは、フーッとため息を漏らす。

「この戦いデハ…」

エリスがポツリと呟く。

「平気で人を傷つける魔物や人もイマス。大きな力は時に狂気を生み出す。私の両親も…」

その言葉と共にエリスは唇を噛み締める。

「あの時、私は魔物を災い以外の何物でもないと認識しまシタ。何もかも失った後で、幸か不幸かダルクに出会っタ。」

エリスの顔から初めて笑顔が消え、紅色の本を手の血管が浮き出るまで握りしめる。

「色々な魔物と戦いまシタ。その殆どが力に溺れたクズも同然のやつらダツタ。人間の方モネ…」

龍は曾根村や小次郎を思い出す。どちらも方向性は違えど、魔物の力で周りを傷つけることに躊躇いはなかった。

「私のような魔物の犠牲者はこれ以上増やしてはならナイ。知らずに巻き込まれた人がいるなら、本を手放すよう説得スル。もしも本を持った人間が外道ならばねじ伏セル。」

エリスはこちらに向き直る。

風が撫でるように吹き、彼女の髪を揺らす。

「この魔界の王を決める戦いを出来る限り早く終わらせるコト。それが私の目的なデス。」

エリスの目には確固たる信念の色が現れていた。

・ ・ ・

龍たちの会話が聞こえる位置にしゃがみこみながらミリアは沈黙していた。

龍が話している人達が単なる龍の知り合いだったならどれほど良かっただろう。

魔物の存在は人間にはマイナスにしかない。

普通の生活を失う。

ただの災い。

死。

無情にも今まさにミリアが悩み、悶々としている話題について語るあの人間の言葉はミリアの存在を糾弾するかのように重くミリアにのしかかってくる。

だが、それよりもミリアの心を蝕むのは魔物の方だった。

「どうして…あなたがここに…」

ミリアはギュッと服の袖を握り締める。

「もう私から話すことはありません。もう一度言いマス。本を渡して貰えませんか。」

エリスが再び龍へ要求するのを聞き、ハッと顔をあげる。龍のもとへ行けと脳が命令するが、身体が動かない。

同時に嫌な考えが頭をよぎる。

ここで龍が本を渡せば、もう龍は傷つかなくてすむのではないか？ここで渡さなければ、龍は再び戦いに巻き込まれることに…

手が震える。本を渡すということは魔界に帰ることを意味する。それは再び孤独な日々に戻ることを意味する。

龍を巻き込みたくないという気持ちと孤独の恐怖にミリアは両肩を抱えるように俯く。

「出会って二週間でシタカ？浅い絆デスヨ。これからアナタが巻き込まれる戦いを考えれば何が最善かはわかるでシヨウ？」

「う…」

エリスの言葉は隠れているミリアに容赦なく突き刺さる。

ああ…全くもって正しい。

龍といること自体が彼を危険に近付けることに他ならない。

わかっていた。

「……………」

龍は沈黙を続ける。考えているのだろうか？

だが、考えるまでもない。

今までは成り行きのような形で戦ってきた。

そもそもまだ二回しか戦っていないが、この戦いの先はまだまだ長いのだ。

龍だって目的のない戦いが続けばいずれ…

龍は顔を上げ、ベンチから立ち上がる。

「俺は……………」

だからここで本を手放す選択をしてもミリアに彼を責める権利はない。

もともと彼だって戦いが好きな訳ではない。

「ここで…お別れか…」

一瞬だけ哀しげな表情を見せ、ミリアは龍の言葉を待つ。

龍は強い眼差しでエリスを見据えて口を開いた。

「この本は…渡せない！」

「…え？」

ミリアは思わずペタンと地べたに腰を下ろしてしまった。

・ ・ ・

「……………そう…デスカ…」

龍の返答を聞き、目を閉じたままエリスがポツリと呟く。
するとさっきまで黙っていたダルクがやれやれと肩を竦めながら一歩前に出て、龍に手に向ける。

紅色の本が輝きを放ち、エリスが呪文を唱える。

「ガウス」

呪文と同時にダルクの手のひらに黒い霧状のものが集まり、やがてそれは何かの塊となり龍に向かって打ち出される。

「が……！！」

当然龍に避けるすべもなく、黒い塊は腹部に命中し、後方に吹き飛ばされる。

「う、ぐ……（何だ……？まるで金属バットか何かで殴られたみたいなの……）」

腹部を抑えながら龍はヨロヨロと起き上がる。
さっきの黒い塊はすぐ目の前の地面に落ちていた。

「これは…鉄か？鉄の塊を打ち出す術…？」

目の前の鉄塊は紛れもなく本物だった。

「ウフフ…起き上がれるのね…意外とタフじゃない。」

ダルクがケタケタと笑いながら再び手をこちらに向ける。

「…おとなしく本を渡してくれませんか？渡さないなら攻撃を続けますよ？」

エリスが無表情な顔で龍を睨む。

「渡せ…ないね…」

痛む腹部を抑え、龍が声を絞り出す。

「…そうです力。」

再びエリスの本が紅色の光を放つ。

「ガウス」

「ぐっ！」

「ガウス」

「がはっ！」

「ガウス」

「う…あ…！」

術と共に容赦なく鉄塊が撃ち込まれ、龍が踞る。

「渡す気になりましたか？」

「…やな…こった…」

エリスの再びの問いかけにも龍は応じない。

エリスは溜め息をつき、無表情で自分の本に心の力を込める。

「ガウ…」

「龍！」

「!？」

エリスが術を唱える直前に別の声が響き、術が中断される。

「...ア...」

龍が横を見ると向日葵畑を背に、ミリアが佇んでいた。

「…オヤ、魔物もいましタカ…ン？」

エリスは突然の介入者に視線を向け、途端に目を見開く。

「ク……キヤ……」

!?

「クキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ
キヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ
アア!」

同時にミリアに視線を向けたダルクが奇妙な笑い声を上げる。
見た目も手伝って色々と凄惨な笑顔に思わず龍はおるか、パートナー
のエリスでさえ絶句する。

「クキヤキヤ…うれしいわ…ミリア…アナタパートナーが見つかったのね…」

「ダルク…」

ダルクは歡喜の、ミリアは何処か苦しげな表情で対峙する。

「ミリア…知り合いか？」

「ええ…」

龍の問いにミリアが頷く。

それを見たダルクはニイッと笑みを浮かべる。

「ええ…知り合い…一応知り合いよ…ミリアは私をオ・ト・モ・ダ・チだと思つてたらしいけどね。」

心底愉快そうにダルクが笑う。

その口調や笑みに龍は嫌悪を覚えた。

どうやったらかこまで歪んだ笑いが見られるのだろうか？

だがそんなダルクを無視して、ミリアは龍を見る。

何処か迷った表情を見せていたが、やがて意を決したようにミリアは口を開いた。

「龍…あの人達に本を渡しましょう。」

第六話 戦う意味（後書き）

登場人物紹介？

ウィリアム

12歳

赤毛で黒い手袋を嵌めた少年。手袋の中は鍵爪状になっている。純粹に魔界の王を目指しており、そのためには、相手を殺すことすら躊躇わない冷酷な一面をもつ。

その反面、普段は紳士的な態度で相手に接するため、余計に本質が掴みにくい。卓越した戦闘センスを持っており、ミリア曰く隙がない奴。

小次郎との関係は良好だったらしく、よく将棋や囲碁をしていたらしい。

また、密かに小次郎の盆栽を眺めるのが好きだったとか。

第一の術ソルセン

ウィリアム第一の術。

鐔の無い日本刀の形をした衝撃波を飛ばす。

第二の術ソルク

ウィリアム第二の術。手を鐔の無い日本刀の形に変化させる肉体強化呪文。心の力次第で切れ味が増すようだ。

第三の術ガンズ・ソルセン

ウィリアム第三の術。ソルセンより少し小さい無数の刃の衝撃波を飛ばす術。かなり消耗が激しいが、撃ちながら移動することが可能で、非常に広い攻撃範囲を持つ。

小次郎

ウィリアムのパートナー。本の色は飴色。過去に事故や病気などで殆どの肉親を失い、孤独の中で生きていた。作中ではそれらしい描写がなかったが、自身も病に冒されており、余命幾ばくもなく、ただ枯れるように死を待つ自分を受け入れた所でウィリアムと出会う。ウィリアムにかつての孫を重ね、協力を承諾。ただウィリアムの望むままに共に戦うことを決意する。周りの何にもほとんど関心や執着を見せないドライを通り越して砂漠のような人物。唯一熱心にやることは他界した妻が残した盆栽を手入れすること、ウィリアムと共に歩む戦いの道だけである。

第七話 戦う理由（前書き）

更新です！遅くなりました。

うゝん、やっぱ週一更新は無理なのか…（汗）

と、言うわけで第七話です。

誤字・脱字の指摘、感想などありましたらよろしく願います！

第七話 戦う理由

心の何処かで怯えていたのかもしれない。
いつかこの人も私から離れていつてしまうのではないかと。

BYミリア・マドレーヌ

気付いてしまった。

ああ、この人はバカだと。

さつさと本を手放してしまえば痛い思いをしなくてすむのに…
今も尚、手放さないと何てバカなんだろう。

気付いてしまった。

この人はもう自分にとって大切な何かだと。
だから自分のエゴで傷付ける訳にはいかない…そう思った。

だからこそ私は彼に告げる。

「龍…あの人達に本を渡しましょう。」

…柄にもなく泣きそうになる。けど泣くわけにはいかない。この人はバカでお人好しだから…
泣いたりなんかしたらきつとまた戦おうとしてしまう。だから…

・ ・ ・

「何を…」

「何言ってやがるのよテメエ!!」

言ってるんだ!…とは続かなかった。

代わりに龍の今の気持ちをいささか過激にアレンジしてダルクが叫び、ミリアに殴りかかる。

が、ミリアはヒョイとダルクの殴打をかわし、龍の傍まで跳ぶように数歩で辿り着く。

「せっかくアンタのパートナーをぶっ殺してへこませてやるうってのに…それじゃ意味ないじゃない…!」

ダルクが邪悪な笑みでミリアを睨む。
すると傍らのエリスが不快そうな顔をする。

「ダルク…ゲスな真似はよしてください。このパートナーは見たところ外道ではナイ。肅清する必要はありません。」

「エ・リ・ス〜！カマトトぶってるんじゃないわよお！結局無理やり本奪ってる時点でアンタもゲスなのよ！残念でしたあ〜！」

「野蛮なあなた達魔物と一緒にしないでください。アナタはこの戦いに勝ちタイ。私はさっさと戦いを終わらせタイ。目的は違いど利害がほぼ一致しているからアナタと組んでいるんデス。ましてやアナタの術の権限は私が握っているということもお忘れナク。」

「ハッ！この雌狐があ〜！」

「黙りなサイ。まずまたあのパートナーから返事を聞かねばなりません。」

「ハア？渡さないって言つてたじゃない。」

「アナタの耳は虫の穴ですか？魔物は渡す気満々でしタヨ。大人し

くしないとアナタの本を燃えるゴミに出しますヨ?」

「…チツ、どんだけ戦いたくないのよアンタ。」

エリスの脅しにしぶしぶダルクが引き下がる。

エリスは再び龍を見据える。

「と、言うわけで、どうデスカ?本を…」

「くどいぞ。あんたの耳こそ虫の穴なんじゃないのか?」

龍の返答にエリスが固まり、ダルクは必死で笑いを堪える。

「ダルク…第3の術を使いマス。この男を少し痛め付けてやりなさい。」

「…最初からそうやってぶっ壊しちゃえばいいのにさ…」

右頬をひくつかせながら話すエリスを呆れ顔で見ながらダルクは手を龍たちに向ける。

「ま、待って！本は今から渡…」
「第三の術… ロンド・ガウス！」

ミリアの訴えも空しく、再び黒い霧状のものが地面からダルクの手元に集まり、鞭のような形になる。

「チッ！やっぱりここじゃ集まりが悪いわね… まあいいわ… いくわよぉ〜！」

ダルクは苦々しげに舌打ちをし、鞭を振るう。
肉を裂き、骨を軋ませる嫌な音を立てて鞭は龍の身体中を痛め付ける。

「ぐ、あ…！」

既にダメージが蓄積し、動きが鈍っている龍に容赦なく鞭の連撃が叩き込まれる。

「ダルク！お願い待って！本は渡すから！これ以上は…」

「ハッ！なにさ！そんなにこいつが大事かい？魔界に帰った所でど
くセアンタは一人よ！それでも本を渡すってのかい？」

「関係ないわ…！私はもう龍を無関係な戦いに巻き込みたくないだ
けよ！」

ミリアが龍の前に立ち塞がり、鞭の連撃を引き受ける。

「邪魔よお！」

「うっ！」

ダルクの叫びと共に鞭が一閃、ミリアは横に撥ね飛ばされる。
更に鞭は龍の腕を絡めとり、龍を向日葵畑の中へ放り投げる。
ものすごい落下音と共に周りに静寂が訪れる。

「…放り投げるのはやりすぎデス…打ち所が悪かったらどうするの
デスカ…」

「うっさいわね、痛め付けろって言ったのはエリスじゃないのさ…」

エリスの非難めいた視線を無視してダルクがブスツとした顔で答える。

「まあいいでシヨウ…本を奪い取っておしまいデス。」

エリスは龍が落下した向日葵畑の方へ足を向ける。

「（よかった…これで解放してあげられる…）」

地面に伏したままミリアは安堵の表情を浮かべる。

さっきまでの攻撃でまたケガをしているかもしれないが、それもこれっきりになるだろう…

これでいいのだ…これで…

「…最後にラーメン…一緒に食べに行きたかったな……トランプにTVゲーム…またやりたいな……龍の作ったビーフシチュー…美味しかったな…」

ふと、今までの出来事が思い返されて再び涙が溢れそうになる。

人間界でのたったの二週間はミリアにとって初めて味わう暖かい日々だった。

「（大丈夫…たとえ魔界で一人でも…もう大丈夫…）」

まるで自分に言い聞かせるようにしながら、ミリアは目を閉じかけ…

「ナッ…」

「バカ…な…！」

エリスとダルクの驚愕した声を聞き、再び目を開ける。

「り、龍…？」

ミリアの視線に飛び込んできたのは、頭から血を流しながらも山吹色の本を握り締め、仁王立ちする龍の姿だった。

・ ・ ・

「（アレ…どうなったんだ？俺は？）」

気がつくと視界は半分青空と向日葵。
もう半分は赤だった。

「（ああ…投げ飛ばされたんだった。本を手放さなかったから…）」

そもそも何で自分はあるのに痛い思いをしながら本を守っていたの
だろう？

答えは自分でもよくわからない…だ。

ただエリスに本を渡せと言われた瞬間に脳裏をミリアがよぎり、本
を渡したくないという感情が自分の中で巻き起こった。

それだけ。

視界が赤く染まっていく…

・ ・ ・

『おはよ
』

『おはよう…あつ、いいニオイ…』

寝起きのミリアが目を擦りながら鼻をひくつかせる。

『今日はフレンチトーストだぞ。』

『フレンチ…？』

『…なんかものっ凄いうまいトーストのことさ』

うまい説明が浮かばず、訳のわからない説明になる。

『??まあいいわ…凄く楽しみ…』

ミリアの笑顔が花開く。

・
・
・

『ちょっと！何でこの赤い甲羅追いかけてくるのよ！』

『そういうアイテムなんだから仕方ないだろ。悪いが今回の一位は俺のものだ。』

『うつ…まだよ！まだコースの途中のアイテムBOXが…』

『ふん、それが使われるに逃げる切るまでよ！』

『あら？何かしらこれ？雷？』

『ちょ！待て！ジャンプ台前に…』

―次々と

・ ・ ・

『いつてらっしゃい！気をつけてね』

『龍、おかえりなさい…ス。ブラにする？それともぷ。ぷよにする？』

『……ゴールデン。イで』

―まるで走馬灯

・ ・ ・

『龍、一緒に戦ってくれてありがとう。』

…彼女という時間は憧れていた暖かい時間。

一人でいた時とは違う…

戦う理由？

充分だ。

俺は大切な友達を失いたくない…

だから…

―…本を渡せ？冗談じゃない！この本は…この本だけは渡せない…！

・ ・ ・

エリスは畏怖にも似た感情を龍に抱いていた。今現在戦っている場所ではダルクの力を完全に引き出せるかと聞かれれば答えはノーだ。この場所ではダルクの術の力を充分に発揮出来ない。

が、それはあくまでも魔物が相手ならば。である。

相手が生身の人間なら、既に動けなくなる程のダメージを与えた。そう自負していた。

まさか起き上がってくるとは…

「ずいぶんとタフなのね。起き上がってくるとは思わなかったわ…」

「ハッ…バイトで洗剤が入った段ボールの山に生き埋めになったこともあるからな…向日葵の中に埋められたくらいじゃへこまないっての…」

そう言いつつも龍の息は荒い。

虚ろな目で辺りを見回し、ようやくミリアを見つける。

ミリアは潤んだ目で龍を見つめる。

「龍…もうやめて…」

「やめねえよ…てか何で本渡そうなんて言ったのさ。」

消え入りそうなミリアの声を一蹴し、質問する。肝心のミリアからはまだ理由を聞いていない。

「…この戦いは…」

ミリアは小さな声で語り始める。

「正直な話、龍には無関係よ…それなのに毎回戦いに巻き込まれたら？時に死ぬような目にあったら？…きっと…きっとアナタはいつか私が疎ましくなる…」

ミリアの肩が震える。

俯いていて表情はよく見えない。

「それが何よりも怖かった…友達だと思っていた人が離れていくのが怖かった…」

震えるミリアを安心させるために龍はミリアに歩み寄った。

「ガウス！」

「ぐがつ！」

が、再び鉄塊が龍の横っ腹に命中し、龍が吹き飛ばされる。

「ぐ…お前ら…」

龍が涙目でエリス達を睨む。

今更だがぶつけられている鉄塊はすべからず腹部に命中。痛いなんて生易しいものではない。

とんでもない位の激痛を龍にもたらしていた。

「最早話し合いは無理でシヨウネ…あなた達を戦闘不能にシ…本を奪いマス…」

エリスの本が更に強い光を放つ。

その横でダルクミリアと龍を見比べ、ニヤニヤしながら口を開く。

「パートナーさあん？いいこと教えてあげるわ…そのミリアって女さ…生まれが少し特殊な訳よ…知ってた？」

「!」

ミリアの目が見開かれる。

「どついう事だ…?」

龍の問いかけにダルクはますます愉快そうに笑う。

「あら? あらあらあらあゝ? その様子じゃ、話してなくて知らないのねゝ… そいつさ… 何か魔界帰ると一人… 的な事言ってなかったあ?」

ケタケタと笑い声を上げ、ダルクが続ける。

「なんて言えはいいかしらねゝ人間界にもさ… 不吉の象徴とかそういう類いの物とか言い伝えとかない? そいつがソレよ。そのミリアって女の“存在そのもの”が魔界では災厄・不吉の象徴なのよ!」

ダルクの声が響き渡る。

ミリアは下を向いたまま動かない。

「わかる? その子といると、あなたにも災いが降りかかるのよ! なんだって魔界の保証つ…」

「黙れ！縫合面！！」

畳み掛けるようにわめき叫ぶダルクに龍の怒号が突き刺さる。
固まるダルクを無視して今度は龍が叫ぶ。

「魔界でどんな言い伝えがあるのかはわからん…もしかしたら本当に俺の近くに災いを呼ぶのかもしれない…だがそれがどうした！俺がミリアの本を渡す理由にはならねえだろうが！」

「……………」

ミリアは黙って聞いている。

「……」

「ミリア！…お前は…魔界に帰りたいのか？」

龍の一言にミリアが電撃を受けたかのような表情になる。

「俺は…」

「ガウス！」

「ぐはっ！」

龍が何かを言う前に鉄塊が飛んでくる。

「ロンド・ガウス！」

「が…！」

「あぐっ！」

黒い鉄屑の鞭が再び二人を襲う。

「龍？ 龍っていったかあ！？ ハッ！ ドラゴンたあ大層な名前じゃないか…！ てかオマエ…！ アタシを縫合面って言ったか…？ よし殺す！ 今殺す！ すぐ殺す！ マジ殺す！」

「…落ち着いてくだサイ、ダルク…」

鞭を振るい、激昂するダルクをエリスが半ば諦めたような表情で注意する。

最早こうなつては止められないデスネ…

エリスは溜め息をつく。

意外かもしれないが普段はダルクは普通…嗚呼、普通の女の子だ。一度切れるとこうなってしまうが。

「（デスガ…）」

エリスはダルクを見たあとで未だ鞭打たれるミリアを見つめる。
ダルクが彼女に向ける憎悪は異質だ。
エリス自身が戦慄するほどに。

「（過去に何かあったのでショウカ…？）」

・ ・ ・

「ぐ……」

「……龍……私は……」

鞭の連撃に龍が顔を歪めていると、横で鞭を受けながらミリアが口ごもる。

「ミリア……俺は……お前に魔界へ帰って欲しくない……」

「………！」

「何のために戦うか……そんな立派なもん無くたっていいんだよ……！理由なんかどうとでもなる……！」

鞭が容赦なく二人を打ちつけていく。頭から血を流しながら、息も絶え絶えになりながら龍は言葉を紡ぐ。

「また一緒にラーメン食うんだ！ゲームやるんだ！だから戦うんだ…！お前がいなきゃ…意味がないんだよ！理由はそれで充分だ！！」

ミリアの目から涙が止めどなく流れ落ちる。
ミリアは心から思った。

この人と…出会えてよかった…

「龍…私は…」

ミリアが絞り出すように声を出す。

「私は…ここにいたい…まだ魔界に帰りたくない…龍は…私の初めて出来た…大切な人だから…！！」

沈黙していた山吹色の本が光を放ち、力強く輝きだした。

・ ・ ・

そろそろ力…

エリスは心の力をさらに強く込める。

「ダルク、ロンド・ガウスを解除します。一番大きい呪文で止めを刺しましょウ。」

「……ええ、わかったわ…終わりにしましょう。」

ミリア達を打ちのめしていたダルクは一瞬不満そうな顔を見せるが、直ぐに同意する。

そろそろ飽きた。もうさつさと倒してしまおう。

「さあ…いきマスヨ…!!」

紅色の本が暴力的な光を放つ。

「オルガ・ガウス!!」

エリスの呪文と共に地面から黒い霧状のものが集まり、ダルクの手前でいくつもの鉄塊となる。

「（チツ…！やっぱキツイわね…）」

ダルクは内心歯噛みをする。

ここでは自分の力を充分発揮出来ない。

ダルクの術の力は“磁力”。本来は周りの鉄骨や鉄板などのあらゆる金属をかき集め、圧縮して打ち出したりするものだ。

だからこんな向日葵畑では術の威力は著しく下がる。

今までだって地中の僅かな鉄粉等をかき集めて脆い鉄塊を打ち出したり、弱い鉄の鞭を振るっていたのだ。

しかも弱いわりに燃費は最悪。

いいとこなしだ。

「（まあいいわ…）」

ダルクが力を込める。

無数の鉄塊がゆっくりと動きだし、ダルクの手の前で渦を巻くように螺旋の軌道を描く。

それでも…弱ったあの二人を沈めるのに十分な威力は持っている。

「（この鉄塊の嵐に飲まれて終わり……！？）」

同時にダルクは目を見開く。

相手の本の異様な輝きに思わず目を奪われていた。あれほどの輝きは見たことがない。

「く…ふざけんじゃねえ！」

構わずダルクは術を発動する。

螺旋を描くまさに鉄の嵐が龍とミリアに迫る。

が、二人の顔に先程までの曇りは無い。
あるのは強い戦いの意志！

「行くぜ！ミリア！！」

「ええ！お願い！龍！！」

「ミジヨル！！」

ミリアの片手から強大な黒い波動が放たれ、鉄の嵐に激突する。

「（ぐ…デカイ…込められている心の力が半端じゃない…！）」

ダルクの顔に焦りが出る。

すると、突然に鉄の嵐が嫌な音を立て始める。

「（どういう事？螺旋のスピードが遅く…イヤ、これは…私の術の磁力が弱まっている！？）」

減速した無数の鉄塊は互いにぶつかり合い、さらに減速する。

結果、鉄の嵐は黒い波動に侵食され、土埃を上げながらその勢いが

完全に消失する。

「そんな…相殺？イエ、僅かにこちらが押し負けタ…？」

目の前で起きた出来事にエリスが啞然とする。
が、その様子を見たダルクがすぐさま激を飛ばす。

「く…まだよ！エリスウ！！」

「！！…わかってイマス！」

すぐさま頭を切り替え、エリスは本に心の力を込める。
土埃でうまく相手が見えない。こうなれば土埃ごと風ぎ払うまでだ。

「ロンド・ガウ…」

が…術は最後まで唱えられることはなかった。
響いたのはガン！という何かの音。

「ウ…！」

途端に手に走る激痛。

同時にさっきまで手元にあったものが無い感覚。

何かが手にぶつけられ、自分の本が撥ね飛ばされたと理解するまでにほんの一呼吸の間が空く。

「ぐ…何やってやがるのよエリ…」

再び、ガァン！という音と共に今度はダルクの言葉が遮られる。

「がふ！？」

目の前が灰色に染まる。

何かを顔面にぶつけられたのだ。

「ぐ…あ…」

ダルクは顔半分をてで押さえながら飛んできた物を見る。

「私の…鉄塊…！？」

ハッとして視線を前方に向ける。

土埃がかき消え、何かを投擲した後のような体制の龍が視界の端に映る。

気が付けば二個目の鉄塊がダルクの顔面に命中した。
龍がしてやったりの顔になる。

「ドラ…ゴン！…てめええ！」

ダルクの頭に完全に血が上る。
故にすぐそこまで迫る黒衣の少女に気付くことが出来なかった。

「イケナイ！ダルク！」

「！？」

「遅いわ！」

本を拾い上げたエリスが叫ぶも時既に遅く。
ミリアはダルクの至近距離まで近付き、手を相手に向けていた。

「ミジヨル！！」

「ギヤアアアアアアアアアア！！」

黒い波動が完全にダルクを飲み込んだ。

「ダルク！大丈夫デスカ！？」

エリスが駆け寄る。

「ぐ…あ…おお…」

ダルクは息も絶え絶えになりながらヨロヨロと立ち上がる。

「（ぐ…身体に上手く力が入らない…！…なるほど…さっき術の磁力が弱まったのにも…これで納得がいったわね…）」

まともに術を受け、少し冷静になってダルクは分析する。

「（恐らくアイツの術は“衰弱”…術にぶつければその術のエネルギーを弱体化…生身の人間や魔物が相手なら今の私のように魔力や

体力が削り取られる…）」

ダルクは龍の方を見る。

山吹色の本は未だ強い光を放っていた。

「ここデハ…部が悪いデスネ…」

いつの間にか隣に立ったエリスがぼやく

「ナラバ…」

紅色の本が輝く…

・ ・

・
「まだ倒れないか…！」

「龍、油断しないで！まだ本が輝いてるわ！」

ミリアの視線の先には紅色の光とまだ目をぎらつかせるダルクがいた。

「ミリア…ドラゴン…！」

ダルクが憎悪を込めた声を出す。

衰弱した彼女からは想像もつかない太い声だった。

「今回は…その本は諦めてあげる…けど、これは予言よ…アンタ達は後悔する」

ダルクがニイッと笑う。

「ここで本を燃やしておけばよかったと…魔界に帰ればよかったと…殺す…アンタ達は確実にアタシが殺してやるよ…！」

紅色の光が一際強まり、エリスが呪文を叫ぶ。

「ガウシルド！」

黒い鉄粉が鉄塊となり、互にくつつくことで巨大な壁を形成。龍とミリアの視界を遮る。

「く…目眩ましか？ミジヨル！」

黒い波動が鉄の壁をを侵食する。たちまち壁はガラガラと崩れ、鉄粉混じりの土埃が舞う。

視界が回復した頃には、エリスとダルクの姿は何処にもなかった。

「逃げた…みたいね…」

ミリアがふうと一息を入れる。

「ああ…そうみたいだ…な…」

それに答えようとしたが、どうやら限界が来たらしい。
ドサリという音と共に龍は崩れるように倒れこんだ。

「!?!?…龍?…龍!…しっかりして!?!…」

龍は遠のく意識の中でミリアの声と確かに存在する本の感触だけを感じていた。

もはやミリアに大丈夫、疲れただけだと告げる体力すらない。
ただ、頭に思うことは一つ。

「（よかった…守り抜けた…）」

握られたもう片方の手に温もりを感じながら、龍は心の中で呟く。
安堵の表情を浮かべ、龍は意識を手放した。

・ ・ ・

「よく…応じてくれましたネ。」

ふらつくダルクを支えながらエリスが話しかける。

「なんでよ?」

「イエ…アナタの性格上、あの場で倒さなければ気がすまないように思えたのデネ…」

「別に…ただ全力であの二人をミンチにしたいだけよ。この辺のシヨボイ鉄じゃ、話にならないっての。」

「マア…あそこで戦うのは部も悪かったデスシネ…逃げたのは得策デシタ。」

「うぜえよ！エリスだって心の力切れかけてバテバテなんだろう！すました顔してんじゃねえよ！この雌狐！」

エリスの言葉にダルクが激昂する。

「誰が雌狐デスカ…その下品な言葉遣いはやめてくだサイ。」

「雌狐に雌狐って言って何が悪いのさ！まったく傑作だよ！なにが私の両親モ…だよ！オマエの両親思いつきり健在じゃないか！勝手に殺しやがって！てか、いつまでこんな他人の真似事やるつもりさ！…！」

「勿論、勝つまでデス。“彼女達”のやり方がリスクを少なく、敵を倒せる可能性があるのですカラ…」

「……………」

「騙されて素直に渡してくれるならヨシ、応じなければ、その時初めて戦えばヨイ。これ全て勝利の為の策略デス。」

エリスが涼しい顔で言い放つのをダルクは呆れ顔で見る。

「だからって倒されかけた相手の戦略使うとはね……」

「敵から学ブ…良い言葉だとは思いません力？」

やれやれ…といった顔でダルクは首を振る。

自分も結構な性格をしているが、この女も相当だ。

「まあ…いいわ…楽しみも増えたし。」

ダルクの脳裏にミリアと龍の姿が浮かび、残忍な笑みを浮かべる。

「（最高級の絶望を味わわせてあげるわ…それまで精々生き残るとね…）」

傾き始めた日の光がダルクの乱れた桃色の髪を照らしていた。

第七話 戦う理由（後書き）

登場人物紹介？

ダルク

年齢：15歳

土気色の肌、ボサボサで桃色の髪をした女の子の魔物。顔の額と頬には手術痕のような傷があり、恐ろしい印象を与える。

性格は普段は穏やかだが、一度戦いとなれば好戦的で、キレると手がつけられない。が、エリス曰く根っこの方に理性が残っているらしい。

何らかの理由でミリアに恨みを抱いており、まだミリアが龍と出会う少し前にミリアと遭遇。攻撃を仕掛けた。

エリスとは口喧嘩はするが、陰悪という訳ではない。

術の特性上、市街地などでの戦闘が得意。

第一の術 ガウス

ダルク第一の術。手の前に磁界を発生させ、磁力により近くのあらゆる金属を引き寄せ、圧縮。砲弾として射出する。ガウスに限らず、ダルクの術は近くに金属がなくても地中の僅かな鉄粉等をかき集めて即席の鉄を作り、利用出来る。（勿論、威力・燃費共に悪い。）

第二の術 ガウシルド

ダルク第二の術。前方に広範囲の磁界を発生させ、近くの金属類を

かき集めて壁にする。カバー出来る範囲が広いが、防御力は高くない。

第三の術 ロンド・ガウス

ダルク第三の術。鞭状に磁界を発生させ、金属類をかき集めて巨大な鞭を形成する。場所によっては鉄骨などで鞭が形成され、暴力的な威力を発揮する。

第四の術 オルガ・ガウス

ダルク第四の術。螺旋状の磁界を発生させ、正に金属の嵐とする術。強力だが、内包する金属によって威力変動するという欠点がある。

エリス

年齢：19歳

ダルクのパートナー。本の色は紅色。小麦色の肌にウェーブのかかったショートヘアをもつの黒髪の女性。

少し外国訛りのたどたどしい日本語を話す。

性格は穏やかだが、あらゆる勝負事の最終的な勝者を目指す性格で、そのためにはあらゆる手段を尽くす。龍に話したことの殆どが戦わずして龍から本を奪うための偽りである。冷酷で狡猾なようだが、良識は備えているため、一般人には手を出してはいない。

戦いに参加した理由はそこに戦いがあるから。どこぞの登山家のようない分である。

因みにエリスという名前も偽名。

余談だが、彼女達はこの戦いの初期にある魔物とそのパートナーと遭遇。本を渡せという要求をはねのけ、対決するが、大敗し、奇跡的に逃げ延びた。

その後、そのパートナーの話の一部を拝借し、極力戦わずして本を奪うスタイルを取り入れた。

第八話 見舞いと回想（前書き）

またまた遅くなりました（汗）
やっとこせ八話目更新です！

誤字・脱字・感想などありましたらよろしく願います！

第八話 見舞いと回想

昔の話は好きじゃない。

けどこの人には話しておきたかった。

本当は聞きたいのに私を気遣って何も言わない、優しいこの人に…
私のことを知ってほしいと思ったから…

BYミリア・マドレーヌ

「へい、ネギラーメンお待ち！」

「ありがとう、おじさん。」

「バカヤロウ、おじさんじゃねえ、マスターと呼ばえ。」

極上の匂いと共にネギラーメンがミリアの前に置かれる。
夕方。屋台『閻魔蟋蟀』にミリアは一人で来ていた。

「龍ちゃんは…大丈夫かい？」

「うん、お医者さんの話だと、暫く刺激の強いものを食べないで安静にすれば大丈夫ですって。」

ラーメンを啜りながらミリアが答える。

ダルク達との戦闘の後、倒れてしまった龍を抱えて向日葵畑を出た方がいいが、どっちへ向かえば病院に着くのかわからない。途方にくれていた所でたまたま食材を仕入れに来ていたラーメン屋のオツチヤンに遭遇。何とか龍を病院に連れていくことが出来たのだ。

「あちゃー！それじゃ暫くはラーメンは食べれないなあ。ま、命が助かったんだからいいか。」

カツカツカ…とオツチャンが笑う。

全くもってその通り。そう思いながらミリアは頷く。

龍が目を覚ました時は心の底から安堵が込み上げ、思わず泣いてしまったくらいだ。

あの時はただ、龍が生きていることに感謝した。

その時の龍の困った顔が目に見え、クスリと笑ってしまう。

そうこうしているうちにミリアはラーメンを食べ終わり、代金をトレイの中に置く。

「ごちそうさま。美味しかったわ。」

「まいどさん！龍ちゃんが元気になったら二人でまたおいで。」

「うん。あつ、そうだ。おじさん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「バカヤロウ…マスターと呼べえ。」

「うん、おじさん。実は…」

「バカヤロウ…マスターと…」

「おじさん。」

「バカヤ…」

「おじさん。」

「…ハイ」

ニコニコと笑いながら話すミリアに何かを感じとったのかひきつった顔でラーメン屋のオッサンが返事をする。
決して話が進まないわ…といったミリアのオーラを感じたからではないハズだ…多分。

「実は…」

龍以外の人間とあまり話したことがなかったのもあるのか、いささか戸惑ったかのようにミリアは話を始めた。

・ ・ ・

「暇だ…」

桜塚龍は自分の部屋の天井を眺めながら呟いた。

ダルク達からの戦いから二日。

結構攻撃を受けたわりには命や今後に影響する傷がなかったのは幸運というべきだろう。

大事をとって初日は学校を休み、二日目から行こうとしたらミリアの猛反対を受け、二日目も休んでしまった。

「……………」

本当にやることがない。一日目は疲れもあったのか、安静に寝て過ごしたが、二日目はそこそ良好くなって来たので、若干暇をもて余す。

ゲームでもやるか…

龍はベッドから起き上がり…

ピンポン！

インターフォンの音で首を傾げる。

誰だ？ 買い物をした行ったミリアには鍵を持たせているから鳴らす理由がない。大家さんか…？

ピンポンピンポンピンポン！

……心当たりが出来てしまった。

こんな鳴らし方をする奴はあいつ以外あり得ない。

龍は玄関に向かい、ドアを開ける。

ガチャ

「よ！怪我したんだってな！生きてるか？」

玄関先で同級生の山口が片手を挙げて陽気に笑いながら立っていた。

「ああ…何とかな。てかどうしたんだ？何かあったのか？」

もうインターフォンについては今まで何度も突っ込んだのでそのまま疑問をぶつける。

「何かあった？お見舞いに決まってるじゃないか桜塚くん！」

「とっても心配したんだからね！」

山口の後ろからこれまたクラスメイトの水城と雪音が現れる。

そのまま一列に並んだ三人は山口を先頭に時間差で上体を円を描くように回す。

「……何故にEX。LE？」

「いや、元気だと思って。」

「圧巻だろう？」

「結構練習したんだよ？」

ジト目の龍に対して、

山口は大真面目に。

水城はドヤ顔で。

雪音は得意げに笑う。

ああ…バカだコイツら…

ただどこ処か嬉しくて、龍は肩を竦めながらも笑う。

「まあ、上がれよ。ジュースくらいならあるハズだ。」

そう言って龍は三人を部屋に招き入れた。

・ ・ ・

「女の子の匂いがする。」

部屋に入るなり水城がぼそりと呟く。

「ギクッ！」

「!？」

「な、なんですとー!!」

龍の身体がビクリと跳ね上がり、雪音はその場で固まり、山口は大絶叫をあげる。

「うん、間違いないね。桜塚くん以外の嗅ぎ慣れない匂いがするよ。」

「すげえ！犬かお前！」

「……………」

感心する山口だが、当の龍はそれどころではない。嗅ぎ慣れたって…

聞きようによつては普段こいつは俺の匂いを頻繁に嗅いでいたかのような発言である。

友人のまだ見ぬ一面を垣間見て背筋がざわつく感覚に思わず身震いする。

「み、み、水城君…いくらなんでも…き、気のせいじゃ…桜塚君の部屋にお、お、お、女の子だなんて…！」

雪音がプルプル震えながら反論する。

心なしか涙目だ。

「そ、そうだ！気のせいだよ水城！俺が女の子連れ込んでるわけないだろうが！」

すかさず龍が畳み掛ける。

まさか連れ込んでいるどころか一緒に住んでますなんて言えるはずもない。

ここは勘違いと思って引き下がって貰うより他はないだろう。

だが水城直樹という男は勘違いなんて優しい判断を下してくれるような好青年ではなかった。

「いや…桜塚くんウォッチングを始めてはや二年。最近何だか甘い香りがすると思っていたら、案の定だ。これはその女の子…かなりの頻度でここに来てるんじゃないかい？下手したら外泊も…」

「待て待て待て待て待てーい！！」

水城の色々と問題ある発言に思わず龍が制止する。

「桜塚ウォッチング！？二年！？なんだよそれ！！何でここでキモイカミングアウトしてるんだよ！？」

二年も観察されていた事実には驚愕すると同時にほぼ正解と言ってもいい水城の推測に龍の焦りが加速する。
と、ここで龍は改めて考える。

今の自分の状況。高校生と見た目同年か少し下くらいの女の子が二人つきりで同居…

あれ？これ知り合いとかに気付かれたら結構問題になるのではないのか？

特に同級生などに知られたら…

格好の話の種もとい、からかいの素になるのではないだろうか？

自分の今の状況を思い返し、背中に冷たい汗が流れる。

もし…ここでミリアが帰って来たら…？

「甘い香り…頻繁に…外泊…」

雪音は完全に呆然とした表情で固まる。機械なら煙を噴いているような状態だ。

「ハ…ハハハ…水城く考えすぎだろくいくらなんでも龍が俺という親友を差し置いて彼女作る訳…」

ガチャ

「ただいま…龍？どうかしたの？何か玄関に靴がいつぱい…」

山口が笑いながら龍の肩をポンポンと叩いた所で玄関から控えめな声がし、暫くして買い物袋を片手に下げた黒衣の少女が現れる。

「…」

ミリアを見た山口、水城、雪音はただ口をあんどり開けて固まる。

龍は思わず何もない部屋の天井を見上げる。何で嫌な予感ってのは
こうまでもよく当たるのだろうか？
ミリアは訳も分からず、首を少し傾げる。

「チ…」
「血？」

最初に動いたのは山口だった。ミリアが少し物騒な変換をするがも
はや彼は気にすまい。ただ単に、彼は発散するために息を吸う。
視線の端で水城が耳を塞ぐのが見えた。

「チクシヨオオオオ!!」

山口の大絶叫が伊勢海老荘210号室に響き渡った。

・ ・ ・

「っ…疲れた…」

「わ…私も…」

龍はベッドに突っ伏しながら。ミリアはベッドのすぐそばに寄りかかった状態でぼやく。
あの後山口が

「裏切り者オオオ!!」

と半泣きで掴みかかってきたり。

雪音と水城に質問攻めにあったりと大変だった。

ミリアについて聞かれた時が一番大変だった。
特に言い訳を考えていなかった龍が口ごもり、答えに窮した様子を見たミリアが咄嗟に

「じ、実家！実家から逃げてきたのよ！」

と言ったものだから、盛大に勘違いした山口・雪音が

「か、駆け落ちか！？異郷の中心で愛を叫ぶのかぁ！？」

「ダ、ダメよ！そんなのダメエ！」

と叫び大騒ぎとなった。慌て駆け落ち説を否定し、少し冷静になったミリアが三人に説明（勿論魔物などの事は話さず、適当なこじつけで）し、何とか事態を収拾した。
もう遅いということで三人は帰ったが…

「裏切り者裏切り者裏切り者裏切り者お…」

山口うるさい。

「うゝ…うゝ…」

い、岩本！？大丈夫か？

「フフン。面白くなりそうじゃないか…桜塚くんはそう簡単にあげないよ…？」

水城、箱入り娘のお父さんかお前は…

と、いった具合に捨て台詞やら、うなり声（？）やら、妙な宣言を

して帰って行った。

学校で言いふらさなければいいが…おそらく大丈夫だろう。

…多分。

それにしても…

「よくあんな嘘っぱち思い付いたな。」

「何ていうか…自分でも驚いているわ…」

結局ミリアは、実家から逃げてきたという設定をそのまま押し通した。

騾や家のしきたりに我慢がならず、ある日逃亡。貯金を使い、かなり遠くまで来たはいいが、行く宛もなく途方に暮れていた。

そんな時に龍と出会い、居候させてもらっている…ということにしたのである。

まあ龍も言ったが、勿論嘘っぱちである。

「あんなに連続で嘘ついたの…初めてだわ…」

げんなりした顔でミリアが立ち上がり、キッチンへ向かう。

あの三人が帰ってからミリアが何かやっている…

「…そう言えば、さっきから何してるんだ？」

「ご飯作ってたのよ。」

「……………ハイ？」

ミリアの返答に龍が固まる。
今彼女は何と言った？

「…作れるの？」

「やったことないわ。それに何だかやり方が魔界と似てたり違ってたりするから…」

ミリアがキッチンの横に置いてある本を龍に見せる。

「『出来る！色々な料理』…？」

「今日買ってきたの。大丈夫よ。胃に優しい料理にしたから。」

そう言ってミリアが土鍋を持ってくる。

龍が蓋を開けると、暖かい湯気と共に美味しそうな匂いが鼻腔をくすぐる。

「卵粥か？」

「ラーメン屋のおじさんが、胃に優しい料理はお粥って言ってたから…よかったら食べて？」

「…いただきます！」

誰かの手料理なんて殆ど食べたことのない龍は静かに感動しながら蓮華を握る。

「おつ、うまい！」

「本当？よかった…」

卵粥はちょうどよい味付けで、どんどん食が進む。そんな龍の様子を見て、ミリアはホッとした表情になる。最終的にほんの数分で龍は卵粥を平らげてしまった。

「「」ちそうさまでした。」

「お粗末様でした。」

龍が食べ終わったのを見届けると、ミリアは土鍋をキッチンへ持って行き、手早く洗い始める。

その後ろ姿を龍は何となく見つめていた。

腰程までの綺麗な黒髪が静かに揺れる。

不意にダルクの言葉が脳裏に蘇る。

『そのミリアって女の“存在そのもの”が魔界では災厄・不吉の象徴なのよ!』

どうしてミリアの存在が災厄や不吉の象徴になるのだろうか？

魔界で何があったか、それとも言い伝え的なものにたまたまミリアが当てはまってしまったのか…

気にならないといったら嘘になる。

でも恐らく辛い過去のハズだ。それを掘り返すことは龍には躊躇われた。

「……楽しい人達だったわね。」

不意にミリアが話始める。

泡だらけの土鍋に水がかけられる。

…洗剤使いすぎだ。後で教えなければ。

「ん？ああ、山口達か。」

「うん、こつち来てから人間と話す機会はあまりなかったから新鮮だったわ…」

「あいつらとは中学二年生からの付き合いでさ。この前の向日葵畑に昔俺を連れて行ってくれたのもあいつらなんだ。」

「そつか…あの人達が龍の友達なのね…」

土鍋を洗い終わり、ベッドのすぐ近くまで戻ってきたミリアは近くのクッションを引き寄せ、ストンと座る。

顔が少し寂しげなのは気のせいではないハズだ。

何か声をかけたいが、こんな時に限ってなんにも浮かんでこない自分の頭に龍はうんざりしていた。

暫くの静寂が訪れる。

時計の針の音がやけに大きく聞こえる。

沈黙を破ったのはミリアの方だった。

「ダルクが言っていたこと覚えてる？私が魔界では災厄・不吉の象徴だって。」

「…ああ。でもどうして…？」

「実は私がそう呼ばれている詳しい理由はわからないの。生まれて物心ついた時には義理の両親に私の本当の両親は死んだと聞かされて…私は古くて大きなお屋敷の地下で育ったの。本当の両親は顔も覚えていないわ。」

「……………」

「義理の両親の家は凄く厳しい家でね…外出時間以外はずっと地下の書斎から出してもらえなかった…肝心の外出時間もお屋敷の庭以外の場所に行くのは禁止されていたの…」

「そんな…それじゃまるで…」

軟禁かあるいは囚人だ。

そんな生活を小さい頃からしてきたというのだろうか？

「本はたくさん、本当にたくさんあったから退屈はしなかったわ。食事も運ばれてくるし、お風呂とか生活に必要な最低限のものはすべて地下にあったの。でも……」

ミリアは俯く。

昔を思い出したのだろうか？少し辛そうな顔になる。

「それだけだった…小説で読むような温かい家族はなくて、一緒に楽しく遊べる友達もいなかった…いたのは私と顔を合わせようとしてない義理の両親とまるで化け物を見るかのような目で私を見る使用人の人達だけ…」

ミリアは目を閉じる。

淡々と過ごしていた日々。

思い出すのはあの出来事…

・ ・ ・

一年前―
魔界のとある小さな村

コン…コン…

遠慮がちなノックの音が聞こえる。
その音でミリアはぼんやりと覚醒する。
もう朝か…

コン…コン…

何かを恐れるかのように乾いた扉の音が響く。
ミリアはムクリとベッドから起き上がり、ドアの方へ向かう。
ドアを開けると朝食のトレイを持った初老の女性がビクリとした顔

でミリアを見る。

「あ…あの、お嬢様…朝食でございます。」

まるで目を合わせたら殺される。といった表情。別に取って喰う訳じゃないのにどうして皆こんな顔をするのだろうか？
この屋敷に来て十数年。未だに謎だった

ハア…と溜め息を漏らしてからミリアはトレイを受けとる。
使用人達のこの表情にも、もう慣れっこだ。

「ありがとう。いただくわ…」

今日もまた、代わり映えのない一日が始まる…
そう考えただけでミリアはなんともいえない虚無感に苛まれていた。

第八話 見舞いと回想（後書き）

僕が風邪をこじらせた日、お見舞いに来た友人は何故か横でポケモンやっていたかと思ったら僕の持つてゐる漫画を一气読みして帰って行きました…

何しに来たんだアンタ（笑）

さて、第八話。お読みになっていただき、ありがとうございます！
次話はミリアの過去を少しだけ…

9月9日までガチで忙しいので次の更新は10日以降になると思います。

拙い文ですが、次話も楽しんでいただければ幸いです。
ではまた…

第九話 ミリアの過去（前書き）

非常に…非常に更新が遅くなりました（汗）
申し訳ありません。

ある事情でリアルに死ぬ所でした…身体を大事にしよう！健康が一番！と痛感している今日この頃です（・・；）
拙い文ながらこうしてまた龍とミリアの物語を紡げるのを嬉しく思います！

誤字・脱字の指摘、感想などありましたらとても励みになりますので宜しく願います！
では更新です！

第九話 ミリアの過去

あの日の話…

幸せだったけど、とても悲しかった日の話…

Byミリア＝マドレーヌ

そこはある種の異界のような場所だった。

天井まで届く大きな本棚がドア以外の空いた壁を完全に覆い隠し、部屋のうちようど真ん中に机と安楽椅子。一見すれば書斎のように見えるが、その安楽椅子の向こう側にはシングルサイズのベッド。書斎と寝室が兼用したような部屋。

一応、奥にはバスルーム等に通じるドアがあり、生活に必要な設備は整っている。

そこがミリアに与えられた部屋だった。

「…まるで本で作られた牢獄だわ…」

朝食のパンを咀嚼ながらミリアがぼやく。

朝昼晩に食事は運ばれてくるし、お風呂も入れれば、洗濯もしてもらえる。

牢獄というならば破格の待遇と言える。

が、それ以外のものは無い。外出は一週間に一度、それも三、四時間、屋敷内か庭に放られるだけ。

まだペットのほう散歩という名目でたくさん散歩しているのではないだろうか？

今までここから抜け出そうと考えたことも一度や二度ではない。が、自分の住む屋敷は恐ろしいほど警備が厳重で、とても抜け出せるような場所ではない。

結局、ミリアはこの世に生を受けてからのほぼ全てをこの本の牢獄で過ごした。

「ごちそうさま」

朝食を食べ終わり、トレイを部屋の出てすぐの床に置く。

こうしておけば使用人が回収していつてくれる。

「……………」

無言で視線を上に向ける。

部屋を出たすぐ先に延びる階段の上に頑丈そうな大きな扉が見える。普段は外から鍵がかけられ、ミリアは出ることができない。

が、今日は違う。

今日は久しぶりに外出が出来る日。

そろそろ鍵が開けられる筈…

暫くぼんやりと視線を扉に固定していると、やがてガチャンという音と共に鍵が外れる。

時間が来たのだ。

ミリアがゆつくりと扉に近づき、扉を開くと見慣れた顔が視界に飛び込む。やや血色の悪い肌に赤い目、オレンジとも黄色ともつかぬ色のクシャクシャの髪。この屋敷の主である魔物、カーンだ。

「昼食までには戻りなさい。あと、敷地の外には出ないように。」

「…わかりました。」

淡々と話すカーンに対してミリアもいつも通りの調子で返す。

正直な話、カーンとまともに口を交わしたのは幼少の頃のみで、ここ数年はこの事務的な会話ぐらいしかしていない。

昔した話というのも私の両親はどこ？や、どうして私は外にでちゃ行けないの？など、自分の方から話しかけた記憶ばかり。

カーンの方からミリアに話しかけたことは殆ど無いのではないだろうか。

ちなみに最初の質問には両親は死んだ。二番目の質問にはこの家はそういう家だから。だそうだ。一番目はともかく、二番目は未だに納得出来ないのは内緒だ。もしかしたら彼も気がついてるかも知

れないが。

「旦那様。」

不意にカーンの背後からいつの間にか現れた初老の使用人が呼び掛ける。

「お客様でございます。」

「…わかった。すぐに行く。庭に出ていなさい。屋敷に入ってきてはいけませんよ。」

カーンの顔が強ばったように見えたのは気のせいだろうか？
が、確認する間もなくカーンは無表情でミリアにそう言い放つと、
使用人をつれて足早に歩き去って行ってしまった。

暫くカーンを見送っていたミリアだったが、やがて疲れたような溜
め息と共に肩を竦める。

出ていると言うなら出ているしかない。

今日は屋敷を歩き回りながら警備の穴を探そうと思っていたのに。
少しだけ重い足取りでミリアは玄関へ向かって歩き始めた。

・ ・ ・

「ようこそおいでくださいました。」

応接室にてカーンは相手に深々と頭を下げる。

「うむ、物資の運搬任務中だね。こちらの様子も見てこいとのこと命令で立ち寄らせて貰ったよ。」

カーンの挨拶に対して相手も丁寧に応える。

見たところ羽振りの良さげな服に身を包んだ騎士風の男の魔物だ。

「あの少女は？」

「今は屋敷の外に。」

「大丈夫なのだろうね？」

「今の所、特に問題は見受けられませぬ。」

何処か不安げな表情の騎士風の男に対してカーンは無表情に淡々と答える。

「そうか…ならいい。引き続き監視を怠るな。何かあったらすぐに王宮に使いを出したまえ。」

「要件はそれだけで？」

「いや、もう一つ伝えることがあって来た。」

カーンの言葉に一瞬安堵した表情になった男は元々真面目で頑固そうな表情をさらに固くし、カーンに向き直る。

「近々、選定の戦いが始まる。恐らくあの娘も参加することになるだろう。」

「……………」

「あの術は…発動してはいませんか？」

「ご安心を。彼女には術の使用は禁じております。」

「ならばいい。十一年前のあの惨劇はもうあつてはならないのだからな。」

男は瞼を閉じ、嫌な記憶を拭い去るかのように頭を振った。

「王を決める特権にて早々と消し去って貰いたいものだ……」

・ ・ ・

「これって……」

庭に出たミリアは驚愕で目を見開いた。

目の前にあるのは立派な装飾がされた荷馬車だった。

「この紋章……確か本で見たことある……王族の紋章……！」

でもどうしてここに？

ミリアは首を傾げる。

ミリアが住むこの村は王の宮殿のある都市からは遠く離れた田舎と言ってもいい。

王族がわざわざ来る理由が全く思い浮かばない。

「……………」

ふと、ある考えが浮かび、暫く荷馬車を見つめていたミリアはキョロキョロと回りを見回す。

人影はない。あるのは庭の装飾された植物と、立派な木の側に立てられた墓（使用人の話によればカーンの妻の墓で、この木を大層気に入っていたとか）だけだ。

荷馬車の荷台は布がかけられていて運転席からは見えなくなっている。

ここなら、あるいは…

ミリアはヒラリと荷台に飛び乗り、その中に身を潜めた。

「…凄い」

潜り込んで直ぐに感嘆の声が漏れる。

荷台の中は見たことのない果物や香辛料、毛皮でいっぱいだった。

果物のいい匂いに思わず手がでそうになるが、そこはぐつと堪える。さすがに王族の荷物に手を出す気にはならない。もっとも今から無賃乗車をしようとしている自分が何を今更といった感じではあるが。

「なんか…こんな場面小説で読んだわね…」

今の自分の状況に思わず笑みが浮かぶ。

ともかく今日は久しぶりに。いや、下手すれば初めて刺激的な一日になるのではないだろうか？

多少の叱責は覚悟しているが、それを差し引いてもミリアは外の世界への興奮を抑えきれなかった。

・ ・ ・

柔らかい風が頬を撫でる。

どうやら昼寝をしていたらしい。

少女は起き上がって伸びをする。日が高い所を見るとまだお昼を少し過ぎた所だろうか？

「飯にするか…」

少女はスンスンと鼻をひくつかせ、聞き耳を立てる。

透明感のある水の匂いと。サラサラと水の流れる音と、ザザザザツといった背後の坂から何かが滑り落ちる音。

川が近くにあるなら魚でも狩ろう。

…何かが滑り落ちる音？

くるりと後ろを振り向く。

「キャアアアア！」

「はあ！？」

ドシン！という音がこれほど当てはまる状況は他にないのではないだろうか？

滑り落ちて来たソレに撥ね飛ばされながら少女は考える。

目が覚めたら黒髪の少女が滑り落ちてくるなんて中々無い体験だ。

「イタタ…ちょっとなんなのよ。」

ぶつめた箇所をさすりながら少女が立ち上がる。思った程痛みが無いのは黒髪の少女が軽かったのが幸いしたのだろう。

「う、ごめんなさい！ やつと自由になれて、ついはいでたら坂があるのに気づかなくて…」

慌て黒髪の少女が頭を下げる。

その様子をみて少女はポリポリと頭を掻く。わざとではないならまあ仕方ないが、はいで坂に気づかない？

どんだけ鈍いのさ。

そう思いながら少女は黒髪の少女をまじまじと観察する。

綺麗な子だ。絹のように艶やかな黒髪は葉っぱやら枝やらが引つ掛かってはいるがそれでも美しい。瞳はルビーのような赤。何処かのいいところのお嬢様にも見えない。

少女がそんなことを考えていると目の前の少女はみるみる青ざめていく。

ああ、気がついたか。この顔を見たら下手したら気絶しちゃうか？ そんなことを思う。初対面の魔物が自分の顔を見たら大抵は恐怖などのマイナスの感情を抱く。
この少女も…

「か…顔が…」

「ん〜？」

口をパクパクさせる黒髪の少女に意地の悪い笑顔で答える。もう慣れっこだ。

「ご、ごめんなさい！私のせいでそんな大きな傷！それに顔色が悪いわ！どこか痛いのか？」

…予想外の反応だ。

あの衝突でこんな傷が出来るわけが無いだろうに。

「い、いや、これはもとも…」

「本当にごめんなさい！ああ…何てお詫びしたら…どうしてこんな…もしかして私が自由になったから？黙ってあそこでおとなしくしていれば…」

「聞けよコリアア！傷も顔色の悪さも元々だつつつの！」

「…へ？」

あたふたと慌てる黒髪の少女に一喝する。
一瞬面食らった少女はヘナヘナと座りこむ。

「よ、よかった…私、女の子にとんでもないことしちゃったかと…」

「大したこと無いわよ。アンタが軽かったからそんな痛くなかったし。ちゃんと飯食ってんの？」

「な、ちゃんと食べてるわよ！今朝だって…」

キュルルルル…

「……………」

「……………」

明らかにお腹の音だった。黒髪の少女の頬がみるみる赤く染まっていく。

プツと吹き出すと少女は悔しそうな顔でこっちを見上げる。
考えてみれば今はお昼時だ。

「ちょうど飯にしようと思ってたんだけど…来る？」

「…行くわ」

少女の誘いに黒髪の少女が立ち上がりながら応じ、二人は歩き始める。

水の音はこっちから来ていたハズ…

「名前…」

「？」

「名前…まだ聞いていないわ。あなたの名前。」

少女が立ち止まって振り向くと、なぜか黒髪の少女が恥ずかしそうに呟く。

「アタシはダルク。アンタは？」

「ミリア。ミリア＝マドレーヌ。ミリアでいいわ。」

「ん、よろしくミリア。」

「こちらこそ、ダルク。」

お互いに簡潔に自己紹介を済ませ、再びダルクを先頭に二人は歩き

出す。

もしも先導するダルクが振り向いていたら思わず見とれて立ち止まっていたかもしれない。

後ろを歩くミリアの顔は初めての外での会話に嬉しさで満面の笑みを浮かべていた。

・
・
・

「いたか？」

「いえ、屋敷の敷地内にはいないようです…」

カーンの問いかけに使用人が狼狽した様子で答える。

ギリリと齒を鳴らし、カーンは握りこぶしを握り締める。

門から出たなら見張りが気がつく。周りの塀を越えようとした場合でも同様だ。それでも見つからない。何故だ？今日はいつもと違う所は…

そう考えた所でカーンはハツとする。

あった。いつもと違う要因。

「王族の使いの男に伝令を出しなさい。恐らく荷台に乗り込んで逃げたのでしょう。使用人の何人かは私についてきなさい。あの娘を

捕まえます。」

使用人たちに指示を与えながらカーンは手のひらに魔力を込める。

「（とうとう脱出してしまいましたか…）」

カーンは無表情で自分の手を見つめていた。

・ ・ ・

「あの…ダルク？」

ミリアは目の前の光景に絶句していた。

「ん？何…いたあ！！」

ミリアの方に視線を向けかけたダルクは雄叫びらしき声をあげるとザブンと川に飛び込み、猛烈な勢いで魚を追いつめる。ちなみに上着は脱ぎ捨て、タンクトップのような出で立ちだ。

「……………」

ミリアはあまりの光景にただただ絶句する。食事というから何処かのレストランで食べるのかと思いきや、まさか生身で食料を獲得するとは思わなかった。

「ちょっとミリア！何ボサツと突っ立ってんのよ！アンタも手伝え！」

「え？え…つと…」

水面から顔を出し、ダルクが怒鳴る。

いやしかした。川に飛び込むのはいささか抵抗がある。服も濡れるし。

躊躇するミリアの様子を見てダルクがニンマリと笑う。

「アラ？アラアラア…ん？まさかミリアちゃん怖いのかなあ…ん？」

「なっ!?!」

「まあ仕方ないわねえ、アンタいかにもお嬢様って感じだし? まあそこで見てなさいな。ビビりなアンタの飯はアタシが捕ってきてやるよ、お・じょ・う・さ・ま!」

「バ、バカにしないで!」

聞き捨てならないとばかりにミリアは上着を脱ぎ捨て、川に飛び込む。

「ハッ! そうこなくっちゃ! ついてきな! 狩りの基本ってやつを教えてやるよ!」

「言ってなさい! ただの温室育ちだと思ったら大間違いよ!」

飛び込んできたミリアを見てダルクはニヤリと笑う。
物凄い水飛沫をあげながら二人は追跡を開始した。

・

・

一時間後…

大収穫だった。

巨大魚が3匹、火に炙られて食欲をそそる香りを醸し出す。
にもかかわらず、焚き火の薪がパチパチと音を立てて燃える前でミリアは静かな敗北感に頂垂れていた。

「まあ、初めて水に入って泳げたのは誉めてあげるわ。てか普通に
凄いわ。元々運動神経はいいのね。」

「……………」

「ま、魚に出し抜かれる辺りはまだまだね。」

「さ、魚と魔物は構造が違うのよ！」

涙目でミリアが反論する。

巨大魚三匹は皆ダルクが捕まえた。

ミリアはというと、深追いして岩に頭をぶつけるわ、藻に絡まって溺れかけるわ、気がついたら川岸に打ち上げられているわで散々だ

った。

「いや、マジで笑ったわ。川岸で打ち上げられた魚みたいに…ププツ、ヤベエ腹痛え…！」

「ぐう…！」

羞恥でミリアの顔が真っ赤に染まる。

「おっ、いい感じに焼けたわね。ホラ。」

ダルクは串焼にした魚の一匹をミリアに渡す。

「…いいの？」

「アンタがめっちゃくちな追い立てしてくれたお陰で、魚がパニクってくれたのよ。案外今日は楽な狩りだったわ。面白いのも見れて…ブフツ！…一石二鳥よ。」

「……貰っておくわ。」

悔しそうな顔をしながらミリアは魚を受けとる。さっきからお腹が
はよ食い物よこせとくうくう鳴っているのだ。

「しかしまあ…アンタも大変ねえ…週一でお庭までしか出れないとか。ほぼ監禁じゃん。」

魚をガツガツと丸かじりしながらダルクが口を開く。

ミリアは魚を頬張りながら下を向く。

「そう…ね。自由らしい自由は貰えないわ。監禁って言われたらそうかもしれない。でも、本当の両親がいない私を引きとってくれたのは事実なの。だからあの人には感謝してる。それなのに…贅沢な願いだけど…どうしても外に行ってみたくて…」

「で、王族の荷馬車に乗り込んだ？顔に似合わず大胆なことするのね。」

ダルクが呆れ顔でミリアを見る。

「でも、最初に逢えたのがダルクでよかった…ずっと外の人と遊びたかったから…」

「……………」

微笑むミリアを見てダルクは明後日の方向を見る。

「…ダルク？」

「うつさい！魚は食べたわね？じゃあ次行くわよ！」

少し赤らんだ顔でダルクは焚き火の近くで乾かしていた服を取る。

「次…？」

「今日一日堪能するんだろ？まだ穴場はいっぱいあんだよ！」

「！…うん！」

ミリアは立ち上がり、乾かしていた上着に手を伸ばす。

「（それにしても…）」

ダルクはミリアのある一点を凝視する。

「（ぐ…上着の上からじゃわからなかったが…意外と…チクシヨウ…歳は同じくらいなのに…）」

ダルクは歯噛みする。

「ダルク？」

「ウルセエ！行くぞ！これはステータスなんだよ！」

「??？」

絶壁で何が悪い！

ダルクはそう結論づけると、ミリアと共に歩き出した。

・ ・ ・

それからの出来事をミリアは恐らく一生忘れないだろう。

「お菓子の木… 本当に見られるなんて…」

「あんま食い過ぎると太るぞ。」

「し、失礼ね！ わかってるわよ！」

― 初めて見る外の世界は

「アゝアアゝアゝ！」

しなる蔦に捕まりながらダルクが叫ぶ。

「…それは… 言う決まりなの？」

「アア！？ ターザンナメんなコラ！ この台詞なきや始まらねえだろが！」

蔦に捕まり、戻ってきながらダルクが怒鳴る。

「わ、わかったわ… ア、アゝアアゝアゝ…！」

「……連れてきといて言うのもなんだけど……似合わないわね……」

——とても新鮮で……

「へえ……上手いもんじゃないか。」

器用に花の冠を作るミリアをみてダルクが感心したように呟く。

「お屋敷の庭……お花はいっぱいあったから……」

「その花の冠、アンタに凄く似合いそうね……」

ダルクは少し羨ましそうにミリアを見る。
自分はこんな女の子って感じのものは……

「え？コレ、冠じゃないよ？」

「は？いやどう見たって…」

ミリアの一言にダルクがポカンと口を開け、次のミリアの行動で完全に啞然とした顔になる。

「これはね…こうやって…こうするの…よっ！」

「……ブーメラン？」

「そう！綺麗でしょ？最初は確かに冠だったんだけど、作って飽きたから…で、試しに投げてみたら意外とよく飛ぶの！」

「…物は試しってやつか…暇なお嬢様つても考えものだわ…」

げんなりした顔のダルクの視線の先で、宙に放たれた見事な花冠もとい、花のブーメランは花びらを散らしながら綺麗に弧を描いていた。

—とても…

「綺麗…」

視線の先は黄昏にオレンジ色に染まる谷川

「日の沈み時が見所なのさ。狩りで捕った魚があればもう最高つてやつ。」

得意気な顔のダルク。

日が沈み、徐々に暗くなる谷川を見つめながらミリアはその風景を深く心に刻んだ。

―初めて見る外の世界は…とても美しかった

日が沈み、ミリアの顔も沈みがちになる。

「…帰るか。」

「…うん。」

帰る道すがら、二人は無言だった。
帰り道は途中の看板でミリアの住む村が指し示されていたため、迷うことは無いだろう。

「ここまででいいわ…もしダルクも見つかっちゃって何か迷惑をかけても悪いし…」

「ん…そっか…」

そっついながらミリアはその場を動かない。

その様子を暫く見ていた、ダルクは頭を掻きながらぶっきらぼうに、
だがミリアの顔をしっかりと見ながら話す。

「アンタ、本当の両親いないんだっけ？アタシも一緒。死んじやつたの。」

「!？」

「死んじやつたっていうか…殺されたのよ…十一年前にね…アタシ三歳くらいだったから殺した相手の顔は覚えてない…ただ…あの時の魔力の波動…アレだけは覚えている…!」

一瞬でダルクの顔が憎しみに染まる。
その表情の凄まじさにミリアがたじろぐ。

それに気がついたダルクが慌てて表情を戻す。

「この肌の色も…この縫合跡も…その時の術が原因…まあ縫合跡はヤブ医者 of せいもあるし、肌の色も損傷だから…治そうと思えば治せるんじゃないんだけど…」

「じゃあ…どうして…？」

ミリアが訪ねるとダルクは遠くを見るように呟く。

「忘れないためよ…あの時の痛みも悲しみも…あの術の使い手を鉄屑の底に沈めるまで…！」

「……」

少し悲しげな表情になるミリア。何と声をかけたらいいか分からない。

そんな様子を見たダルクは困ったような顔で笑う。

「あー、悪い！何か暗い方向に行っちゃったわ！伝えたいことはそんなのじゃないのに…」

「？」

「まあアタシの復讐は置いといて、その…この顔だと怖がる人の方が多いね。」

ダルクが自嘲気味に笑う。

「ありきたりな理由だけどさ、アンタが何も気にせず接してくれたのは…嬉しかったわ。短い時間だったけど楽しかった！」

ミリアの目から涙が溢れる。

「私も…楽しかった…また…会えるかな…？」

途切れ途切れのミリアの声にダルクはニヤリと笑う。

「また抜け出してきたさい！今度は魚に負けないよう鍛えとくのよ！」

「う…バカにして…」

たちまちミリアがブスツとした顔になるが、すぐに笑顔に戻り、二人は握手を交わす。

「またね。」

「ええ、またね。」

そうしてミリアは歩き出す。

ダルクが見えなくなるまで。 何度も何度も振り返りながら…

・ ・ ・

急ぎ足でミリアは村へ向かう。 きっと怒られるだろうな…

そう思いながらもそこまで悲観はしていない。 素晴らしい時を過ごしたことは何事にも耐え難かったから。

いつからカーンにお世話になっていたかはっきりとした記憶はないが、今まで一度も外に出たことはなかったのだ。 少しは許してほしい。

その認識は甘かったとミリアは直ぐに悟ることになるとは…

この時ミアは気づきもしなかった。

「ネシル！」

「え……？キヤアア！」

突然前方からオレンジ色のエネルギー弾が飛来し、ミアの足元を砕く。

「あ……ぐ……何？」

ミアは視線を上げ、目を見開く。

「……カーン。」

その先には数人の使用人を従えた屋敷の主が立っていた。

「何か言うことは？」

「勝手に屋敷を抜け出してごめんなさい…でも…」

「言い訳はいりません。掟に背いた以上、お仕置きが必要ですね…」

カーンが今まで見たこともない残忍な笑みを浮かべる。
手のひらにオレンジ色のエネルギーが集まる

「ネシル！」

「ぐっ！」

迫りくるエネルギー弾にミリアはなすすべもなく弾き飛ばされる。

「まだ、まだですよ…」

カーンは今度は両手にエネルギーを集め…

「リオル・ネシル！」

エネルギーの双弾が放たれた…

・ ・ ・

どれくらい時間がたっただろうか…

ミリアは地面に打ち付けられながら考えた。

どうして…私は外に出てはいけなかったのか？

どうして地下に閉じ込められていたのか…

今までわからなかったが、今少しわかった気がする。

カーンは私が嫌いだったのだ。

出なければあんなに憎しみのこもった顔はするまい…

嫌いなら…憎いなら…何故私を引き取ったのだろうか？

意識が遠のく…

「……………、……………又」

誰かの声が聞こえたような気がした…
そうして…ミリアは意識を手放した…

・ ・ ・

やっぱり気になる。

ミリアと別れて暫くしてからダルクはそう思い、ミリアが進んだ道をたどって行った。

多分この道なりに行けば…きっとミリアの言っていた村へ着くだろう。大きなお屋敷があるならきっとそこだ。

もし、こっぴどく叱られているなら、一緒に怒られてやろう。少し照れ臭いが…それが友人…だと思う…

「――！――！」

ふと、前方から何かの爆発音。よく見ると煙も上がっている。

「何だあ！？」

不吉な予感がして、ダルクは走る。道を外れ、木立を隠れ蓑にしながらひたすら駆ける。

「――！」

木に隠れながら、ダルクは少し離れた開けた場所に数体の魔物を見つける。

顔色の悪い初老の魔物と、その付き人らしき魔物と、騎士風の魔物。その前に倒れているのは…

「ミリ…！」

叫ぶ暇もなく、ダルクは割って入ろうとする。

いくら無断で抜け出したからってそれは酷すぎるじゃねえか！

そう思い、踏み出した一步は途端に凍りつく。

「……え？」

彼女は“ソレ”を…見てしまった。

・ ・ ・

どうして…最初から気がつかなかった？
もっと早くこうすればよかった。

ミリアを痛め付けながら、カーンは充実感に満たされる。

「カーン！」

振り返ると、王族の騎士風の男が足早に駆けってくる。伝令がたどり着いたらしい。

「もう止めたまえ！アレが暴走したらどうする！」

「……………」

「君があの子を憎むのはわかるが…もう…」

カーンは暫く騎士風の魔物を見ていたが、ふう…とため息をつく。

「わかりましたよ…では…」

カーンの手に膨大な魔力が集まる！

「!」

「これで最後にしましょうか…大丈夫。ディオガ級は使いませんよ…」

「ギガノ・ネシ…!」

巨大なエネルギー弾がミリアに発射されんとしたその時…

「マダダ。コノ器、マダ壊スワケニハイカヌ。」

突然、何処からともなくゴポゴポといった音が混じった、恐ろしい声が響く。

「!」

「！！」

誰もが目を見張り、倒れたミリアを見る。ドス黒い魔力の波動がミリアを包み、やがて、ゆっくり…ゆっくりとミリアが立ち上がる。

長い黒髪で顔が隠れ、ミリアの表情は見えない。

使用人の何人かはすでに震えている。

異様…そう表現しても差し支えない禍々しい魔力。

不意にミリアが顔をあげる。赤い瞳はさらに濃さを増し、血のようにおぞましい赤…

「ヒッ！」

使用人の一人が恐怖で短い悲鳴を上げる。

カーンはギリリと歯を鳴らし、一度、手のひらのエネルギーを霧散させ、更に強力なエネルギーを収束する。
その表情は単純に恐怖からくるものだった

「…！よせ！止める！止めるんだ！カーン！」

騎士風の魔物の叫びも空しく、カーンは術を放つ

「エグドリス・ネシルガ！」

三角錘状の巨大なエネルギーがミリアに迫る。
対するミリアは両手を広げ、微笑む…

「ヴォル……………！！！」

その瞬間、カーンの意識は暗転した…

・ ・ ・

「う…ん…」

ミリアが目を開けると、視界は星空、そして満月。

「気がついたかい？」

声がしてその方向を向く。身体が酷く痛い。

騎士風の男の魔物が、こちらを見ていた。声こそ優しいものだが、目は…何処か警戒したような光を帯びている。

「聞くが…君は何があつたか覚えているか？本当につい数分前の出来事だつたんだが…」

「え…？…私は…カーンに攻撃されて…意識が飛んで…そこからは何も…」

「そうか…」

男は安堵したような畏怖したような微妙の表情を浮かべる。
どうしたというのだろうか？

何か周りが騒がしい。

起き上がり、辺りを見渡す。

そこでミリアは驚愕に目を見開く。

「何…コレ…？」

地面は抉れ、使用人が走りまわっている。何人かは倒れ、包帯らしきものでぐるぐる巻きにされ、薬湯の様なものを飲まされている。その中心で手当てを受けている男がいた…

「…カーン？」

ミリアが真っ青な顔になる。どうして…？

ふと、気がついたのか、カーンがこちらを見る。
途端にカーンの目が見開かれる。

「間違いだった！」

今まで聞いたことのない口調と声でカーンが喚く。

「間違いだった！お前を引き取ったのは間違いだった！妻の親族だから引き取った…それが間違いだった！お前が来たから妻は死んだ！生まれた時に…“ソレ”が分かった時点で捨てるべきだったのだ！妻が…お前を攻めるなどいうから…最後の遺言だから…くそ…！不吉な子…災厄を取り込んだ子…！おのれ…おの…れ…」

カーンはひたすらミリアを罵り、やがて気絶した。
ミリアは周りを見る。誰もが、何か不吉なモノを見るかのような…
蔑み、恐怖を抱いた目…
全身が痛い…ミリアはそのまま、再び気絶した。

・ ・ ・

その後の出来事はあまり覚えていない。
ただ、屋敷に着く直前に荷馬車の上で目を覚まし、屋敷に着くとカーンの後妻が金切り声を上げ、使用人に怒鳴り散らす。彼女はミリアには目もくれず、ただ夫の身を案じていた。
嗚呼、考えてみれば彼女とは一度も口を聞いたことがなかったっけ…

そんな喧騒の中、騎士風の男がテキパキと何かの指示を出し、ミリアは再び、あの本の牢獄にほうり込まれた。
崩れるようにベッドに倒れ、ミリアは死んだように眠りについた。

・ ・ ・

コンコン…
コンコン…

「…？」

ノックの音でミリアは目を覚ます。
明け方…くらいだろうか…？

ミリアはふらつく足でドアに向かう。

ドアノブに手をかけようとした瞬間、声が聞こえた。

「そのまま聞きなさい。」

カーンの声だった。

聞き慣れた声だったハズが今は少し冷たく聞こえる。

「昨日、取り乱して喋ったかもしれませんが、もう一度…私があなたを引き取ったのは死んだあなたの両親が妻の親族だったからです。」

「……………」

ミリアは黙って耳を傾ける。

「妻の死の原因でもあるあなたを引き続きこの屋敷にとどめていたのも、全ては妻の遺言故。私個人はあなたに憎しみ以外何も抱いていない…」

時計の秒針の音がやけに大きく聞こえる。

「何故あなたをずっと地下に閉じ込めていたか、屋敷の庭以外に外出を許さなかったのか…詳しく話すことは出来ませんが、それはあなたが災厄と言うべきものを内包していたからに他ならない。」

災厄…ミリアは心の中でその言葉を繰り返す。

「それならあなたを殺せばそれで済みそうなものですが、不幸にも…ええ、不幸にも、そうはいかないのですよ…あなたの中の災厄は“ 渡り歩く ”」

渡り…歩く？

「王族の方から止められていなければ…とつくの昔に殺している所

です。それは、そうと、昨日は楽しかったですか？」

「……はい。」

突然のカーンの質問に暫く言葉が詰まるが、辛うじて返事をする。

「そうでしたか…そうでしょうね…私はそれが腹立たしくてならなかった。故にあのような凶行に…」

「……………」

「話は終わります。時期が来れば…王の選別の戦いが始まる頃にはあなたはここから出られるでしょう。それまではこの地下からは出てはいけません。いいですね？」

「…はい。」

「あなたと会話するのも、これが最後でしょうね。何か言うことはありますか？」

カーンの言葉にミリアは暫く沈黙し…やがて口を開く。

「あなたの妻を殺したのは…私なんですか？」

カーンの息を飲む声が聞こえる。自分の災厄の原因が聞けない以上…
せめてこれだけは確認したかった。
やがて、カーンが語り始める。

「妻はあなたのせいではないと言っていました。ですが…私には…」

カーンの歯軋りの音。

「どんな理由であれ…あなたに憎しみをぶつける以外に…私には方法がない…」

足音が遠のく。

カーンは行ってしまった。

思えばあんなにカーンが長く口を聞いたのは初めてではないだろうか？
ミリアはその場に座り込む。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。自分の両親の顔を思い出そうとするが、
出てこない。おそらく優しくしてくれたのだろう、カーンの前妻の
顔も思い出せない。

ただ思う事は一つだけ。私は外に出るべきではなかった…

カーンや使用人を傷だらけにしたのも私なのだろう…
地下に閉じ込められていたのはなんてことない、私が魔界では災厄
というべきモノだったからなのだ…

涙が溢れ、視界が歪む。

ミリアはズルズルとその場に倒れこみ、再び眠りについた。

・ ・ ・

ダルクはぼんやりと空を見上げていた。
空はもう白んできている。

どうやら、明け方らしい。ということは一晩中座り込んでいたのか…

ダルクはミリアが纏っていた魔力の黒い波動を思い出す。
間違いなく、十一年前に見た魔力の波動だった。アレが…両親を殺
し、アタシの顔に傷を追わせた…
血が出るほど両肩に爪を立てる。

カーンとかいう男の魔物はあれを災厄と…そう呼んでいた。なるほ
ど、だからこそ閉じ込められていたのだ。

「ミリア…ミリア…!!」

ダルクは空を見上げ、憎い名を呟く。
決して…決して忘れぬように…

・ ・ ・

騎士風の魔物は荷馬車に乗りながら昨夜のアレを回想する。
恐ろしかった。

中級とはいえ、王族の戦士である自分が戦慄する力…

「アレが…魔界の二つの脅威に匹敵する…“魔界の災厄”…」

騎士風の男がぼそりと呟いた声は誰にも聞かれる事なく空に吸い込まれていった。

・ ・ ・

―時は少し進む…

あの日から何日たったのだろう。

ミリアは本の牢獄で小説を読み耽っていた。

「『忘れないためよ…あの人を鉄屑の底に沈めるその日まで…！』
…！？」

ミリアが見つけたのは聞き覚えのあるフレーズ。

ふと顔に浮かぶのは桃色の…しっかり手入れすればきっと美しいで
あるうボサボサの髪をした友の顔。

小説は両親を殺された少女が復讐に身を委ねる話…。

ダルクもこの小説を読んでいたのだろうか？

両親の敵に出会った時、小説の少女はこう言っていた。

『一度…一度やってみたかったの…殺すってのがどういったものな
のかを…私、あなたが憎くて憎くてたまらなかったから…』

「ダルク…」

今は会えない友を思い浮かべ、ミリアは天井を見る。出来るなら…
もう一度会いたい。あの少し意地悪で気持ちのいい笑顔が無性にも
う一度見たくなった。

—ミリアが王の選定の戦いに出るまで…あと数ヶ月…

・ ・ ・

—時はまた少し進み、人間界出発当日。

ミリアは山吹色の本を小脇に抱え、屋敷を出た。

見送りは誰もいない。

歩きながら祈るように空を見上げる。

願わくば…優しいパートナーに巡り会えるように…

・ ・ ・

—また少し時は進む…人間界

「……!!」

ミリアは見覚えのある後ろ姿を見かけ、思わず走り寄った。
遠目だが、あれは間違いなく…

「ダルク!」

ミリアが呼び掛けると桃色の髪の子はこちらを振り向く。
目に…憎しみの炎をたぎらせて…

「ダルク?…!!」

異常に気がつき、ミリアは狼狽する。
そして同時に振り向いたのはダルクだけではないことに気がつく。
スーツを着た小麦色の肌にウェーブのかかった黒髪の女性。

「魔物…デスネ?」

女性は紅色の本を取り出す。
傍らのダルクは手をミリアに向けながら歌うような声で話す。

「一度…一度やってみたかったの…殺すってのがどういったものなのかを…私、あなたが憎くて憎くてたまらなかったから…」

「ダルク…？」

ミリアの声が震える。紅色の本が輝き出す…！

「久しぶりねええ！会いたかったわよお！ミリアアアアア！！」

「ガウス！！」

鉄屑が…放たれた…

・ ・ ・

―時は無情に進み、ウメノキ町から少し離れた別の町。

「お嬢ちゃん…魔物だろお？」

「!？」

ゲスな男の声がある。

男は目をギラつかせ、既に臨戦体制に入っていた。

「いくぜえ！カブラア！」

「オオオオ!!」

「ウィガル！」

ズバン！

魔物の雄叫びと共に、風の衝撃波が容赦なくミリアを蹂躪する。
長い、執拗な追跡が始まった…

・ ・ ・

―そして…時は来た。ウメノキ町

「ハア…ハア…」

血が流れる。身体が軋む…

ミリアは石の塀に寄りかかった。

もう…疲れた…友に憎しみの目で見られ、執拗な敵に追い回され…

自分は一人だ…

どうしようもない孤独感に苛まれ、ミリアは目を閉じる。

どうか…

どうか…

災厄をも飲み込むような…圧倒的な強さをもった優しい王様がいてくれたら…

こんな私でも受け入れてくれる…優しいパートナーに出逢えたら…

夢物語と思いながらも、一人の魔物の少女は願い、目を閉じる。

―底抜けのお人好しな運命の少年に出逢うまで…あと数分…

・ ・ ・

―時は今に至る。 龍の部屋

「……………」

龍は黙ってミリアを見つめていた。
話終わったミリアはずっと俯いている。

「……………」
「……………」

気まずい沈黙が流れ、やがて…龍が口を開く。

「…プリン食うか」

ズルリと、思わずミリアがテーブルに突っ伏する。

「あの……何？その反応？」

「…すまん。けど…何て言うか…俺が軽々しく慰めの言葉をやいけない気がして…」

龍が頭を掻きながら答える。

「それで…プリン？」
「それでプリン。」

「……………」

沈黙。

龍は内心下手な言葉でも慰めた方がよかったのかと焦る。
が、規模は違えど、自分も家族から疎まれた身だ。その時に他人にかけられる

「辛かったんだね」
「ひどい仕打ちだ」

などといった慰めの言葉がいかに空しいかを知っている。
どんな言葉が心を救うかなんて結局龍にはわからない。

「……………」

でもそれは龍が思っているだけで彼女は違つかも…

「……食べる。」

「へ？」

「食べたい…プリン」

ミリアがあまりに真っ直ぐ龍を見るので、思わずたじろぐ。

「お、おう！」

龍は慌て冷蔵庫の前まで行き、戸を開ける。
と、不意に背中に体温を感じ、首だけ振り返る。
見ると、ミリアが後ろに来て、片手を龍の背中に当てていた。

「私…災厄なんだって…」

暫くの沈黙の後、ミリアが話す。声が震えている。

「うん…」

「さっきの話、聞いていたでしょ？ 龍も…傷つくかも知れないんだよ？ それなのに龍は…全然何も変わらないんだね…」

龍はプリンを二つ手にとる。

「俺の持論だけど…」

龍が口を開く。

「その人がどんなのでも…一度友達だっと思った奴はさ…どんなことがあっても、やっぱり友達なんだ。一緒にいた時間は関係ない。だから、俺は…ミリアと一緒にいて不幸だとか厄日だと思った時は一度もないよ。ミリアの過去を聞いた今でもだ。むしろ、ちゃんと話してくれたことがとても嬉しい。」

振り返って顔を見て言おうとしたら両肩を両手で押さえられてしまった。

「ありがとう…」

コツンと額が背中に当てられ、ミリアは絞り出すような小さな声でその言葉を紡いだ。

背中にミリアの体温を感じながら、龍は冷蔵庫のある一点を見つめていた。

「ミリア…これ…」

龍が鶏が締め上げられた時のような細かい声を出す。

「…なあに？」

背中に当てていた頭を上げ、龍の視線の先にある物を見ながらミリアが聞き返す。

「ああ、これ？材料として買ったんだけど、冷蔵庫にまだ入ってたから…龍？」

ミリアがキョトンとした顔で龍を見る。

心なしか龍の顔から汗が大量に流れている。

冷蔵庫にあつたのはかなり前に買ってそのまま存在を忘れ、処分し忘れた卵。それ以外はちよつとした野菜くらいしか入っていないかった。安静にしていたから買い物も行っていない。というか卵粥が出た時に気づくべきだった。

ミリアが買い物袋を下げていたからてつきり新しいのを買ってきたのかと思っていたのだ。

なるほど、新しいのはある。だがパックは開けられないまま手付かずだ。

何故？冷蔵庫にまだ卵があつたから。

よく見ると塩もわざわざ新しいのを買ってきてくれたらしいが、まだ前の塩があつたからなのか未開封だ。

そして最大の問題。

“処分し忘れていたハズの卵が無くなっている”

「ミリア…つかぬことを聞くが…消費期限ってご存知？」

「何それ？」

人間というのは不思議なもので、認識した時に初めて痛みや不調が来ることがある。

風邪だと思っていなかったのに熱を計ると高熱とわかり、途端に具合が悪くなる…そんな経験はないだろうか？

今の龍が正にそれだ。

ギョルギョルギョルとお腹が鳴り始める。

「うゝおおおお！？」

「り、龍！？」

物凄い勢いで龍はトイレに駆け込んだ…

・ ・ ・

「し、死ぬかと思った…」

「ごめんなさい…」

ベッドに横になる龍を見て、ミリアがシュンとする。

「いや、腐ったやつそのまま捨てるの忘れてた俺が悪いから…」

「でもごめんなさい…」

ミリアはまだ項垂れている。よっぽど腐った卵を使ってしまったことがショックだったのだろう。

そんなミリアを見て龍がニヤリと笑う。

「魔界の災厄とやらも大したことないな。」

「え？」

「だってそうだろ？ただの高校生一人の腹下させる程度だぜ？」

龍が鼻で笑う。

面食らっていたミリアがクスクスと笑い、やがて二人は今までにないくらい大笑いした。

暫く笑い、涙目になりながら龍がミリアに向き直る。

「優しくて強い王様、探すんだろ？」

「ええ…それが私の目的よ。それと…」

「それと？」

少し恥ずかしげにミリアが言葉を紡ぐ。

「この前も言っただけど、もっと…龍と一緒にいたい…人間界の楽しい所、美しい所を見たいの。」

それを聞いた龍はニツと笑う。

「よし、じゃあ俺にも王様探し、手伝わせてくれ！楽しいこと探しもな。なんつたって俺はミリアのパートナーなんだからな。」

そう言うのと、龍はミリアの方へ手を伸ばす。

ミリアはそんな龍の様子を見て、閻魔蟋蟀のオツチャンの言葉を思い出していた。

病人にちょうどいい料理について聞いた時のことだ。

オツチャンはニコニコしながらミリアに礼を言った。何故かと聞くと彼はこう答えた。

「俺が龍ちゃんに初めて会った時はね。凄く暗い顔をしていた。何があったか知らないけどね…ただ友達が出来て…それからよく笑うようになってくれた。ミリアちゃんが来てからはもっとだよ。楽しそうだ。帰った時に迎えてくれる人ってのはそれだけ存在が大きいんだろっね。だから、ありがとうミリアちゃん。龍ちゃんを支えてくれて。」

一瞬ポカンとした顔になるが、すぐにミリアは笑顔になる。

「それを言うなら、おじさんもありがとう。」

「ん？」

「だっておじさんだって龍を支えてくれた一人でしょう？」

いたずらっぽく笑うミリアにオツチャンは満面の笑みでこう返した。

「カッカッカッ…バカヤロウ、マスターと呼べえ。」

―きつと…なんとななる…この人となら…自分が誰かの支えになれる日がくるなんて考えもしなかった…

そう思いながら、ミリアもまた、龍の方へ手を伸ばす。

「ありがとう。龍…改めて宜しくね。」

交わされるのは固い握手。

それと同時に、龍の鞆の中の山吹色の本が一際大きく輝いたのだが、二人は気がつかない。

本に刻まれた第三の術を二人が発見するのはもう少し先の話だ。

第九話 ミリアの過去（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました！

過去編はひとまず終了になります。誤解がないよう補足しますが、ミリアが龍に話したことはあくまでミリアが体験したことのみです。で、屋敷でのカーンと騎士風の魔物の会話シーンやダルクの行動の一部は勿論ミリアは知らないのです、龍には伝わってないです。

ダルクとミリアの人間界での最初の接触はそのうち外伝的な感じで書けたらいいなあ…

そんなこんなで目的がフワフワしていた二人ですが、明確に「強く優しい王様探し」「楽しいこと」を目的にこれから二人の戦いが始まります。

ミリアは王様目指さないの？となりそうですが、現段階でミリアは自分の魔界での悪いイメージを曖昧ながらも自覚しているので（余り他の魔物と関わらなかったが、自分が原因で王族の人も関わってたし）積極的に王様を目指す。ということとは考えていません。龍もその複雑な心境を汲んでいる…そんな感じです。

シリアス（？）続きだったのでミリアの中の災厄…これは暫く置いて

ギャグとかバトルとかを絡めながら色々なキャラを出していこうと思います。

今回の後書きはこんな感じで…
今後も宜しく願います！
また次話で逢えることを願いつつ…
では。

第十話 茶髪の追跡者（前書き）

微妙に時間がかかりましたが、更新です！

誤字・脱字・感想などありましたら宜しく願います！

では第十話です…

第十話 茶髪の追跡者

ああ…まさに悪夢…

いや、悪魔が舞い降りた瞬間だった。

風呂以外である時ほど全身の毛穴から汗が吹き出したことはなかったぜ…

By 山口五郎

「うぐぐ…」

「うつつ…」

「いい加減諦めたらどうだい？明日はそんな付け焼き刃でなんとなるテストじゃないだろう？」

テキストを穴が開くほど見つめながら唸る山口と雪音を横目に水城が呆れ顔で言う。

「や、やめろおゝ！水城！今俺たちは精神と時の部屋で…」

「ウフフ…歴史が…地理が…ハツパラパ…ン」

半泣きで喚くのは山口。最早完全に壊れているのが雪音である。

時期は夏休み前の期末テスト週間。
今日のテストが結果を見るまでもなく最悪だった二人はこうして下校中も詰め込み学習に勤しんでいた。

お世辞にも成績がいいとはいえない二人はこうして毎回テスト週間の度に四苦八苦する。

一方、二人とは対照的に水城は毎回テストで上位に食い込む程の学力なので涼しい顔である。

そんな様子の水城を見て、二人の焦りはますます加速する。

「くそお…この熱帯とか温帯とか…紛らわしいんだよ！」

「地球なんだからみんな一緒にみんないいのにい」

山口が教科書に怒鳴り付け、雪音は現実になったら常識とか色々なものが覆るようなことを口走り始める。

「そんな二人に問題。熱帯、温帯、冷帯、寒帯…日本の大部分はどれに該当する？」

騒ぎ続ける二人を見かねたのか水城が問題を出す。

二人は一瞬ポカンとした顔になるが、すぐに鼻で笑い、さも当然の

ように答える。

「ああ？なんだよそのサービス問題。熱帯に決まってるだろ。」

「今夏だもんね！」

「……君らもう諦めなよ。今からそれじゃ無理だよ。」

「ハア？知らないんですか水城クウン？今日はヒートアイランドで大変なんですぅ〜！」

「そうだよ！国語で習ったもん！」

「…明日のテストは歴史と地理なんだけどねえ…」

ドタバタ漫才を繰り広げる三人のクラスメートの後ろで龍は山吹色の本と睨めっこをしていた。

「（第三の術、ティルヴィルク…か…）」

呪文に気がついたのは今朝。ミリアと二人で大喜びした方がいいが…

「（当然ながら術の効果は見ただけじゃわからないよな…一体どんな術なんだろう…？）」

今度ミリアと術を試しに行ってみるか…龍がそう考えていると、目の前に山口の顔が大写しになる。

「うおう！？なんだよ山口！びっくりするだろ！」

「余裕だな…」

抗議する龍に対してジト目の山口が低い声で言う。
心なしか青筋が立っている。

「よし、決定だ。テスト前だというのにテストに全く関係ない本を見て、さもインテリ気味に難しい顔をする。そんな桜塚には、是非とも俺のテスト勉強に付き合ってもらうぞ！」

何やら嫌味な単語混じりで山口が宣言する。

「あつ！それ賛成！皆で集まって勉強会しようよ！」

「テスト前にかい？一夜漬けもいいところだけど…まあ面白そうだね。桜塚くんはどうする？」

キラキラした笑顔で雪音が賛成し、呆れ顔の水城も意外に乗り気だ。

「ん、まあいいよ。やるか、勉強会。」

そして龍もOKする。何だかんだ言っても、この四人で何かをするのは楽しいのだ。

「んじゃ、場所だな…どこでやるよ？」

そう言う龍に対して他三人はポカンとした顔になる。

「おいおい、そんなの…」

「桜塚クンの家に」

「決まってるよ！」

山口、水城、雪音がさも当然のように言う。

「え？俺の家？水城の家の方が良くないか？広いし。」

そう言う龍に対してチツチツチ…と指を振りながら水城は言う

「何を言ってるんだい？僕はこの間の質問の続き…まだ出しきっていないんだよ？」

「そうだぜ！この間はお前が体調悪かったからあまり長居出来なかったんだ！まだまだ聞きたいことは山ほどあるんだよお！！」

「そ、そうよ！主にさ、桜塚君とみ、ミリアちゃんのか、かかかか、関係とか！！」

「…お前ら勉強会じゃなかったのか？」

立て続けに喋り始める三人に対して龍がやれやれというように肩を竦める。

今日は勉強以外に心労が募りそうだ…

・ ・ ・

結局、場所は龍の家に決定し、雪音は一度家族旅行に行った時の土産を持ってくるということで途中で別れていった。

「しかし…珍しい本だね。」

龍が歩きながら山吹色の本を鞆にしまうのを見て水城が言う。

「ああ、でもおかしいなあ？俺その本どっかで見た記憶があるぞ？」

首を傾げる山口。

たぶんリベツカの一件だな…

龍は心の中でそう思いながら、少しませた黄色がかった髪の少女を思い出す。

何だかんだで友好的な魔物だった。もし本を燃やさずにいたら今頃どうなっていたのだろう？

魔界の王に対してしっかりとした考えを持っていた。もしかしたら味方、あるいはよりよい王を目指すという点で同盟的なものを結べたかもしれない。

龍がそんな考えを浮かべていると、前方の視界いつぱいに山口の背

中。

「イテッ！どうしたんだよ山口。道のと真ん中で止まって…」

勢い余って山口の背中に激突してしまった。

悪態気味に龍が問いかけるが、山口は答えない。

「山口クン？」

水城が怪訝な顔で山口を見る。山口は前方を凝視している。

釣られて水城と龍が前方に視線を向ける。

視線の先にあるものを見たときに二人も言葉を失う。

道のと真ん中で見知らぬ青年が仁王立ちで腕を組み、こちらを見つめていた。

・ ・ ・

「
……
」
「
……
」
「
……
」
「
……
」

三人とその青年の間に沈黙が流れる。
長い長い沈黙が。

青年はひたすらこちらを見据えており、龍たち三人は堪らず青年から目を反らし、ヒソヒソ声で話す。

「お、おい……なんだあのにーちゃん？めちゃくちゃ顔でこつち見てんぞ？」

「なんていうか……無視して通った方がいいんじゃないか？アレ……」

「い、いや、何かやるよあの人……僕たちが横通りすぎた瞬間に絶対何かやる。」

その何かやりそうな青年は、未だに道のど真ん中で威風堂々たたずんでいる。

「よ、よし龍！行け！」

「ふ、ふざけるな！水城、お前が行け！」

「い、いくら桜塚クンの頼みでもそれは聞けないな……山口クン。ここは運動部の君が行くべきだ。」

「う、運動部は関係ないだろ！………何か直樹って名前は直進って感じがするぜ！というわけで水城！お前行け。この道を直進だ！」

「名前こそ関係ないよ！ああ……でも名前か……いい響きだ。まるでその人の性質を表すようだ。龍……天を翔け、地を蹂躪せしめる荒ぶる神のごとき存在……ここは勇ましい名を持つ桜塚クン……君の出番だ！」

「オイ待て！名前関係ないんじゃないのか！？てか前置き長いわ！五郎のほうがいいだろ。何かフィーリング的に。というわけで山口頼む。」

「なんだフィーリング的につて！？桜塚、お前上手い言い回し見つからなかったただけだろ！」

最早ヒソヒソ声どころじゃない会話で三人は先鋒役をたらい回しにする。

そんな三人は青年がすぐそこまで近づいて来ていることに気がつか

なかった。

「フム…いいな。」

青年は顎に手を当てながら言う。

近くで見るまで気がつかなかったが、茶髪に染めた髪がよく合う整った顔立ちをしている。

「うおっ！」

「ち、近くに！」

「来た！？」

山口、龍、水城の順に短い悲鳴をあげる。

そんな三人を見て青年はハッハッハ…と笑い、こう言った。

「そんなに萎縮する必要はないぞ少年達よ…俺は…そうだな、ただの通りすがりの男好きなナイスガイさ！」

青年はグッと親指を立て、白い歯を見せる。
キュピーンという音が聞こえた気がした。

龍達は完全に固まっている。主に呆れで。

が、龍が聞いてはいけない言葉を聞いた気がして思わず聞き返してしまう。

「ちょっと待て…男好き？」

「フッフ…反応が早いなあ…少年A。そうさ、男好きだ。ハアハア…現役男子高校生…ハアハア…実は暇しててな…遊んでくれる子大募集だ。そしたら君たちが歩いて来た…と、いうわけだ…」

青年は肩に背負っていた手提げ袋を地面に落とし、Yシャツのボタンを上から三つほど無駄に時間をかけて外す。

「これといった誘い文句は思いつかないんだが…まあ一般人でもわかる表現にしようか…俺とやらないか？」

ニヤリという擬音が聞こえるくらい青年は笑う。
ゾワリという感覚と共に、三人の背筋を嫌な汗が流れる。

「な…なあ…」

山口が龍と水城を見る。
顔が汗だくなのは気のせいではない。

「あ、ああ、最早勉強会どころじゃない気がするんだ。」

「三人意見が一致してるみたいだね…僕もそう思った所だよ…岩本サンには悪いけど、後で連絡しよう……ぶ、無事に、逃げられたら。」

龍が一步下がりながら。水城がひきつった顔で言う。

三人の脳は奇しくも同じ信号を出していた。
ここから逃げろ…と。

「オイオイ…勉強会だって？そんなものよりもっと有意義な勉強があるぜ…『新しい社会』的な？そうだな…『新しい扉』…なんてどうだ？」

「や、やかましい！一歩一歩近づいてくるな！て、手をにぎにぎするのをやめろ！お、おい！何をしている！？」

思わず龍が突っ込むが男はどこ吹く風。無言で地面にしゃがみこみ、こっちを見上げる。

徒競走とかのクラウチングスタートの体制だ。

路上のと真ん中でやると怪しいことこの上ない。

「ん？逃げるんだろ？だから追う準備だ。しかし少年A。いい突っ込みをするなあ…まあ俺は突っ込まれるよりリアルに突っ込…」

「うわあああああ!!」

青年のおぞましいセリフにまず最初に山口が叫び声を上げながら、
続いて水城、龍の順に元来た道を全力で逆走する。

「フツ… そんなに慌てるなよ…」

男は腰を高く上げ、全身の筋肉のバネを四肢に集中・一気に解放する。

大地が踏み抜かれ、茶髪の追跡者は走り出す。

かくして、男の意地と貞操をかけた追いかけっこがいきなり始まった。

・ ・ ・

走る走る走る。全身の筋肉を酷似して、潰れそうになる肺に無理や

り酸素を送り込み、一心不乱に、全身全霊をかけ、男達は走る。

「お、おい！来てるか？誰か確認しろ！」

走りながら山口が上ずった声を絞り出す。

「無理、無理だ！怖くて後ろ向けない！」

「多分向かなくてもわかるよ！僕たちの少し後ろを走ってる。さつきから地面を猛烈な勢いで蹴る音が後ろから…」

「言うなあああ！頼む！言わないでくれえ！クソオ！俺まだ彼女出来たことないのにいい！！」

龍と水城の答えに山口は最早半泣きを通り越して大泣きだ。

何が悲しくて男に求愛的な感じで追い回されなければいけないのだろう。

「悪いな、少年B。俺は“攻め”の側だ。彼女のな役は君たちの方だ。まあやろうと思えば反対もOKだが…どっちがいい？」

「どっちも無理じゃボケエエ！！」

「山口くん！しゃべる体力は逃げるのに使いなよ！てか聞きたくもない事実引つ張り出さないでくれ！」

「少年C。イケメンだな…ふむ…イケメンを新しい扉に誘うのも乙なものだ…」

「……………！！！」

「水城！しっかりしろ！顔が…顔が真っ青だ！」

「案ずるな、少年A。君も真っ青だ。まあ、俺にかかれば君の頬もすぐに真っ赤に…」

「お前もっ黙れええ！！！」

龍が吠える。

三人はひたすら…ひたすら走る。共通認識は一つ。捕まったら…終わる！

「み、見ろ！道が三つに別れてるぞ！」

そんな中、龍の言葉で三人は一筋の救い光を認識する。

三人は親友……いや、もはやこの場では戦友と言っても過言ではない。
故に言葉はいらない。

「（三手に別れるぞ！）」

「（わかつてるさ！桜塚くん！）」

「（皆、明日のテストで逢おう！）」

三人はそれぞれの道を進む。

龍は右に。

水城は左。

山口は真ん中。

道は違えど思ふことは皆一つ。

「「「（頼むから自分の方には来るな！！）」」」

青年は三手に別れた三人を見てニヤリと笑う。
そしてある方向へ向かう。

標的は決まった。

・ ・ ・

背後からの足音が止まない。

まさか…そんな…

こっちに来た？

いや、考える！冷静になれ！

自分は恐れているのだ。背後からの足音を。

だから耳にあの音が残ったのだろう。

これは自分の足音ではないか？

そうだ！そうに決まってる！

ホラ、こうやって走りながら後ろを振り向くと…

「やあ、思えば俺に最初に話かけてくれたのはお前だったよなあ？
少年A。」

青年がニヒルな笑いを浮かべる。

その瞬間、少年Aもとい、桜塚龍が抱いた淡い幻想は完膚なきまで
叩きのめされた。

「俺かよおおお！！！」

龍の絶叫が道に響きわたった。

・ ・ ・

ようやく捕まえられる…コントローラーのスティックを動かしながらミリアは上機嫌だった。

ちょこまか逃げまわられるものだから、いい加減うんざりしていたのだ。

画面では緑色の帽子を被ったオッサンがへっぴり腰で赤い掃除機を構え、丸っこいお化けを吸い込んでいる。

「もう少し…」

ミリアの頬を汗が伝ったその時…

ジリリリリ！ジリリリリ！

無機質なコール音が部屋に鳴り響く。

「ひゃ！」

ミリアがビクンと飛び上がる。何度聞いてもこの音は慣れない。

「あっ…」

ミリアが一瞬気を抜いた瞬間、画面のお化けは掃除機から逃れ、壁をすり抜け、逃げていった。

「うう…」

何処かデジャブのようなものを感じながら恨めしげに電話を睨み、ミリアは受話器を取る。

「ハイ、もしもし桜塚…」

「ミリアアアア!!」

とんでもない絶叫がミリアの耳を貫き、一瞬頭の中でグワァンという音がする。

だいぶ声が裏返っているが、それは紛れもなくパートナーである龍の声だった。

・ ・ ・

早く…早く出てくれ…! 龍は走りながら携帯に耳を当てていた。相変わらずの地面を踏みしめる音を背景にしながら、パートナーが出るのを待つ。

「ハイ、もしもし桜塚…」

「ミリアアアア!!」

受話器越しに聞こえる静かな声がいつも以上に頼もしく感じ、つい龍は大声を出す。

「り、龍、そんなに叫ばれたら耳が痛いわ…どうしたの？」

ミリアの少し狼狽えたような声。どうやらビックリさせてしまったらしい。できるなら謝りたいが、今の龍は限りなく余裕がない。

「ミリア！魔物だ！いや、人間なんだけど魔物が現れた！」

自分でも訳のわからぬまま、訳のわからぬ言葉を龍は叫ぶ。
受話器ごしのミリアはもつと訳がわからない。

「！？…今！今どこにいるの？それに人間？魔物？どっちなの？」

「分類するなら人間だ！でもあれもう魔物って言っている気がする…！今追いかけて回されているんだ！捕まったら多分男として終わ…」

「フーッ！回り道だ。」

突然曲がり角からニヒルな笑みを浮かべた青年が奇声と共に目の前に現れる。

というかこの青年、足が速すぎる！
体力も異常…

「うおおおおああ！！」

あらんかぎりの絶叫を上げ、龍は反対方向に走る。

「龍！龍！無事なの？それと、男としてってどういう意味？」

状況が理解できず、ミリアは頭の中がぐしゃぐしゃだ。

「す、すまんうまく説明しろと言われても難しい…というか、頼む！助けてくれ！」

必死な龍の声。

ミリアは考える。

龍がこんなに動揺したことが今まであっただろうか？
かつてない深刻な状況にミリア気を引き締める。

「わかったわ。前にウィリアムと戦った所…ええつと…」

「ウメノキ公園か!？」

「そうそこ!そこで落合いましょう!それまで逃げきって!必ず助けに行くから!だから…」

悲痛なミリアの声。

電話が切れる。よりにもよってこのタイミングでバッテリー切れ。悲しいくらいに不幸だが、最悪の事態は免れた…。のだろうか? 龍はポケットに携帯をしまい、走りながら周りを見渡す。とにかく今は逃げ続ける。ここからウメノキ公園に近い道は…

龍はただひたすらそこを目指して走り続けた。

・ ・ ・

ウメノキ公園にたどり着いたミリアは言葉を失っていた。

「……………龍?」

自分のパートナーは何をしているのだろうか？
ミリアは到底理解できない。
龍はミリアが来たことに気がついていない。
ただひたすら、ひたすらジャングルジムの周りをぐるぐる回っていた。

「いいかげん埒があかないぜ少年A。俺はまだまだ走れるぜ？もう諦めたらどうだ？」

「やかましい！お前があきらめろ！」

回っているのは龍だけではない。白いワイシャツにジーンズというラフな格好をした茶髪の青年もいた。

二人は全力で走っているわけではなく、時々立ち止まり、互いに牽制しあう。

龍が左周りに走ろうとすると青年は右周りで走ろうとする。

それを見た龍は慌てて逆へ…

それを見た青年はまた逆へ…

以下繰り返し。

まさか自分が来るまでひたすらこうやっていたのだろうか？

「とりあえずアレが…魔物…？なのかな？」

ミリアはそう結論付けた。
龍があんなに必死な顔で逃げ回るのだ。きっと恐ろしい能力を持っているに違いない。

ミリアは深呼吸をする。

心を沈め、何度もイメージする。

大丈夫。練習したから出来るはず…

もう一呼吸の後、ミリアは青年に向かって走りだした。

・ ・ ・

「龍！」

凜とした声が耳に届き、龍は勿論、青年も声のした方を向く。

黒衣の少女が走って来ていた。

「激マブ…！」

ミリアを見た青年はボソリと呟き、しばし見とれる。が、それもつかの間…

そうしているうちに青年の目の前まで走って来たミリアの両足が突然地面を離れる。

その瞬間、青年の顔が青ざめる。

この少女の表情は友好的なものではない…！

何をされるか悟り、回避行動をとろうとするが、もう遅い。

「ハッ！！」

次の瞬間、短い掛け声と共にミリアの右膝が青年の顎に叩き込まれ、垂直に突き上げる。俗にいう飛び膝蹴りというやつだ。

「ブルウウウワァ！！」

青年は奇妙な悲鳴を上げて吹き飛ばされ、ベチャリとぼろ雑巾のように地面に落ちた。

ヒラリとミリアは地面に着地する。相当のダメージなのか、青男はピクピクと痙攣している。

「…なんだか…龍が物凄い必死で逃げてたから思わず撃退しちゃったけど…人間…だよな？この人。」

「いや、助かったよミリア！グッジョブだ！」

何処か戸惑い気味なミリアに対して龍は親指を立てる。

ミリアが来てくれなかったら延々と追っかけ回されていただろう。さすがにそれは御免だ。

「と、とりあえずここを離れよう！気を失ってる今のうちに…」

「ハッハッハア！甘い！甘いぞ少年A！MAX缶コーヒーより甘いなあ！俺はなあ！男好きつてよりはぶっちゃけ女の子の方が200倍は好きだ！ましてやそんな黒髪ロングの激マブ美少女のお膝で顎を突き上げられるだど！？むしろ興奮して活力が沸くわあ！ご飯三杯行けるわあ！！」

龍が歩き出そうとした瞬間、青年は高笑いと共にガバツと起き上がる。顎が痛々しいくらい腫れて鼻血まで出ているがなるほど、目は活力に満ちている。

「龍…何だかあの人気持ち悪いわ…」

ミリアが青年を指さして言う。

「安心しろ。それは正しい。それより今さっきとんでもないことを聞いた気がする…」

龍がこめかみに手を当てながら青年を見る。

青年は鼻血を流しながらドヤ顔でこっちをみている。＼シャツが白だから色々と大惨事だ。

「おい、あんたさっき男好きっていうより女の子の方が好きって言ったな？じゃあ何で俺たちを追いかけて回した？」

「えーっと…何て言うか…」

龍が疑問を口にする青年は少し歯切れ悪く口を開く。

「ホラ、目の前から男子高校生がホイホイ歩いてきてたから…ちょっと困らせてやろうと思って道の真ん中で仁王立ちしてみたら…何か思いの外、食い付きがよくてつい調子に乗って…」

「調子にのって？」

「ホモのフリしてみた。」

「……………」

あんまりな理由で龍は沈黙する。

「龍、ホモってなあに？」

「ミリア、気にしないでいい、覚えなくていい。」

ミリアの疑問に龍は額に手を当てながら返す。
頭痛がしそうだ。

「それにホラ……」

青年が更に続ける。

「なんだ？まだあるのか？」

「今高校生って多分テスト期間じゃん？だからテスト以外に焦る要因を作ってみた的な？俺は暇潰しは全力でやる主義だからな！」

ピキ…

ドヤ顔でふんぞり返る青年を見て龍の額に青筋が入る。
暇潰し？それに俺はあんなに必死で逃げたのか？てか、テスト期間
をピンポイントで狙う辺り悪意を感じる。

「いや、しかし少年A。回り道したときのあの絶叫はマジで傑作だ
ったぜ…ププツ…プフツ…！」

プチッ

龍は無言で山吹色の本を取り出す。

「確か心の力は無限じゃないんだよな？アレ？おかしいなあ？今な
らミジヨルを何発でも撃てる気がしてきた。」

「り、龍、落ち着いて。あの人は少し変だけど人間よ？」

ミリアが龍を宥める。

一体どれほど怖い目にあっただろう？

「ぐ…」

龍はしぶしぶ本を鞆にしまおうとする。

ギリギリ良心が打ち勝ったらしい。

「あ…が…」

不意に呻くような声が聞こえる。見ると青年が龍の持つ本を穴が開くほど見つめ、ブルブル震えている。

「お、おい、どうし…」

「とらじ？」

龍が青年に声をかけようとすると、別の方向から声がする。

深い緑色の髪に、青い瞳の5、6才くらいの眠そうな顔の少女が立っていた。

とらじと呼ばれた青年は一瞬少女の方を見てから再び龍の本を見て後ずさり、ジャングルジムに背中を合わせる。

ドサリという音と共に、男の方から手提げ袋がずり落ち、地面にその中身が散らばる。

お菓子やヘアワックス、ヘッドホンとiPod、そして…

「なっ…！」

「…！」

それを見た瞬間、龍とミリアは目を見開いた。

手提げ袋から出てきたのは龍も持つ、魔物のパートナーの証。

瑠璃色の魔物の本だった。

第十話 茶髪の追跡者（後書き）

高校の頃、僕の友人はカツアゲされかけたからホモのフリをしてやり過こしてやったぜ！と、得意げに話していました。

武勇伝っぽいけど、追っ払うためのセリフはかなり恥ずかしかったらしく、後であんなセリフを吐いた自分を殴りたくなったとか。

と、いうわけで妙な男と少女が現れました（笑）

この二人が物語にどのように関わって行くのか？

そして第三の術とは…？

続きは次話で！

最近肌寒くなってきたからなのか、僕の周りでも風邪をこじらせる人が増えています。

かく言う僕も風邪をひきかけました（-_-;）

皆さんも何卒お身体には気をつけて…

それでは次話でまたお会い出来ることを祈りつつ…

ではまた

第十一話 狂乱の女（前書き）

更新が凄まじく遅れました…申し訳ないです。

色々忙しくて（-_-;）

というわけで第十一話です。

誤字・脱字の指摘、感想などありましたら宜しくお願いします！
とても励みになります！

十二話は早めに更新できるといいなあ…
では更新です

第十一話 狂乱の女

逃げることは恥ずかしいことでも悪いことでもない。

本当に恥ずかしくて悪いことは逃げた事実を認めないことだと思う。

By 桜塚龍

龍はいささか拍子抜けした感に苛まれながら目の前の、ついさっき現れた少女がとらじと呼んでいた青年を見る。

鞆から瑠璃色の本が出てきた時は流石に身構えたが、ほんの数秒でそれは無用だったと悟ることになる。

青年はさっきまでのドヤ顔や人を食ったような態度は完全に消え失せ、見ているこっちが悲しくなるくらいブルブル震えていた。

「ヒ……ヒイ……！」

荒い息をつきながら、青年の口から短い悲鳴らしき声が漏れる。

目は龍の山吹色の本から離さない。

「……………」

龍とミリアは互いに目配せをする。

もし……もしも彼が戦う意志がないのなら？

本を燃やす？それもいいだろう。だが、彼のパートナーの魔物が話の分かる相手だったら？

むやみに戦う必要はないかもしれない。

ひとまず龍は相手と話してみることにした。

「おい、あんた…」

「ごめんなさい!!」

会話を始めようとした矢先、青年は地面をスライディングするように滑り込むと、龍の足元にたどり着き、無駄に綺麗な土下座を披露する。

物凄く大きな謝罪の言葉に完全に龍は出鼻を挫かれた。

「え? いや、あの…」

「マジで勘弁してくれ! ここで戦うのはごめんなんだ! てかマジで戦いたくないんだ! 見逃してくれ! 見逃してください! レッツリリス!!」

「魚かお前は!」

龍の突っ込みに青年はまたビクウ! っ と仰け反る。

ただの会話でこんなに怯えられたらラチが明かない。取り敢えず龍は開いていた山吹色の本を閉じる。

気がつくとき現れた緑髪の少女がトテトテと青年の傍まで歩い

てきていた。

よく見ると可愛らしい熊がプリントされたリュックを背負っている。

「とらじ。どこ行つてたの？探したんだよ？」

少女の質問に青年は誤魔化すようにあらぬ方向を見る。

「え、え〜つと…暇潰し？」

少し不満げな顔の少女だったが、青年の返答に更に目が細くなる。

「むう…また女の子ナンパしてたの？」

「いや、今度は男。」

「ならいいけど。」

「いや！よくないだろ！」

目の前の会話に思わず龍が突っ込む。

少女は今気づいたという顔で龍を見ると、こちらに向き直り、ペコリと頭を下げる。

「こんにちは。何だかこの人が迷惑かけたみたいで…ごめんなさい。」

「あ、イエイエお構い無く。大した被害はなかったですし。」

見た目の年齢のわりには丁寧な物言いに思わず龍も畏まる。
この子は妹…？いやしかしこの髪の色は…
龍がそんなことを考えていると少女が口を開く。

「お詫びにランチをご馳走させてほしいんだよ。」

「……はい？」

突然の申し出に龍が目丸くする。
そんな龍の返事も聞かず、少女はリュックを開けてレジャーシートを広げ始める。

「オイ！こいつらは…」

「大丈夫だよとらじ。今日はいっぱいサンドイッチ作って来たから四人で食べられるよ。それよりシート敷くの手伝ってほしいかも。」

慌る青年を無視して少女は準備を始める。
もはや魔物について聞く空気が失われつつあり、龍は流石に焦り始める。

「え？おいちよつと待て。あの瑠璃色の…」

「あ、ごめんなさい、お兄ちゃんそっちの端持つて。」

「おう、わかった。ってそうじゃなくてだな…」

青年が棒立ちで固まっているため、結局レジャーシートを敷く補助は龍がやることになる。

花柄のレジャーシートの上に大きめの弁当箱が並べられた。

青年は若干落ち着いたのか、恐る恐る龍とミリアの方を見る。

「…えーつと少年A、お嬢ちゃん、サンドイッチだから手洗ってきなよ。食中毒とか笑えないぞ。」

「いやだから……わかったよ。」

青年の一言に反論しようとするが、それを飲み込む。
完全に皆で昼食をとるノリだ。
もはやこの状況で話するのは無理だろう。

そう思った龍はしぶしぶ水飲み場へ向かっていった。

一連のやりとりを見ていたミリアはやれやれといった風に肩を竦め、レジャーシートの上の二人に目を向ける。

…見たところ悪い人達には見えない。本への異常な怯えようが気になるが、それも話しているうちに明らかになるだろう。お昼時だし丁度いいといえば丁度いい。

「サンドイッチか…紅茶が欲しいわね…。」

ミリアはそう呟きながら龍の後を追って水飲み場へ向かった。

・ ・ ・

弁当箱には色とりどりのサンドイッチが並んでいた。

「これがジャムとマーガリン。こっちがチョコクリームにメイプルシロップ。ピーナツバターにあんこだよ。召し上がれ。」

少女がエッヘンとばかりに胸を張る。
成る程、四人で分けて正解だ。

これを一人で全部食べたりにしたら間違いなく糖尿病まっしぐらコー
スだ。

「ま…また甘いサンドイッチのフルコースか…そろそろ飽きてきた
ぞ。たまにはハムとかカツとか卵のサンドが食べたい。」

青年がゲンナリした顔でサンドイッチを見る。

またということは以前もこれを全部食べたのだろうか？

そんなことを考えながら横を見ると、ミリアがひきつった顔で目を
泳がせている。

「ミリア？」

「卵…タマゴ…たまご…うつ…」

卵粥の件をまだ引きずっているらしい。

目の前は目の前でサンドイッチの具を巡って痴話喧嘩が始まっている。
る。

「とらじ。ボクの手作りサンドイッチが不満なの？」

「い、いや…たまにはほら…甘いだけじゃなくてさ…」

「肉や卵は腐りやすいからダメなんだよ！」

「はっ！」

少し悲しげな顔の少女に慌て青年が弁明する。
そして少女の何気ない一言がミリアに突きささる。

「いや、ジャムとかマーガリンだって腐る……」

「腐ったものと腐ってないものを見分けるなんて簡単なんだよ。期限を確認すればいいんだもん。」

「じゃあ卵とかハムもそうしてくれよ。」

「……甘いものは疲れた身体にいいんだよ。」

「……やれやれ。結局がお前が食べたいのね……降参だよリトルレディ。」

「……とらじ。そのリトルレディって言い方……すごく気持ち悪いか
らやめて。」

「…もう少しオブラートに包んでくれよ…」

漫才みたいだ。

そんな感想を龍は抱く。

「う…消費期限…ちゃんと知ってるんだ…私なんか…私なんか…うう…」

こっちはこっちで地面にめり込むのではないかというくらい落ち込んでいる。

向こうが見た目自分より年下というのもダメージ大きめ。

「やれやれ…」

どうすればいいこの空気…

そう思いながら龍はチョコレートサンドに手を伸ばす。

「おっ、旨い。」

一口かじると口内に広まるまろやかな味。

何だかんだ言ってテストの後の疲れた身体に甘い食べ物はありがたかった。

―食後

「もっと！もっと高くよ！」

「ハイハイ。でもあんまり強くやり過ぎると振り落とされるんじゃないかしら？」

「大丈夫だよ！ハ？ジのブランコと違ってこれは公園のブランコだもん！」

「…ハ？ジ？」

「ミリア知らないの？アニメだよ。アレに出てくるブランコって実際に乗ると…」

公園のブランコでミリアと少女は遊んでいた。
少女がブランコに乗り、ミリアが後ろから押す。
その光景は仲良しな姉妹のようだった。

それを少し離れた所で龍と青年が見守る。

「女の子はいいねえ…心を潤してくれる。神様が作った美の極みだよ。そう思わないか？少年R。」

「…色々と突っ込みたくなるセリフはやめろ。あと少年Rってなんだよ。」

目を細めながらミリア達を見守る青年を龍は不審者でも見るような目で見る。

青年はそんな龍の視線をもともせずには笑う。

「いや、桜塚龍だし？」

「じゃああんたは青年Tだな。」

「遠藤虎治だ。忘れるなよ？」

虎治はドヤ顔で龍を見る。

これほどドヤ顔が似合う男も逆に珍しいのではないだろうか？
そう思いながら龍はミリア達に目を向ける。

「ミリアとルーナ…ずいぶん打ち解けたみたいだな…」

「まあ女の子だからな。」

「関係あるのか？」

「大有りさ。」

大真面目に答える虎治を見て龍は肩をすくめてから、真っ直ぐに虎治を見る。

「…あの子が魔物なのか？」

「……やっぱり聞いちゃうか？」

「そりゃ聞くさ。というか、本を持っている者同士で戦うどころか飯食ったなんて初めてだよ。」

「フム…奇遇だな少年R。俺も初めてだ。本来はこんなことあり得ないんじゃないか？」

おどけたように虎治が笑う。

確かに見た目は楽しげだが、目が、目だけは油断なく龍をみている。それを見た龍はますます真剣な顔になる。

「…戦わないのか？」

「…戦いたいのか？少年R。」

交差する視線。

嫌な空気が流れる。

向こうではミリアとルーナのキャツキヤと笑う声。龍は自分達が座っているレジャーシートだけ世界から切り離されたかのような錯覚に陥る。

暫くの沈黙の後、先に口火を切ったのは虎治の方だった。

「最初にあんたが本を出したときはそりゃあもつべびったさ。危うくチビるところだったぜ。マジで。」

「……………」

龍は黙って耳を傾ける。

虎治はただ話続ける。

「けどさ。怯える俺を見て迷った顔したり、律儀に俺やルーナに突っ込み入れるあんたを見て思ったんだ。」

「……？」

「アレ？こいつらもしかしてイイ奴らなんじゃね？」

「それだけでかよ！随分軽いなあんだ！」

虎治の言葉に龍の力が抜け、思わず突っ込みを入れる。

虎治はカッカと笑っている。

どうもこの男相手にシリ阿斯な空気は長続きしないらしい。

「そう生真面目な顔になるなよ少年R。貞操をかけて熱いバトル（追いかっこ）を交わした仲じゃないか。」

ニツと虎治が笑顔になる。

歯が無駄に白い。

取り敢えず龍は無言で本を出す。

「ヒッ！ちょちょちょ、ちょっと待て！出すな！それ出すなあ！」

途端に虎治が怯えた顔になる。
最初の怯えっぷりに比べたら大分落ち着いたがそれでも足はガクガク震えている。

「…条件反射でなるのか…一体どんな目にあっただ？」

最もな疑問を龍は口にしてみる。

「……まだ本を持ってなかった頃…ある本の持ち主にさんざん痛め付けられ、ルーナに出逢って本を手に入れたら手に入れたでそいつの行動がエスカレートするわ、他にも魔物が襲ってくるわで散々だった。」

「……………」

震えながら語る虎治を見て龍は何も言えなくなる。
が、ある点が気になってまた聞き返す。

「待て、どうして本を手に入れる前に襲われたんだ？巻き込まれたのか？」

自分のように突然襲撃されて土壇場で本の持ち主になったのならわかる。

が、魔物と出会ってもいない頃に魔物とそのパートナーに襲撃され続けるのは明らかにおかしい。

「えーっと…」

龍の問いに突然虎治が口ごもる。
心なしか目が泳いでいる。

「その本の持ち主さん、恋人だったんだよね？数ヶ月前に別れた。とらじが振ったんだよね？」

後ろからルーナの声。

ブランコ遊びを終えたのかいつの間にかミリアと一緒に戻ってきていた。虎治がバツの悪そうな顔をする。

大体読めてきた。

「つまりアレか？別れた彼女さんがたまたま魔物のパートナーになって振られた腹いせに痛め付けられた。で、不幸にもその後であなたも魔物のパートナーになってしまい、追い回されていると。」

「だ、大体そんな感じデス…」

ひきつった顔で虎治が返事をする。

しかしまあ男女の関係の纏れまでこの戦いに絡んでくるとは…

龍とミリアは同情していいのかいけないのか分からず、何とも微妙な表情で虎治を見る。

「うおい！なんだその表情は！マジで死ぬかと思ったんだぞ。ほらこれ見るよ！」

そう言つて虎治はワイシャツを脱ぎ、そこそこ引き締まった肉体を披露する。

「何故にここで脱ぐ？」

「常識を疑うわ。」

「とらじ。パートナーとして恥ずかしい。」

龍、ミリア、ルーナが口々に苦いコメントをもらす。

学生と少女の前で上半身をさらけ出す男…他の人に見られたら通報されかねない。

「違うよ！突っ込むとこそこじゃなくてさ！ほらこの傷！」

「ん？……！！」

虎治に促され改めて見ると背中には無数の切り傷や火傷のような跡。

余りの痛々しさに龍が思わず息を飲む。

「…殆どは元カノにやられた。後は他の魔物だな。この火傷とか。」

傷の一つを指差しながら虎治が話す。

それを見ていたルーナは一瞬悲しげな表情を見せた後、くるりと踵を返してブランコの方へ歩いて行ってしまった。

暫くルーナの後ろ姿を見ながらミアは少し迷ったような…何かを聞いたげな顔になる。

そんなミアの様子を見た虎治はいそいそと上着を着込みながら口を開く。

「……………何か言いたげだな？お嬢ちゃん。」

「……………」

虎治の問いかけにミリアは暫く俯いていたが、やがて真っ直ぐに虎治の顔を見る。

「聞いてもいいかしら？」

「どうぞ。」

「あなたは魔物と出会ったことで傷つき、下手したら死ぬような目にあっている…それこそ本を見たらブルブル震えるくらいの特ラウマまで植え付けられている。…なのに未だに本を持ち続けているのはどうして…？」

「……………」

虎治は黙っている。視線は一人でブランコを漕ぐルーナ。

「俺は…さ…」

虎治が話し始める。

「なんと言つか…あの子がほっとけなかったってのもある。けどあ

の子に協力している一番大きな理由があつてさ……」

少し照れくさそうに頬をかく。

そんな虎治を龍とミリアは黙って見つめる。

「恥ずかしすぎるから詳しくは言えないが、俺、あの子に命を救われているんだ。今もって言っても過言じゃない。俺がこうしてここにいられるのはルーナのお陰なんだ。そんなルーナが王になりたいと……そう言った。俺はその夢を叶える手伝いをしてやりたい。戦うのは怖い……めちゃくちゃ怖いさ。けど、ルーナを、友達を失うのは……もっと怖い。」

よく見ると虎治の手は震えていた。

その様子を見た龍は虎治に軽いシンパシーを覚えていた。

色々と変態じみた面はあるが、行動理念は龍と同じ。

彼もまた。自分のパートナーとの絆を守りたいのだ。

ふと隣のミリアを見る。静かに虎治を見ていた彼女はゆっくりと口を開いた。

「ビドュロン！」

が、ミリアの口から言葉が発せられることはなかった。

代わりに後方……

ルーナのいる方向から凄まじい音が響く。

「！」

龍がぎよつとして振り向く。

視線の先にはブランコから弾き飛ばされたルーナの姿があった。

「ルーナ！」

虎治がすぐさまルーナの元へ走り、小さな体を抱き起こす。
幸いなことにダメージは少ないようだ。

「ルーナ！」

「大丈夫？」

遅れて龍とミリアが駆けつける。ルーナは虎治に支えられながらゆつくり立ち上がり、龍達に向かって何でもないというかのように笑う。

「大丈夫だよ…それより…」

ルーナが前を見る。

釣られて向けた目の前の人物に龍は寒気を覚えた。

それほどまでに視界の二人組は一度見たら忘れられないような雰囲気
気を纏っていた。

片方は女性。

腰を軽く越える長さの所々跳ねたざんばんな黒髪。白いワンピース。片手には焦げ茶色の本。

ホラー映画で主役を張れるような風貌だ。
そしてその傍らには…

「ヒッ…」

虎治が短い悲鳴をあげる。

骸骨のような顔に、見上げる程の巨体。

SF物の映画に出てきそうな怪物と称するに相応しい姿だった。

「見つけた… やっと… 会いたかったよ… 虎治くん」

虎治から視線をそらさずに女が抑揚のない声で呻くように呟く。
目には歓喜とも狂気とも取れる妖しい光が宿っている。

虎治はブルブル震えていた。

「虎治… まさかこいつらが…？」

龍の質問に虎治はコクコクと無言で頷く。

成る程…トラウマになるのも無理はない。
龍は納得する。

目の前の魔物は今まで龍が見てきた魔物の中で最も禍々しい姿をしていた。

「虎治クン…虎治クン…私…ずっと追いかけて来たよ？島根から…
ひたすら追いかけて来たよ…？だから…」

女がゆっくりと話し始める。

可愛い声だが、まわりつくかのような粘着性も兼ね備えた不思議な声。女は話ながらも男から熱っぽい視線を外さない。

「私と…結婚してください…」

「……………」
「……………」

突然の申し出に龍とミリアは思わず啞然とする。

ルーナは慣れたのか少し嫌そうな顔。

虎治に至っては半泣き状態だ。

「結婚しよ？結婚するよね？結婚しなきゃ！結婚して！結婚しやがれ！け・っ・こ・ん！！」

怖い女性はよく般若に喩えられるが、まさにその喩えが当てはまるかのような表情と口調だった。
どうやらトラウマの要因は魔物だけではなさそうだ…

「う…が…」

声が上手く出ない虎治。そんな虎治の前にルーナが両腕を広げて立ちほかかる。

「とらじを…とらじをもう苛めないで…！」

毅然とした態度のルーナを見て女は顔を歪める。女性の顔とはここまで恐ろしく変貌するものなのだろうか？

「苛める？いじめる？イジメルウ！？この私が？バカいわないですよ！チビブス！虎治くんフォーリンラブな私がそんなことするわけない！これはね…？罰なの！だって虎治くん…私と愛しあっているはずなのに結婚してくれないんだもん！恥ずかしがるにも限度があるよ！エイプリルフルでもないのに別れるなんて言い出して…照れてるだけだよな？それとも親御さんの反対？安心して！そんな親ぶっ殺してあげる！だから結婚しよう？ね？虎治くん？…そこにいるチビブス…邪魔だなあ…壊しちゃおうかな…」

ニイツと歪んだ笑いを浮かべながら、女が近づいてくる。
白く細い腕が獲物を狙う蛇のように伸びてくる。もう片方の腕に抱える本からはまるで威嚇するかのように光が漏れる。

「ぐ…！」

虎治が縮こまる。

が、彼は震えながらもルーナを庇うように後ろに引つ張った。
その様子を見てますます女の目が細くなる。

「そう…そっか…虎治くん騙されているのに気づいてないのね…
ならしいよ…ジーザ。」

女の隣にいたジーザと呼ばれた巨体の魔物が一步前に出る。

「やつとか…待ちわびたぞ祥子。さっさとスタボロにしてやるっぜ
え！男はミンチ、ガキはぺしゃんこだあ！」

厳つい外見に相応しい残忍な笑いを浮かべながらジーザが笑う。

巨大な腕が虎治とルーナに向けられ、祥子の本が一際輝く。

「ビュロン！」

呪文と同時に虎治はルーナを守るように抱き抱える。

ジーザの腕から出されたのは斑点の着いた巨大な六本の鞭。風を切る音と共にうねるように虎治達に迫る。

「ギルシルド！」

が、鞭は二人に届くことはなかった。

突如出現した黒い盾に鞭は弾かれ、跳ね返った鞭は消滅する。

「…え？…へ？」

突然の出来事にルーナを庇いながら虎治はポカンと口を開ける。

暫く放心状態になっている彼の両脇に龍とミリアが並び立つ。

龍の片手には輝く山吹色の本。

「……何か反射的に術唱えちゃったけど……」

「問題ないと思うわ。寧ろさっきまで遊んでて、ランチまでご馳走になった相手をほっとく方が大問題よ。」

頬を掻きながらばやく龍にミリアが返答しつつ祥子とジーザを見る。突然の介入者の出現に祥子はワナワナと震えている。

「なによ……なによなによなによなによなによなによなによなによ……あんだ達まで私の邪魔するの……？バカにして……本命は……男……じゃないわよね。そっちの黒髪の女？虎治クン髪の長い子好きだもんね……でも残念……髪は私の方が長いしい……」

ブツブツ唸る祥子の言葉にミリアが少しげんなりした顔になる。

「……こういう人間もいるのね……小説の中だけだと思ってた……」

「（追っかけ回されたっつのは黙っておくか……）」

最近冷や汗が多いな…等と思いながら龍が引きつつた笑いを浮かべる。

女って怖い…

「そうイライラするなよ祥子…今日は本を二冊も燃やせるんだ。ラツキーだぜ…この俺様が王に近づく日が早まるってもんだ。」

ジーザがニヤニヤと龍と虎治を交互に見る。

龍は油断なく本を構え、後の虎治に目を向ける。強敵に見えるが、二人で共闘すれば…

「なあ虎…」

「ごめん…ごめんなあ…少年R…俺は…どうしても…」

ブルブル震えながら、苦悩を浮かべた表情で握り拳を握りしめている虎治に思わず龍は言葉を飲み込む。

「ルーナを守りたいんだ！」

次の瞬間、虎治はルーナを抱えて踵を返すと、一目散に逃げ出した。龍とミリアはポカンとした顔でそれをただ見送り、祥子は憤怒の表情でそれを睨み付ける。

「そう…そつかあ…また逃げるんだね…虎治クン…!!」

焦げ茶色の本が輝き、それを見たジーザが邪悪な笑みを浮かべる。

「ヒヒヒッ…そこなくっちゃなあ！逃げ惑うカス共を後ろから叩きつぶす瞬間！コレが最高だぜ！」

ジーザが腕を上げる。

「ビドユロン！」

六本の鞭が走る虎治の無防備な背中に迫る！が…

「ギルシルド！」

虎治達のすぐ後ろに逆五芒星の盾が展開され、轟音と共に再び鞭を弾き飛ばす。

「……便利な盾だなあオイ？」

ジーザが忌々しげにミリアを睨むが、ミリアはその視線を涼しげな顔で受け流す。

一方、龍は虎治が完全に公園を出るまで見送っていた。

『戦うのは怖い…めちゃくちゃ怖いさ。けど、ルーナを、友達を失うのは…もっと怖い。』

龍は虎治の言葉を思い出しながら息を大きく吸う。

「ちゃんと逃げろよ！虎治！！」

声は届いたかどうかは分からない。だけど叫ばずにはいらなかった。

パートナーを失いたくない気持ちは痛い程よくわかる。

だから一見龍達を見捨てるような虎治の行動も責める気にはならな

かった。

いや、そもそも責めるなどお門違いもいい所だ。
別に共に戦おうと同盟を組んだわけでもない、ただ…

「サンドイッチ一緒に食っただけなんだよなあ…」

龍が間の抜けたような声を聞いてミリアはクスクスと笑う。

「私の時はラーメンだったわよね？食べ物之恩に弱いのか？」

「いや、そうじゃないけどさ。まさか他の魔物を助けるために戦うことになるとは思わなかった。」

「そうね…リベツカの時とは違って今度はパートナーもいるのにね。
まあ…強ち間違った選択ではないんじゃないかしら？」

龍に返事をしながらもミリアは臨戦態勢をとる。さっきから祥子が
やたらおっかない表情で此方を睨んでいるのだ。

「優しい人と物騒な人…王様になって皆を幸せに出来るのはきつと

前者よ。だからこの場であの人達を助けることは私達の目的にもつながるんじゃないかしら？」

「ん…そうだな。」

イタズラっぽく微笑むミリアに龍がニヤリとした笑いで同意する。そんな様子を見ていたジーザは嘲笑うかのような表情で二人を見る。

「オイオイ…軟弱な王様の下なんざ俺はごめんだぜ。俺は王になる…どんな手を使ってもだ。王になって好き放題するんだよ！邪魔してくれなよお…！」

「…おしゃべりはもういいよジーザ…さっさとコイツら壊しちや。虎治クンを捕まえなきゃ…」

一人でヒートアップしていくジーザとは対象的に祥子はさっきまでの色んな意味で情熱的な表情はナリを潜め、完全に冷めた態度で本を開く。

「ミリア…ぶつつけ本番だけあの術を使うぞ！」

「ええ！お願い！」

負けじと龍が本を構え、両者は睨み合う。

山吹色と焦げ茶色の輝きが互いの本から迸る！

「第三の術…ティルヴィルク！」

戦いが始まった。

・ ・ ・

「ハア…ハア…」

公園からだいぶ離れた場所で虎治は息を切らしていた。
握り拳は未だに硬く握りしめられている。

「虎治…大丈夫？」

ルーナが心配そうな声で虎治に話しかける。
が、虎治は答えない。

苦悶の表情のまま、虎治は近くの電柱に握りこぶしを叩きつける。

「くそ…俺は…なんで…！くそお…！」

公園を出る前にかけられた龍の言葉が脳裏から離れない。

龍とミリアがいなければ今頃自分たちはどうなっていただろう？
考えるだけでぞっとする。

今日まで逃げ延びれたからといって今回も逃げ切れるとは限らない
のだ。

虎治は来た道を振り返る。

追ってくる気配はない。恐らくあのまま龍達と戦闘に入ったのだろ
う。

虎治はブルツと身震いする。

抱くのは強い罪悪感と自己嫌悪。

今まで何体かの魔物を見てきたが、祥子とジーザはの中で最も強
いと言っても過言ではない。

そんな相手の脅威が今まさに自分が置いてきた、自分を助けてくれた者達に向けられている…

ついさっきまで自分たちと仲良くランチを食べ、遊んだ相手を囿に、自分達が生き残った…

虎治はふと自分の瑠璃色の本を見る。

一瞬救援に…などといった考えが浮かぶが、すぐに却下する。

「（駄目だ…俺達はともに戦ったことなんてほとんどねえ…今更助けに行ったところで足手まといになるだけだ…）」

再び拳が電柱に叩きつけられる。

「（結局俺は…負け犬なのか…何も…出来ない…）」

二発、三発…拳が電柱に吸い込まれていく。

悔しげな虎治の顔をルーナはじっと見つめていた。が、やがて意を決したように静かに口を開く。

「とらじは…今どんな気持ち？」

「！？」

不意をついたルーナの言葉に虎治は思わず顔を向ける。

「どんな気持ちって…」

虎治の顔に戸惑いの色が浮かぶ。
構わずルーナが続ける。

「私はね…何だかもややもやした気持ち。今まではとにかく逃げるだけで、とらじが傷付くのを見る度に凄く悲しい気持ちになっていたハズなんだよ…なのに、今日はとらじはケガ一つしてなくて、喜ぶべきなのに…胸のもやもやが引かないの…」

「……………」

虎治はルーナを見つめながらミリアに何故戦うのかを問われた時を思い出す。

なぜ彼女はあんなことを聞いてきたのか？

恐らく彼女もルーナと同じ。戦いの中で自分のパートナーが傷付くのが嫌なのだ。

それでもあの二人が一緒にいるのはそれを超える何かがあるからだろう。

「…何だ。」

虎治は何でもないかのように呟きながらそれに気がつく。
簡単なことだった。

あの二人もきつと自分たちと同じなのだ。

「とらじ…」

ルーナが泣きそうな目で虎治を見上げる。

視線が交差する。虎治は黙ってルーナの頭に手を置き、ぐしぐしと少し荒っぽく撫でる。

暫く迷った表情だった虎治はやがて何かを決意したかのような表情でゆっくりと話し始める。

「俺さ…何て言うか…今凄くバカなこと考えてる。せつかく逃げてきたのに…逃がしてもらったのにさ…」

「……………」

「お前の目的…駄目にしちゃうようなことバカなことなんだけど…」

「大丈夫。とらじがバカで変態だったのは知ってるよ。自覚してな

「かつたの？」

「うおい！何気に酷くね！？」

「それでも…」

「！？」

「ボクはそんなバカな考えが間違いじゃないって信じたい。それにせつかく龍お兄ちゃんやミリアと仲良くなったんだよ？あのままお別れなんて絶対にヤダ！」

潤んだ目で、それでも凜とした表情でルーナが叫ぶ。
それを見た虎治もまた大きく頷いた。

「ああ…！ああ、そうだな！あのままお別れなんて後味が悪すぎる！こつちがサンドイッチ奢ったんだ！次はお返しにミリアちゃんの手料理が食べたい！」

祥子とジーザへの恐怖はまだ残っている。
それでも虎治は震える手を必死で握りしめ、無理やり己を鼓舞する。
あの二人と力を合わせれば…！もしかしたら勝てるかもしれない。
恐怖を乗り越えることが出来たなら…！それはルーナを守るための

新たな力になるかもしれない…！

瑠璃色の本を携えて虎治とルーナは元来た道を全力で引き返す。

「（すまない…少年R！待ってるよ…今行く！）」

恐怖をぬぐい捨て、二人は走り出した。
宿敵と友が待つ戦場へと…

「…とらじ」

「何だ？」

「さっきの発言、何気に欲望丸出しだったんだよ。鼻の下伸びてて
気持ち悪かった。」

「…ゴメンナサイ」

第十一話 狂乱の女（後書き）

原作でも北海道って出てたのでこちらでも島根という県名を出してみました。はい、出したかっただけです。

ちなみにウメノキ町は位置的には関東辺りということで（汗）

それと気づいた人もいるかも知れませんが、本編に出てきたジーザは原作の番外編に出てきた魔物です。王を決める戦いに出ていたのかどうかは明らかにされていませんでしたが、虎治にトラウマを植え付けるのに丁度いい敵つい容姿をしていたので戦いに参加させてみました。

さて、次回はバトル入ります（何気に久々！）
拙い文ですが頑張って書いていこうと思います！
では次話で出会えることを祈りつつ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546t/>

平行世界黙示録～黒い波動～

2011年11月13日17時51分発行